

史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡 越堂たら跡整備基本計画書



令和3年（2021）3月
島根県出雲市

(表紙：越堂たら跡上空から田儀港を望む)

序

田儀櫻井家は、出雲市多伎町奥田儀を本拠地として江戸時代初期から約250年間にわたってたら製鉄を営み、最盛期には全国でも屈指の鉄生産地帯である出雲国で一二を争う産鉄量を誇る鉄師にまで成長を遂げました。また、製鉄業によって地域経済の発展に寄与するだけでなく、田畠の開墾などにも尽力し、地域の活性化に貢献しました。現在、田儀櫻井家のたら製鉄遺跡は、田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会を中心とする地元の方々の献身的な保護活動によって良好な状態で保たれています。

平成15年(2003)11月に旧多伎町が開始した総合調査は、平成17年(2005)3月の市町村合併後の出雲市に継承され、田儀櫻井家たら製鉄遺跡の発掘調査と史料調査を両輪として調査研究が進められてきました。これらの成果によって近世たら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として評価され、平成18年(2006)1月に宮本鍛冶山内遺跡と朝日たら跡が国史跡に指定され、さらに平成21年(2009)2月には聖谷たら跡と越堂たら跡が追加指定を受けました。現在では、史跡や関連遺跡の調査研究のほか、史跡の整備や活用にも積極的に取り組んでいます。

本書は、越堂たら跡の整備基本計画についてまとめたものです。越堂たら跡は田儀櫻井家の製鉄経営を支えた基幹的な海岸部のたら場跡で、山間部に立地して広域におよぶ他の田儀櫻井家たら製鉄遺跡の導入部でもあります。越堂たら跡をどのように整備していくのかを定める計画は、史跡を含め今後の田儀櫻井家たら製鉄遺跡における整備の方向性を決定付ける重要な役割を担っています。

越堂たら跡の整備内容は、平成20年(2008)3月に策定した「史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存管理計画」および平成24年(2012)11月策定の「史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備活用基本構想」を骨子としており、史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会や、保存会を代表とする地元の方々と整備内容の検討を重ねて基本計画を策定し、計画書としてまとめることができました。

最後になりましたが、ご指導やご協力をいただきました整備検討委員会の委員の方々、文化庁、島根県教育庁文化財課や関係者の皆様に心より謝意を表するとともに、普段から遺跡の保護活動にご協力をいただいている地元の方々や保存会の皆様に深く感謝いたします。

令和3年(2021)3月

出雲市長 長岡秀人

例　言

1. 本書は、史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡の越堂たら跡（島根県出雲市多伎町口田儀 910 番 51 ほか）における整備基本計画書である。
2. 整備基本計画の策定および計画書の作成にあたっては、史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会（平成 22 年〔2010〕1 月設立）および田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会（平成 24 年〔2012〕3 月設立）、その他関係機関などから指導や助言を得ながら計画内容の検討を行った。
3. 史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会の委員、関係機関による指導・助言、事務局の体制は下記のとおりである（敬称略、順不同）。

史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会委員（令和 2 年度〔2020〕）

専　門　坂井秀弥 公益財団法人大阪府文化財センター 理事長（元 奈良大学文学部 教授）（委員長）
田中義昭 元 島根大学法文学部 教授
和田嘉宥 米子工業高等専門学校 名誉教授
角田徳幸 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 調整監
地　元 河上　清 田儀櫻井家たら製鉄保存会 副会長
玉川恵一 田儀櫻井家たら製鉄保存会 理事（元 多伎地域土木委員会 会長）
梶谷宗克 田儀櫻井家たら製鉄保存会 理事（元 田儀地区連合自治会 会長）
山崎幸一 田儀櫻井家たら製鉄保存会 会長（副委員長）

指導・助言（令和 2 年度〔2020〕）

中井将胤 文化庁文化資源活用課 整備部門（記念物）・文化財調査官
稻田陽介 島根県教育庁文化財課 文化財保護主任

事務局体制（令和 2 年度〔2020〕）

藤原英博 出雲市市民文化部 部長
片寄友子 出雲市市民文化部次長兼文化財課 課長
大樋智徳 出雲市市民文化部文化財課 主査
原　俊二 同 課長補佐
梶谷淳司 同 係長
山田浩子 同 主任
幡中光輔 同 主任
広瀬耕治 出雲市多伎行政センター市民サービス課 課長

4. 本書の作成にあたり、次の方々や機関などから整備計画図面作成に係る関連資料の提供、3次元測量および写真撮影の許可、写真データの提供および掲載の許可を得た。記して感謝申しあげる。
- 雲南市教育委員会 奥出雲たらと刀剣館 奥出雲町役場地域づくり推進課・商工観光課
 公益財団法人鉄の歴史村地域振興事業団 国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所
 萩市観光政策部文化財保護課 萩市教育委員会 安来市教育委員会 安来市和銅博物館
 井原建幸 勝部正志 山崎久和
5. 整備基本計画策定に係るコンサルタント業務は株式会社寺本建築都市研究所に委託し、業務で作成した整備計画図面などを本書で使用した。なお、整備計画図面に係る3次元測量および測量図面などの作成は、TDM テックに委託した。
6. 本書の編集は、職員および株式会社寺本建築都市研究所の協力を得て幡中が行った。



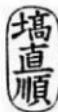
可部屋櫻井家
(中輪に抱き柏)



田儀櫻井家
(丸に立ち楓の葉)



田儀櫻井家たら製鐵遺跡の統一マーク
(平成 24 年 [2012] 作成)



商取引などの際に文書に使用された印。家紋や屋号、たら場の名前のほか、
 11代目当主運右衛門直順が祖先の姓「塙」を名乗った印もある。
 (可部屋櫻井家の祖は大坂夏の陣で活躍した塙団右衛門直之といわれている)

田儀櫻井家の印判

目 次

第1章 越堂たら跡整備基本計画の策定	1
第1節 整備基本計画策定の目的と背景	1
第2節 史跡の現状と課題	7
第3節 整備基本計画策定の経緯	10
第4節 整備基本計画策定の対象範囲	13
第2章 田儀櫻井家たら跡遺跡を取り巻く環境	17
第1節 出雲市の位置と概要	17
第2節 出雲市の地理的環境	18
第3節 出雲市の社会的状況	25
第4節 出雲市の歴史的環境	27
第5節 出雲市の文化財の現状	37
第3章 田儀櫻井家のたら跡とその特質	41
第1節 田儀川流域周辺の歴史的環境と製鉄関連遺跡	41
第2節 田儀櫻井家の沿革	45
第3節 田儀櫻井家のたら場・鍛冶屋跡	47
第4節 たら跡製鉄経営にみる田儀櫻井家の独自戦略	50
第4章 越堂たら跡の調査成果と簡易整備	53
第1節 越堂たら跡の調査成果	53
第2節 越堂たら跡現地の簡易整備	56
第5章 越堂たら跡整備の基本理念と基本方針	59
第1節 基本理念	59
第2節 基本方針	62
第6章 越堂たら跡整備基本計画	63
第1節 整備計画の概要	63
第2節 越堂たら跡現地の整備計画	64
第3節 ガイダンス施設の整備計画	69
第4節 周辺看板および施設看板の整備計画	75
第7章 今後の事業計画と維持管理	77
第1節 越堂たら跡整備の年次計画	77
第2節 維持管理と運営体制の検討	78
第3節 今後の展望と課題	80

挿図目次

第 1 図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の分布	1	第 38 図 豊伊川放水路（手前が豊伊川）（北東から） (写真提供：国土交通省 中国地方整備局 出雲河川 事務所)	32
第 2 図 保存会による宮本鍛冶山内遺跡内の草刈り	4	第 39 図 現在の口田儀のまちなみと田儀港 (北東から)	36
第 3 図 保存会による宮本鍛冶山内遺跡のガイド	4	第 40 図 出雲市の指定・登録文化財の分布（土地と 一体となった文化財を表示）	38
第 4 図 保存管理計画	4	第 41 図 宮本鍛冶山内遺跡 金屋子神社本殿の保存 修理状況（左）と完了状況（右）	40
第 5 図 整備活用基本構想	4	第 42 図 宮本鍛冶山内遺跡 智光院本堂の保存修理 状況（左）と完了状況（右）	40
第 6 図 総合ガイドブック	4	第 43 図 宮本鍛冶山内遺跡 田儀櫻井家墓地の保存 修理状況（左）と完了状況（右）	40
第 7 図 整備内容の検討状況（第 15 回委員会）	5	第 44 図 宮本鍛冶山内遺跡 金屋子神社拝殿の保存 修理状況（左）と完了状況（右）	40
第 8 図 現地簡易整備の視察状況（第 15 回委員会）	5	第 45 図 田儀川流域周辺の主要遺跡と田儀櫻井家 たたら製鉄遺跡の分布	42
第 9 図 整備内容の検討状況（第 4 回地元協議会）	5	第 46 図 宮本鍛冶山内遺跡周辺の製鉄関連遺跡の 分布と範囲	44
第 10 図 保存会の現地見学状況	5	第 47 図 屋敷谷たたら跡全景	44
第 11 図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡の ゾーニング	7	第 48 図 屋敷谷たたら跡の製鉄炉	44
第 12 図 遺跡説明看板（案）・社会科部総会での説明 の様子（上）と主な意見（下）	11	第 49 国 茂ヶ原奥寺たたら跡全景	44
第 13 国 アンケート調査の集計結果	12	第 50 国 圣谷奥寺遺跡全景	44
第 14 国 『田儀村誌』掲載の越堂たたら山内 建物配置図	13	第 51 国 田儀櫻井家の系譜図	46
第 15 国 田儀川沿いの水路跡	14	第 52 国 宮本鍛冶山内遺跡 大鍛冶場跡	48
第 16 国 6代目当主が頼むの地蔵 (正面に向かって右)	14	第 53 国 宮本鍛冶山内遺跡 本宅跡背面石垣	48
第 17 国 越堂たたら跡の史跡指定範囲	14	第 54 国 朝日たたら跡の床釣り	48
第 18 国 越堂たたら跡整備基本計画策定の 対象範囲	15	第 55 国 聖谷たたら跡の床釣り	48
第 19 国 越堂たたら跡周辺の遠景（南から）	16	第 56 国 越堂たたら跡高殿全景	48
第 20 国 越堂たたら跡周辺の遠景（北から）	16	第 57 国 越堂たたら跡の床釣り	48
第 21 国 出雲市の位置	17	第 58 国 梅ヶ谷尻たたら跡の床釣り	49
第 22 国 繩文時代から弥生時代の島根半島および 出雲平野の地形変遷（中村 2014 に加筆）	18	第 59 国 加賀谷たたら跡 金屋子神社	49
第 23 国 出雲市地形	19	第 60 国 海のたたら（越堂たたら跡遠景）	51
第 24 国 出雲国風土記の代表的なゆかりの地	20	第 61 国 山のたたら（宮本鍛冶山内遺跡遠景）	51
第 25 国 経島のウミネコ	21	第 62 国 田儀櫻井家が経営したたたら場・鍛冶屋の 操業期間（左）と産鉄の流れ（右） (左は角田 2011 に加筆)	51
第 26 国 立久歎峡	21	第 63 国 陸船による資源調達（砂鉄・木炭）と 産鉄の主な販路	52
第 27 国 出雲市の気候（平均：昭和 56 ~ 平成 22 年 (1981 ~ 2010)）	22	第 64 国 越堂たたらの高殿内部の復元	54
第 28 国 出雲平野東部と斐伊川・宍道湖 (南西から)	24	第 65 国 越堂たたらの床釣り模式図	54
第 29 国 築地松	24	第 66 国 越堂たたら跡の主な発掘調査成果オルソ図 (平成 25 ~ 29 年度 [2013 ~ 2017])	54
第 30 国 神門通り	24	第 67 国 越堂たたら跡高殿周辺全景	55
第 31 国 稲佐の浜	24	第 68 国 高殿内部の遺構	55
第 32 国 木綿街道	24	第 69 国 押立柱 4 の礎石と墨書き土器	55

第 70 図	高殿石垣（南面中央）の造り替え痕跡と 暗渠 55	第 105 図	出雲弥生の森博物館における 田儀櫻井家たら製鉄遺跡の展示状況 (左：平成 28 年度〔2016〕速報展 右：令和元年度〔2019〕ギャラリー展) 73
第 71 図	東小舟（南側）と火渡し穴・息抜き管 55	第 106 図	ガイダンス施設展示内容イメージ図 74
第 72 図	東小舟（北側）と床釣りの造り替え痕跡 55	第 107 図	越堂たら跡の床釣り（左）と土層立体 剥ぎ取り（右） 74
第 73 図	東小舟（南側）内部焚口 55	第 108 図	大板山たら跡の映像展示の液晶 モニター 74
第 74 図	東小舟（北側）内部焚口 55	第 109 図	越堂たら跡の 3 次元モデル映像 74
第 75 図	越堂たら跡現地簡易整備 平面図・見通し断面図 57	第 110 図	J R 田儀駅前の看板（耐候性鋼） 76
第 76 図	遺跡説明看板の内容 58	第 111 図	島根県立古代出雲歴史博物館の隣障 (耐候性鋼) 76
第 77 図	越堂たら跡の簡易整備状況 58	第 112 図	ガイダンス施設・越堂たら跡現地 および関連文化財の見学動線計画 76
第 78 図	遺構説明看板の設置状況 58	第 113 図	越堂たら跡現地 (高殿南側地盤整備後) 77
第 79 図	遺跡名称看板の設置状況 58	第 114 図	ガイダンス施設格柵予定地 (簡易埋立後) 77
第 80 図	遺跡名称看板の設置状況（保存会設置） 58	第 115 図	横見理沒林公園・展示棟 79
第 81 図	歴史文化基本構想および文化財保存活用 地域計画と保存管理計画 60	第 116 図	朝日たら跡展示棟 79
第 82 図	越堂たら跡での中学校ふるさと学習 61	第 117 図	横見理沒林公園・展示棟の視察状況 79
第 83 図	越堂たら跡の見学会（保存会・市文化財課 共催） 61	第 118 図	現在の田儀川と口田儀まちなみ 80
第 84 図	越堂たら跡整備の基本理念と基本方針 62	第 119 図	大正期の田儀川と口田儀まちなみ 80
第 85 図	越堂たら跡現地整備計画平面図 64	第 120 図	越堂たら跡と口田儀まちなみ位置図 81
第 86 図	音谷たたら高殿内部 65	第 121 図	口田儀まちなみマップ 82
第 87 図	音谷たたらの製鉄炉（俵 1933 から 転載） 65		
第 88 図	越堂たら跡の製鉄炉・天秤ふいご復元 製作イメージ図 65		
第 89 図	音谷たたらの天秤ふいご（俵 1933 から 転載） 66		
第 90 図	大板山たら製鉄遺跡の透明プレート 66		
第 91 図	大板山たら製鉄遺跡の史跡標識 67		
第 92 図	遺跡説明看板 67		
第 93 図	遺構説明看板のプレート差し替え仕様 67		
第 94 図	出雲弥生の森博物館での Q R コード付き 看板 67		
第 95 図	越堂たら跡現地整備完成イメージ図 68		
第 96 図	音谷たたら高殿外観 70		
第 97 図	金屋子神話民俗館外観 70		
第 98 図	和銅博物館外観（写真提供： 安来市和銅博物館） 70		
第 99 図	奥出雲たらと刀剣館外観（写真提供： 奥出雲町役場商工観光課） 70		
第 100 図	大板山たら館外観 71		
第 101 図	ガイダンス施設整備予定地 (簡易埋立前) 71		
第 102 図	ガイダンス施設配置イメージ図 71		
第 103 図	ガイダンス施設外観イメージ図 71		
第 104 図	ガイダンス施設整備完成イメージ図 72		

挿表目次

第1表 史跡指定・計画策定・刊行物などに関する 主な出来事	4	第10表 出雲市に関する主要な事項 (歴史文化)	33～35
第2表 委員会名簿（令和2年度〔2020〕）	6	第11表 出雲市の指定文化財等の件数（令和3年 〔2021〕3月4日現在）	37
第3表 委員会の開催日程（整備活用基本構想策定以降） と検討内容	6	第12表 史跡・重要文化財などの保存・活用に 関する主な事項	39
第4表 地元協議会の開催日程と検討内容	6	第13表 田儀櫻井家の年表	46
第5表 ゾーン別の現状と課題	9	第14表 越堂たら跡の整備年次計画（令和2年度 〔2020〕時点）	77
第6表 史跡および遺跡別の現状と課題	9		
第7表 出雲市の気候	22		
第8表 出雲市および各地域の人口・世帯の推移	25	第15表 整備後に想定される維持管理の項目と 内容	78
第9表 文化財に関する主な観光地点別内訳	26		

第1章 越堂たら跡整備基本計画の策定

第1節 整備基本計画策定の目的と背景

1. 整備基本計画策定の目的

(1) 田儀櫻井家とたら製鉄

田儀櫻井家とたら製鉄遺跡は、島根県の出雲市域で最西部の多伎町に所在する宮本鍛冶山内遺跡（多伎町奥田儀）を中心として、海岸部の越堂たら跡（多伎町口田儀）や山間部の豊谷たら跡（多伎町奥田儀）、朝日たら跡（佐田町高津屋）などの田儀櫻井家のたら製鉄に関連する遺跡群の総称である。

田儀櫻井家は近世から近代にかけて出雲市多伎町周辺を中心に活躍した鉄師（たら製鉄の経営者）で、江戸時代初期から明治時代中頃にかけて多伎町奥田儀を本拠地として約250年間にわたり、この地でたら製鉄業を行ってきた。田儀櫻井家が営んだたら場や鍛冶屋の製鉄関連施設は、多伎町を中心として佐田町や隣接する大田市域や雲南市域にも広がり、幕末から明治初年頃にかけては、当時全国で屈指の産鉄量を誇った出雲国のなかでも一二を争うほどの隆盛を極めるまでに成長した。また田儀櫻井家は、製鉄業と一緒に新たな田畠の開墾などを行っており、多伎町周辺の地域経済の発展にも大きく貢献している。

田儀櫻井家が操業したたら場・鍛冶屋跡などのたら製鉄遺跡は現在15箇所で確認され⁽¹⁾、直線にして東西約24km、南北約12kmと非常に広範囲に展開しており、大きな特徴となっている。



第1図 田儀櫻井家たら製鉄遺跡の分布

(1) 文献史料に記載があるが正確な所在地が不明なたら場を含めると、現在21遺跡が確認されている。

(2) 史跡指定と整備基本計画策定の目的

田儀櫻井家の本拠地である宮本鍛冶山内遺跡は、たたら製鉄に従事する人々が暮らした集落（山内）であった遺跡で、山間部の狭い峡谷に位置する。この遺跡は田儀櫻井家が居を構えた本宅跡を中心に、鍛冶場跡や、田儀櫻井家の菩提寺の智光院や田儀櫻井家当主の墓地、金屋子神社、たたら製鉄に従事した人々の住宅跡やその墓地などが良好な状態で残存しており、総面積は約 21.5km² にも及ぶ。

また、朝日たらたら跡や聖谷たらたら跡などその他多くの製鉄関連遺跡についても山間部にあり、山奥の植林地や河川流域に位置する。

一方、越堂たらたら跡は海岸部の国道 9 号沿いに所在し、製鉄の原材料の砂鉄や木炭を搬入し、また生産した鉄製品や鉄素材などを出荷した田儀浦（現在の田儀港）とともに、田儀櫻井家におけるたらら製鉄経営の基幹的なたらら場として栄えた。

このように、各地に残る田儀櫻井家のたらら製鉄と関連する遺跡は残存状況が良好であり、近世・近代のたらら製鉄の様子を一体的に把握できる全国でも稀な製鉄遺跡群として歴史的価値が高く評価され、宮本鍛冶山内遺跡と朝日たらたら跡は平成 18 年（2006）1 月 26 日に国史跡に指定され、聖谷たらたら跡と越堂たらたら跡が平成 21 年（2009）2 月 12 日に追加指定された。

今回の整備基本計画の策定では、広域に展開する史跡田儀櫻井家たらら製鉄遺跡のなかで、これまでの発掘調査で全容が判明した越堂たらたら跡の整備内容やその方針を示すことを目的とする。史跡の整備で越堂たらたら跡の特質や田儀櫻井家のたらら製鉄全体の歴史的な価値とその重要性を市内外からの見学者に分かりやすく紹介するとともに、4箇所の史跡のなかでは地理的に最もアクセスが容易な越堂たらたら跡を史跡全体の導入部として位置づけ、他の史跡への案内も同時にできるよう検討する。さらに、出雲西部の地域経済の発展に貢献した田儀櫻井家の製鉄経営を支えた越堂たらたら跡を題材として、地域の歴史学習を通して幅広い世代の市民に親しまれ、地元の史跡保護活動などの拠点となる史跡整備を目指す。

2. 整備基本計画策定の背景

(1) 史跡指定へのあゆみ

田儀櫻井家が奥田儀を去った後には、山内に残った人々は炭焼きや養蚕などを生業に山間部の小さな集落として生活を維持していたが、平成 9 年（1997）に最後の住人が転出してからは無住の地となつた。こうした状況のなか、平成 6 年（1994）11 月にはかつて栄えた宮本の地を活性化させようと奥田儀地区の住民を中心に宮本史跡保存会が組織され、金屋子神社の祭礼の復活や遺跡説明パンフレットの作成、説明板の設置など、宮本鍛冶山内遺跡を中心に保護や活用に積極的に取り組んでいた。なお、こうした活動は、平成 24 年（2012）3 月に地元を中心とした 100 名を超える会員により結成された田儀櫻井家たらら製鉄遺跡保存会に引き継がれ、現在も遺跡内の草刈りや遺跡のガイドなどを継続的に実施しており、地元の史跡保護活動の中心となっている。

市町村合併前の旧多伎町は、遺跡の価値を明確にするため考古学・歴史学・民俗学・建築学などの研究者からなる調査委員会を組織し、総合的な基礎調査を始めた。その成果は「田儀櫻井家 田儀櫻井家のたらら製鉄に関する基礎調査報告書」としてまとめられ、平成 16 年（2004）8 月に刊行された。その後平成 17 年（2005）の市町村合併を経て新たな出雲市が誕生したが、旧多伎町が進めてきた遺跡の調査と保存を継承して推進し、基礎調査の成果によって近世たらら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として評価され、平成 18 年（2006）1 月 26 日に宮本鍛冶山内遺跡と朝日たらたら跡が近世たらら製鉄遺跡としては全国で 2 番目となる国史跡に指定された。

(2) 史跡の追加指定と保存管理計画の策定

田儀櫻井家に関連する製鉄遺跡の立地や土地利用条件は多種多様で、遺跡群の保存や管理を図るうえで考慮すべき事項を多く含んでいた。そのため、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の価値付けや構成要素を明確にし、なつかつ将来的に適切な保存や管理を進める基本的な方針を定めることを目的に、平成20年（2008）3月に「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画」を策定した。

史跡の保存活用管理計画の策定と併行して、越堂たたら跡、聖谷たたら跡などの発掘調査や文献史料の調査に着手し、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—」（平成20年〔2008〕3月刊行）や「田儀櫻井家 たたら史料と文書目録」（平成21年〔2009〕3月刊行）、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成19～21年度の調査—」（平成22年〔2010〕3月刊行）などに成果がまとめられ、遺跡の歴史的な価値付けを明確にしていった。これら一連の調査研究などによる遺跡の歴史的評価の高まりを受けて、平成21年（2009）2月12日に聖谷たたら跡と越堂たたら跡が国史跡の追加指定を受けることとなった。

(3) 整備検討委員会の設置と整備活用基本構想の策定

追加指定によって4つの史跡が東西約10km、南北約8kmの広範囲のなかに点在する状況となった。これにより各史跡を中心に田儀櫻井家関連の他の遺跡について調査研究を進め、さらにその成果を結び付けて総合的に評価することで、田儀櫻井家が持つ歴史的価値をより明確にできる機運が高まったといえる。しかしそれと同時に、広域化した史跡の整備・活用を今後どのように進めていくのかという新たな課題に直面することになった。

この課題に積極的に取り組むため、出雲市文化財課では「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会」（委員長：坂井秀弥氏）を平成22年（2010）1月に設立した。史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会では、保存管理計画の内容に基づいて各史跡を中心に田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の整備や活用を実践するにあたり、その中長期的な計画をまとめて各史跡の整備活用方針を具体的かつ明確に検討し、今後の具体的な整備活用計画をまとめた「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想」を平成24年（2012）11月に策定した。これによって、史跡を中心とした田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の中長期的な整備や活用の方向性と事業計画が明確になり、現在は整備活用基本構想で示された計画内容に沿って事業を進めている。

(4) 整備基本計画策定の背景

越堂たたら跡整備基本計画策定の背景には、史跡の指定前からの長期的な取り組みが存在し、整備活用基本構想によって史跡全体の整備や活用の方針および方向性が具体化されることになる。整備活用基本構想では、史跡へのアクセスが容易で比較的利便性が高く、また広域に展開する史跡全体の導入部となる越堂たたら跡周辺の役割が具体的に示されており、今後の史跡全体の整備や活用の拠点となる役割を担うことが期待されている。

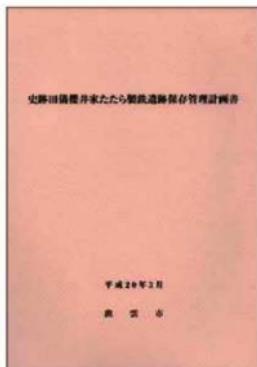
なお、史跡指定によって田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は市民にも認知されつつあったが、史跡を含めて広範囲にわたる遺跡群の内容を手軽に知る手段がなかったことを受け、「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡総合ガイドブック」を作成した（平成23年〔2011〕3月刊行）。このガイドブックは、田儀櫻井家の沿革や史跡を含む各遺跡の特徴、これまでの調査成果や関連する文化財などをまとめたもので、専門家のみならず一般の方々にも好評を得ており、現在でも需要がある。このように史跡の多様な情報を総合・整理して分かりやすく提示する取り組みは、史跡の内容や史跡保存への理解を浸透させるプラットフォームとして重要であることを示している。



第2図 保存会による宮本鍛冶山内遺跡内の草刈り



第3図 保存会による宮本鍛冶山内遺跡のガイド



第4図 保存管理計画



第5図 整備活用基本構想



第6図 総合ガイドブック

第1表 史跡指定・計画策定・刊行物などに関する主な出来事

		史跡指定・計画策定・刊行物などに関する主な出来事
平成 16 年 (2004)	8月	田儀櫻井家 田儀櫻井家のたら製鉄に関する基礎調査報告書 刊行
平成 18 年 (2006)	1月	宮本鍛冶山内遺跡・朝日たら跡 国史跡指定
平成 20 年 (2008)	3月	田儀櫻井家のたら製鉄遺跡発掘調査報告書 (平成 16 ~ 18 年度の調査) 刊行
	3月	史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡保存管理計画 策定
平成 21 年 (2009)	2月	越堂たら跡・聖谷たら跡 国史跡指定 (追加)
	3月	田儀櫻井家 たら史料と文書目録 刊行
平成 22 年 (2010)	1月	史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡整備検討委員会 設置
	3月	田儀櫻井家のたら製鉄遺跡発掘調査報告書 (平成 19 ~ 21 年度の調査) 刊行
平成 23 年 (2011)	3月	史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡総合ガイドブック 刊行
平成 24 年 (2012)	11月	史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡整備活用基本構想 策定
令和 2 年 (2020)	3月	史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡調査整備報告書 I (田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究) 刊行
令和 3 年 (2021)	3月	越堂たら跡整備基本計画 策定

3. 史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会の特徴と役割

越堂たら跡の整備計画は、史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会のなかで検討され、整備活用基本構想にて具体化された。委員会は、考古学や建築学などの学識経験者からなる専門委員だけではなく、遺跡の保護活動や郷土史研究とともに様々な地域活性化対策などを積極的に進めている地元委員が半数を占める構成となっており、地元が必要とする整備内容を直接委員会で議論し、それを実施計画に反映できることが大きな特徴となっている。

史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会は、保存管理計画をもとに広域化した史跡の整備・活用の継続的な検討や実施をするために整備活用基本構想を策定することを目的としていた。その一方で、整備基本構想の策定に向けた検討と併行して、宮本鍛冶山内遺跡の金屋子神社や智光院などの保存修理にも着手しており、保存修理の内容についても委員会のなかで検討している。整備活用基本構想の策定以降も定期的に委員会を開催し、史跡の整備事業の方向性やその整備内容、また史跡における遺構の残存状況を確認するための発掘調査などについて継続的に検討や審議を重ねている。このように史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備検討委員会は、史跡を含めた田儀櫻井家たら製鉄遺跡の調査や整備内容の方向性を定める役割を担う⁽²⁾。

また委員会と併行して、地元の代表である田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会の会員を中心に地元での協議会を開催し、地元の意見を反映させた整備内容の検討を行っている。



第7図 整備内容の検討状況（第15回委員会）



第8図 現地簡易整備の視察状況（第15回委員会）



第9図 整備内容の検討状況（第4回地元協議会）



第10図 保存会の現地見学状況

(2) 平成22年(2010)の設立から田儀櫻井家たら製鉄遺跡に関する調査方針や整備内容の検討および審議を進めており、令和3年(2021)3月4日には第20回目の開催を迎えた。

第2表 委員会名簿（令和2年度（2020））

氏名	所属	備考
坂井秀弥	公益財団法人大阪府文化財センター 理事長（元奈良大学文学部教授）	委員長 専門委員 地元委員
田中義昭	元島根大学法文学部教授	
和田嘉宥	米子工業高等専門学校 名誉教授	
角田徳幸	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター 調整監	
河上清	田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会 副会長	
玉川恵一	田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会 理事（元多伎地域土木委員会会長）	
梶谷宗克	田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会 理事（元田儀地区連合自治会会長）	
山崎幸一	田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会 会長	副委員長

第3表 委員会の開催日程（整備活用基本構想策定以降）と検討内容

開催日程		越堂たら跡整備に関する検討内容
第5回	平成24年（2012）11月2日	導入ゾーン（越堂たら跡・口田儀まちなみ）整備活用基本計画の検討
第6回	平成25年（2013）12月25日	
第7回	平成26年（2014）8月8日	
第8回	平成27年（2015）2月2日	
第9回	平成27年（2015）8月7日	
第10回	平成28年（2016）2月2日	
第11回	平成28年（2016）9月30日	越堂たら跡現地簡易整備内容（遺跡説明看板・遺跡名称看板・道標表示）の検討
第12回	平成29年（2017）1月31日	
第13回	平成29年（2017）9月29日	
第14回	平成30年（2018）2月22日	
第15回	平成30年（2018）9月28日	
第16回	平成31年（2019）2月22日	
第17回	令和元年（2019）9月27日	
第18回	令和2年（2020）2月21日	導入ゾーン整備活用基本方針の検討
第19回	令和2年（2020）9月24日	越堂たら跡整備基本計画の検討
第20回	令和3年（2021）3月4日	

第4表 地元協議会の開催日程と検討内容

開催日程		越堂たら跡整備に関する検討内容
第1回	平成28年（2016）4月7日	越堂たら跡現地簡易整備内容の検討
第2回	平成28年（2016）9月16日	
第3回	平成29年（2017）6月9日	
第4回	平成30年（2018）9月6日	
第5回	令和2年（2020）10月20日	

第2節 史跡の現状と課題

1. 整備活用基本構想と史跡のゾーニング

平成21年（2009）の聖谷たたら跡と越堂たたら跡の追加指定によって史跡が広範囲のなかに点在する状況となり、史跡の整備・活用を今後どのように進めていくのかという新たな課題が生まれていた。こうした課題に対して、平成24年（2012）11月に策定した史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想では、広域化した史跡の整備・活用を進めるための一つの方策を打ち出した。それが史跡のゾーニングによる調査・整備の中長期的な実施計画である。

史跡のゾーニングでは、各史跡の特徴ごとにエリア分けをして段階的に調査や整備を進めていくという指針を明確にした。具体的には、田儀櫻井家の拠点である宮本鍛冶山内遺跡とその周辺を「中核ゾーン」、海岸部の越堂たたら跡と交易拠点の田儀浦を含む口田儀のまちなみを「導入ゾーン」、朝日たたら跡など佐田町域周辺に広がる山間部のたたら場などを「佐田ゾーン」として位置づけ、段階的に調査・整備を実施する方針を固めたのである。

2. 史跡の現状と課題

整備活用基本構想のなかで史跡のゾーニングをすることで、それぞれの現状と課題が浮き彫りになり、また各ゾーンの構成要素である史跡および遺跡の現状と課題についても確認することができた。なお、整備活用基本構想で明確にした史跡の現状と課題については、平成20年（2008）3月策定の史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画で把握した史跡の現状を基礎としてまとめられている。

ここでは、保存管理計画や整備活用基本構想で確認された史跡の現状と課題について、保存管理計画や整備基本構想の策定以降に行われた調査や整備などの内容を追加しながら整理することで、越堂たたら跡の整備の位置づけを明確にする。



第11図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡のゾーニング

(1) 史跡全体の現状と課題

史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡は東西約10km、南北約8kmの広範囲に4箇所の史跡が点在する。また、史跡を含めて現在15箇所で田儀櫻井家のたら製鉄に関連するたら場・鍛冶屋跡が確認されており、出雲市域のほか隣接する大田市域や雲南市域にまで遺跡の範囲が広がっている。

整備活用基本構想では、こうした広域化の課題を踏まえて史跡のゾーニングを行い、計画的に調査や整備をする方針を明確にしている。調査や整備に伴い現地説明会などを積極的に行っているため、史跡全体の認知度は向上しているが、個別の史跡の内容や役割については十分に浸透していないことが示されており（第1章第3節）、個別の史跡の認知度を向上させる必要がある。

また、地元による史跡の保護活動はこれまで長年にわたり継続的に実施されているが、活動の拠点となる場所がないのが現状である。活動の拠点となる施設を整備して継続的な史跡の保護活動を支援することが求められる。

(2) 導入ゾーンの現状と課題

史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡の導入ゾーンは、海岸部の越堂たら跡と口田儀のまちなみで構成されている。広域に展開する田儀櫻井家たら製鉄遺跡のなかでは、国道9号に隣接してアクセスが容易であり、なおかつ利便性が高い。中核ゾーンや佐田ゾーンはいずれも山間部にあり、その場所へのアクセスが困難であるため、導入ゾーンは史跡全体の導入部として重要な位置づけになる。

こうした現状を踏まえると、史跡全体の導入部として、中核ゾーンにある宮本鍛冶山内遺跡や聖谷たら跡、佐田ゾーンに含まれる朝日たら跡などにスムーズな誘導ができる整備をすることが重要な課題となってくる。

(3) 越堂たら跡の現状と課題

田儀櫻井家の基幹的なたら場として製鉄経営を支えた海岸部の越堂たら跡は、導入ゾーンの中⼼的な位置づけにある。これまで2度の発掘調査が行われ、調査成果をもとにした現地の簡易整備を実施した（第4章）。発掘調査によって長期間操業したたら場の実態が明らかになり、その実態が反映されている製鉄炉の床釣り（地下構造）の土層立体剥ぎ取りを行うなど、遺構の詳細な記録・保存を行っている。

現在の簡易整備は、発掘調査によって確認した高殿（製鉄炉を覆う建物）の遺構の平面的な表示が中心である。越堂たら跡の遺構の位置は確認できるが、たら場操業の様子は現地での把握が困難となっている。また、長期間操業したたら場の実態を示す床釣りの土層立体剥ぎ取りなどを適切に展示できる場所はない。現地でたら場操業の様子を実際に見学できる整備や、長期間操業を示す遺構（土層立体剥ぎ取り）の展示場所を設けることが越堂たら跡の整備の課題となっている。

3. 越堂たら跡の整備の位置づけと方向性

越堂たら跡の現地整備は、これまでの遺構表示を中心とした簡易整備に加えて、たら場操業の様子を現地で実際に見学できる整備を行うことで、海岸部で操業されて田儀櫻井家のたら製鉄経営に重要な役割を果たした越堂たらについての理解を深めることができる。

また、越堂たら跡の長期間操業を示す遺構を適切に展示するとともに、山間部の史跡への誘導ができる施設を越堂たら跡周辺に設けることで、山間部の史跡への誘導が促進される。こうした施設は、地元の継続的な史跡保護活動の拠点としての活用も見込まれる。これらの点を総合すると、越堂たら跡周辺にガイダンス施設を設置することで、越堂たら跡や導入ゾーン、そして史跡全体を持つ課題を克服することが可能になると考えられる。

第5表 ゾーン別の現状と課題

	現 状	課 題
史跡全体	東西約10km、南北約8kmに4箇所の史跡が点在。史跡全体の認知度はあるが、個別の史跡の認知度は低い。	広域的な史跡のなかで計画的な調査・整備が必要。個別の史跡の認知度を向上させ、地元の史跡保護活動の拠点となる施設が必要。
導入ゾーン	海岸部に立地。国道9号に近くアクセスが容易。越堂たたら跡（史跡）・口田儀まちなみで構成。	史跡の導入部として、山間部の史跡などへ誘導する役割を果たすことができる整備が必要。
中核ゾーン	山間部に立地。アクセスが困難。宮本鍛冶山内遺跡（史跡）・聖谷たたら跡（史跡）および掛樋たたら跡で構成。	景観の保全や遺構の保存を図りつつ、史跡への案内ができる整備を検討。
佐田ゾーン	山間部に立地。アクセスが困難。朝日たたら跡（史跡）のほか、堂ノ原たたら跡など佐田町域周辺所在の複数のたたら跡・鍛冶場跡で構成。	景観の保全や遺構の保存を図りつつ、史跡への案内ができる整備を検討。

第6表 史跡および遺跡別の現状と課題

	現 状	課 題
導入ゾーン	越堂たたら跡（史跡）	立地条件 国道9号沿いに立地。史跡指定地内の高殿付近は公有地だが周辺は民有地が多い。
		遺構状況 高殿内部の遺構や製鉄炉の床釣りが残存。山内の形成初期や金屋子神社の実態が不明。
		整備状況 現地で簡易整備（遺跡説明看板・遺跡名称看板・道標表示）を実施。たたら場操業の様子が現地で把握が困難。長期間操業を示す遺構の展示場所がない。
	口田儀まちなみ	立地条件 国道9号沿いに立地。越堂たたら跡に近接。
		遺構状況 近世の廻船問屋の屋敷地、海や川に通じる小路、波除けの石垣などが残存。
		整備状況 整備は未実施。
	宮本鍛冶山内遺跡（史跡）	立地条件 史跡指定地の大半が民有地。
		遺構状況 製鉄関連遺構や生活関連遺構、信仰関連遺構など山内全体の遺構が良好な状態で残存。鍛冶場の変遷など未解明の部分がある。
		整備状況 金屋子神社や智光院、田儀櫻井家墓地などの保存修理を実施。現地で鍛冶場跡などの様子が確認できない。
中核ゾーン	聖谷たたら跡（史跡）	土地条件 史跡指定地は国有地（国有林地）内に所在。
		遺構状況 製鉄炉の床釣りが残存。山内石垣や4代目当主宗兵衛清矩が造立した地蔵の石躰が残存。
		整備状況 整備は未実施。
	掛樋たたら跡	土地条件 遺跡は民有地（企業有地）内に所在。宮本鍛冶山内遺跡に近接。
		遺構状況 製鉄炉の床釣りが残存。
		整備状況 整備は未実施。
佐田ゾーン	朝日たたら跡（史跡）	立地条件 史跡指定地全域が公有地。
		遺構状況 高殿内部の遺構や製鉄炉の床釣りが残存。たたら場の操業時期を確定する資料が希少。山内の遺構の残存状況は不明。
		整備状況 高殿全体を覆う展示棟を設けて製鉄炉の床釣りの状況を露出展示。露出展示でカビの繁殖が認められる。
	佐田町域周辺のたたら場・鍛冶屋跡	立地条件 多くの遺跡が民有地内に所在。
		遺構状況 各遺跡の分布調査などで山内の石垣や石列、金屋子神社や墓地などを確認。製鉄炉の床釣りなどの遺構の残存状況は不明。
		整備状況 整備は未実施。

第3節 整備基本計画策定の経緯

1. 導入ゾーン整備活用基本計画の検討

越堂たら跡および口田儀まちなみで構成される「導入ゾーン」は、史跡全体の導入部を果たす役割を担っており、広域化した史跡のなかでは最初に整備を進めるエリアとして計画が立てられた。それを受け、平成24年度（2012）から平成27年度（2015）まで越堂たら跡を含めた導入ゾーンの整備活用基本計画の検討に取り組んだ。

「導入ゾーン整備活用基本計画」（平成28年〔2016〕2月策定）は、整備活用基本構想で示された導入ゾーンの特徴および整備に関する課題を具体化したものであるとともに、越堂たら跡の整備基本計画の骨子となる役割を担う。導入ゾーン整備活用基本計画では、「越堂たら跡の現地整備」および史跡近接地に予定している「ガイダンス施設の整備」について方向性を検討している。

越堂たら跡の現地整備は、発掘調査で確認した高殿の床釣りを露出展示している朝日たら跡との役割分担を明確にしつつ、発掘調査の成果で明らかになった遺構の内容をもとにたら場操業の様子を再現して臨場感を演出することを目指し、遺構表示の方法や内容について検討した。

ガイダンス施設の整備は、将来的に設置する場合を見据えて規模や設備などを検討し、また施設内の展示内容を模索した。展示内容は、越堂たら跡の発掘調査で得られた製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを中心に迫力のある展示を目指すとともに、調査成果をもとにした越堂たら跡の特徴の解説や、田儀櫻井家たら製鉄遺跡の他の史跡について分かりやすく紹介する案を検討した。

なお、この整備活用基本計画は、平成27年（2015）7月に地元の田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会から提出された今後の史跡の保存活用に関する要望書の内容を反映している。

2. 越堂たら跡現地の簡易整備とアンケート調査の実施

導入ゾーンの整備活用基本計画の検討を進めるなかで、整備計画が本格的に具体化するのは数年先の見通しとなる状況であったため、本格的な整備前に越堂たら跡の現地を簡易的に整備して見学者に対応する必要があることを地元との協議を重ねるなかで確認した。

現地の簡易整備は、平成28年度（2016）から内容の検討を開始し、平成30年度（2018）および令和元年度（2019）に遺跡説明看板や遺跡名称看板の設置と遺構表示を行った（第4章第2節）。

越堂たら跡の整備目的の一つは、越堂たら跡や田儀櫻井家のたら製鉄全体の歴史的な価値とその重要性を見学者に分かりやすく紹介するとともに、地域の歴史学習の題材として幅広い世代の市民に親しまれる史跡を目指すことにある。特に多伎町内の小・中学校では、地域の歴史学習の一環として田儀櫻井家のたら製鉄に触れる機会があり、越堂たら跡で歴史学習が行われることもある。

こうした地域の歴史学習に役立てる整備を目指すため、遺跡説明看板について、出雲市内の中学校の社会科教員を対象に社会科部総会のなかで内容を説明し、中学生の視点から見た場合にどのように映るのかについてのアンケート調査を平成30年（2018）6月に実施した。

アンケートの結果、出来るだけ専門的な内容や用語を省いてレイアウトを工夫し、遺跡の特徴を端的に分かりやすく表示する必要があることが具体的に示された。また専門的な内容などはパンフレットに記載して、遺跡説明看板との棲み分けを明確にする方が良いなどの意見も出された。

またアンケート調査では、遺跡説明看板内容のほか、田儀櫻井家や越堂たら跡についての認知度の調査も実施したところ、田儀櫻井家についての認知度は比較的高いものの、越堂たら跡について

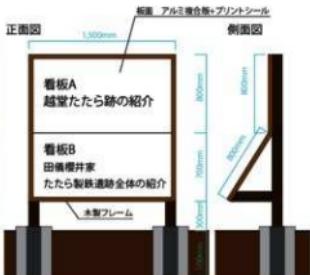
は半数が知らなかったとの回答であった。この結果からも、越堂たら跡の特徴や歴史的位置付けをいかに分かりやすく伝えていくのかが課題であることが分かる。

3. 導入ゾーン整備活用基本方針の検討

令和2年度（2020）から本格的な越堂たら跡の整備基本計画の内容を検討するにあたり、これまでの導入ゾーン整備活用基本計画の内容に加え、越堂たら跡現地の簡易整備の状況を踏まえて本格的な整備内容の具体的な基本方針を示すことを目的として、令和2年（2020）2月に「導入ゾーン整備活用基本方針」を策定した。

整備活用基本方針での越堂たら跡の整備内容は、基本的に導入ゾーン整備活用基本計画の内容に沿っており、越堂たら跡の現地整備は、現在の簡易整備の状況を基礎として本格的に整備する方向性で具体化した内容である。この基本方針に沿って、令和2年度（2020）に越堂たら跡の整備基本計画の検討を進めることとした。

看板A(越堂たら跡の紹介)



看板B(田儀櫻井家たら製鉄遺跡全体の紹介)



社会科部総会での説明の様子

<総会会場やアンケート記述での主な意見>

(看板の構成)

- ・看板は簡潔にして、詳しい内容はパンフレットで説明。
- ・田儀櫻井家たら製鉄遺跡が複数の遺跡で構成されていることが分かりにくい。

(説明の用語)

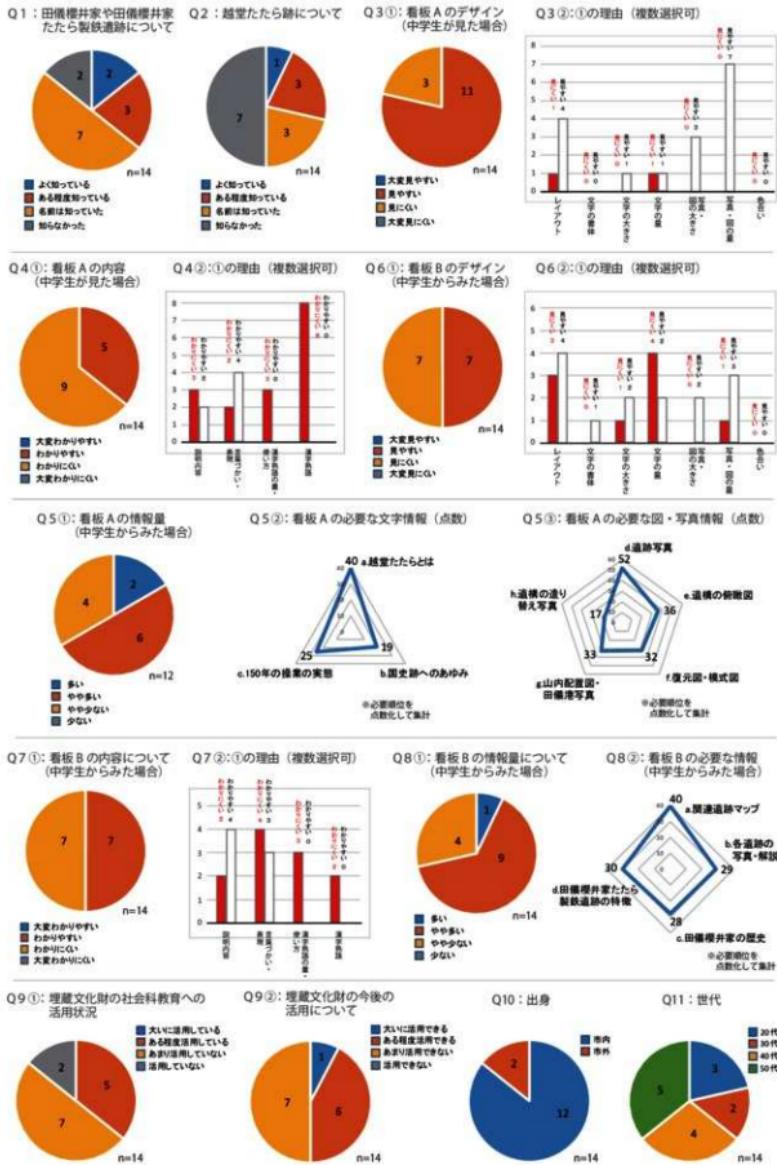
- ・遺構や遺物などの言葉が難しい。固有名詞が多い。
- ・難しい言葉が多く、高殿や床釣りの説明は文章を見返してやっと分かる。
- ・漢字熟語は中学生の常用漢字に合わせる。

・説明文が長い。レベルが高い中学生なら長文を読み下すことができる。

(説明の内容)

- ・当時（出雲国の鉄生産量が）全国の半分以上を占めていたことをアピールする。
- ・多伎町が工業地帯であったなど、当時のすごさが分かる表現を入れる。
- ・はっとさせる情報をのせる（たらら関連の国指定史跡は全国でも3例、島根県でここだけなど）。

第12図 遺跡説明看板（案）・社会科部総会での説明の様子（上）と主な意見（下）



第13図 アンケート調査の集計結果

第4節 整備基本計画策定の対象範囲

1. 越堂たら跡の位置

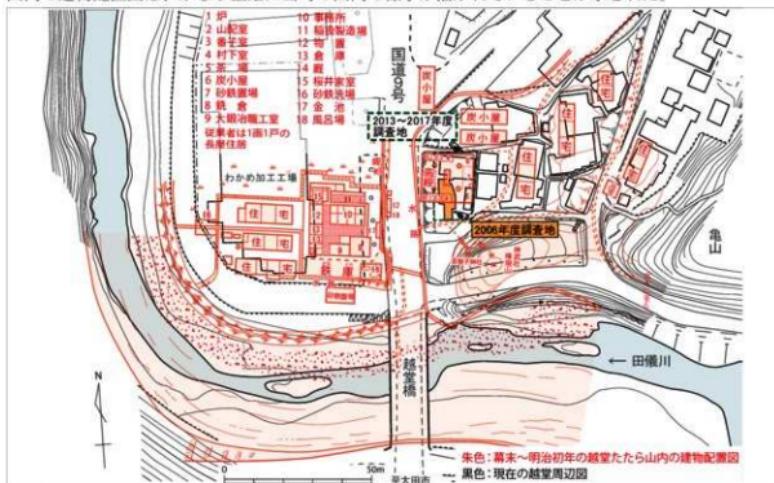
越堂たら跡は出雲市多伎町口田儀に所在し、日本海沿岸の田儀港（当時の田儀浦）からほど近い田儀川右岸の平坦部に立地する。標高は11m程度である。田儀櫻井家が営んだ山間部のたら場とは対照的に海岸部に設けられたたら場で、すぐ脇には田儀川が流れ、河口から越堂たら跡までは直線にして約2kmである。さらに中上流域に遡った支流の宮本川沿いには、田儀櫻井家のたら場製鉄の中心地であった宮本鍛冶山内遺跡（宮本鍛冶屋）が存在する。

この田儀浦と田儀川（および宮本川）は、越堂たらで使用する製鉄の原材料である砂鉄や木炭の搬入、そして越堂たらや宮本鍛冶屋などで生産された鉄製品および鉄素材の輸送や出荷に重要な役割を担っていた。

2. 越堂たら跡の史跡指定範囲

（1）越堂たら山内の建物配置図（幕末から明治初年）

越堂たらの山内の様子は文献史料で確認でき、「田儀村誌」（昭和36年〔1961〕刊行）には越堂たらの建物配置図（幕末～明治初年頃）が掲載されている。山内の範囲は田儀川沿いの平坦部の南側全体に広がり、現在の国道9号を境に、東側は高殿や炭小屋および住居跡が記載され、西側には事務所を中心に鉄庫や砂鉄置場などが認められる。この配置図で示された高殿の位置を手掛かりに、平成18年度（2006）に遺構の残存状況を把握するための発掘調査が実施された（平成25～29年度〔2013～2017〕にも高殿内やその周辺の発掘調査を実施）。発掘調査で確認された製鉄炉の下にある床釣りの一部である本床の位置は、配置図にあった製鉄炉の位置と概ね一致することが確かめられ、越堂たら山内の建物配置図は、かなり正確に当時の山内の様子が描かれていることが示された。



第14図 「田儀村誌」掲載の越堂たら山内建物配置図

(2) 越堂たら跡の史跡指定範囲と周辺の文化財

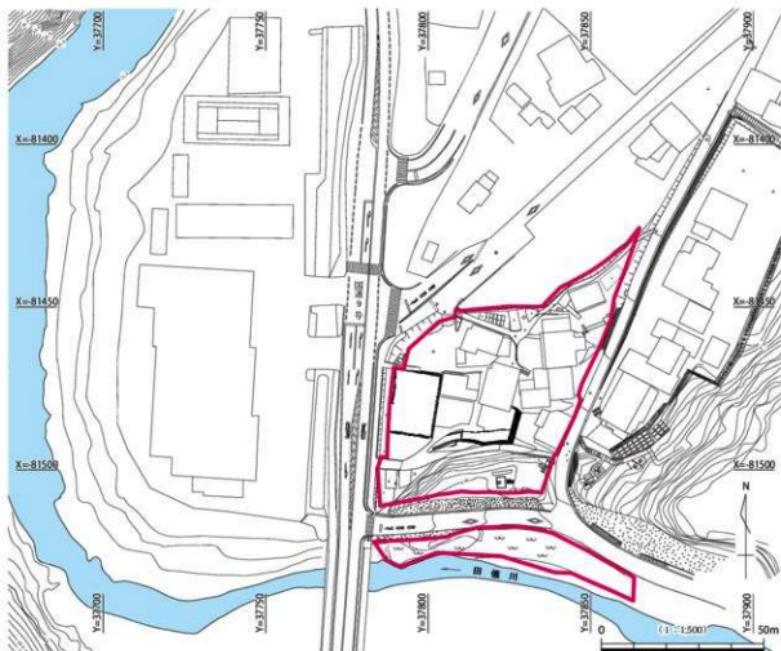
こうした文献調査や発掘調査の成果によって平成21年(2009)に史跡の追加指定を受けた越堂たら跡の史跡指定範囲は、越堂たら山内の建物配置図で高殿および炭小屋や住居が存在したエリアとなっている。このエリアには金屋子神社が存在した南側の小丘陵、田儀川沿いの岩盤に掘り込まれて山内を廻る水路跡などが含まれる。その他の越堂たら山内に関連する文化財としては、田儀櫻井家の6代目当主幸左衛門義民が願主である地蔵が存在し、山内東側の亀山山麓に鎮座している。なお、地蔵は出雲市の指定文化財に登録されている。



第15図 田儀川沿いの水路跡



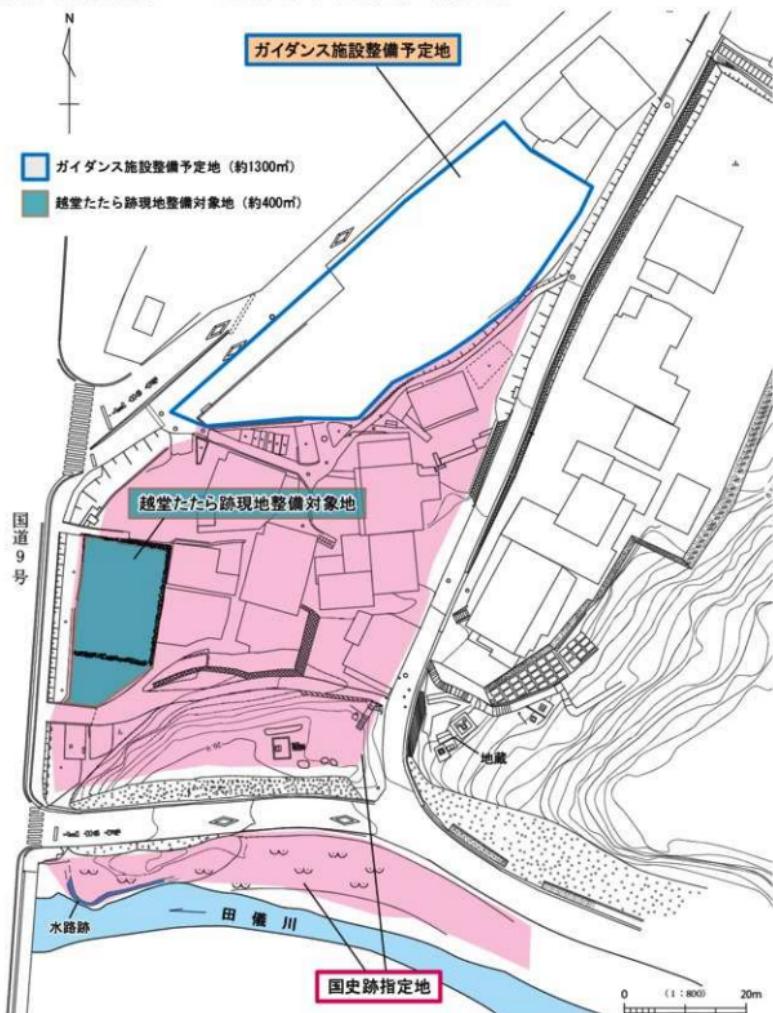
第16図 6代目当主が願主の地蔵（正面向かって右）



第17図 越堂たら跡の史跡指定範囲

3. 整備基本計画策定の対象範囲

越堂たら跡の整備基本計画策定の対象範囲は、越堂たら跡現地とガイダンス施設整備予定地である。また、当時の越堂たら山内の集落景観を総合的に理解するため、史跡指定範囲やその周辺に存在する関連文化財についても案内をするなど積極的に活用する。



第18図 越堂たら跡整備基本計画策定の対象範囲



第19図 越堂たら跡周辺の遠景（南から）



第20図 越堂たら跡周辺の遠景（北から）

第2章 田儀櫻井家たら製鉄遺跡を取り巻く環境

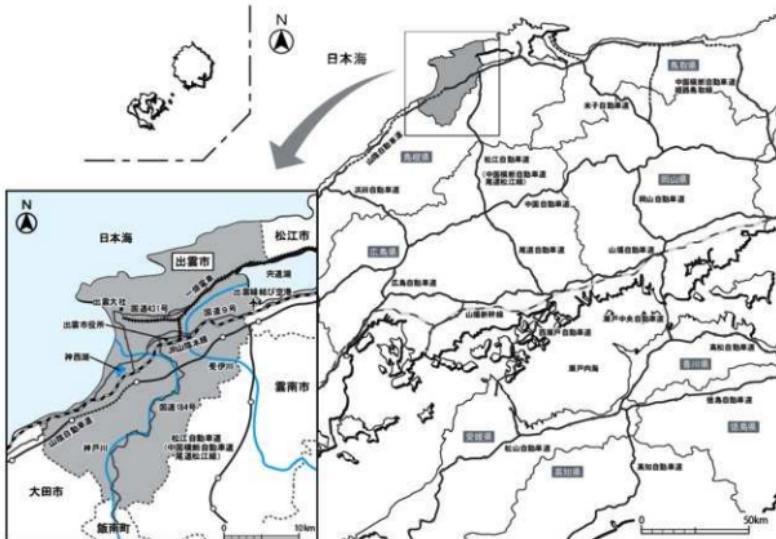
第1節 出雲市の位置と概要

田儀櫻井家たら製鉄遺跡が所在する出雲市は、島根県の東部、宍道湖の西側に位置し、北部は『出雲國風土記』の国引き神話で知られる島根半島、中央部は出雲平野、南部は中国山地で構成されている。市域は東西約30km、南北約39kmの範囲に広がり、東は松江市、西は大田市、南は雲南市・飯南町に接し、面積は624.36km²となっている⁽¹⁾。

道路は、本市の中央部を東西に横断する国道9号を軸に、出雲、大社、平田地域を結ぶ国道431号、南部の山間地域を結ぶ国道184号などが通り、それらが道路網の骨格となっている。

また、国道9号と並行する山陰自動車道は、現在西は出雲ICまで開通し⁽²⁾、宍道JCTからは松江自動車道が南方面に伸び、中国自動車道、尾道自動車道と接続している。

広域的な公共交通機関も比較的整っている。宍道湖西岸にある出雲縁結び空港からは、東京(羽田)や大阪(伊丹)、仙台、静岡、名古屋(小牧)、神戸、福岡、高崎への国内線が運行している。鉄道はJR山陰本線が東西に伸び、宍道湖の北側には松江市と出雲市(出雲市駅および出雲大社前駅)をつなぐ一畠電車が通っている。このほか主要都市へ直行する高速バスもある。



第21図 出雲市の位置

(1) 出雲市としての治革は、昭和16年(1941)の市制施行から始まるが、現在の出雲市は、平成17年(2005)の「平成の大合併」による出雲市と平田市、大社町、佐田町、湖陵町、多伎町の合併、および平成23年(2011)の斐川町の編入により誕生した。

(2) 山陰自動車道は、国土交通省中国地方整備局が事業を進めており、全線開通に向けて各地で道路建設事業が進行している。

第2節 出雲市の地理的環境

1. 出雲平野の形成

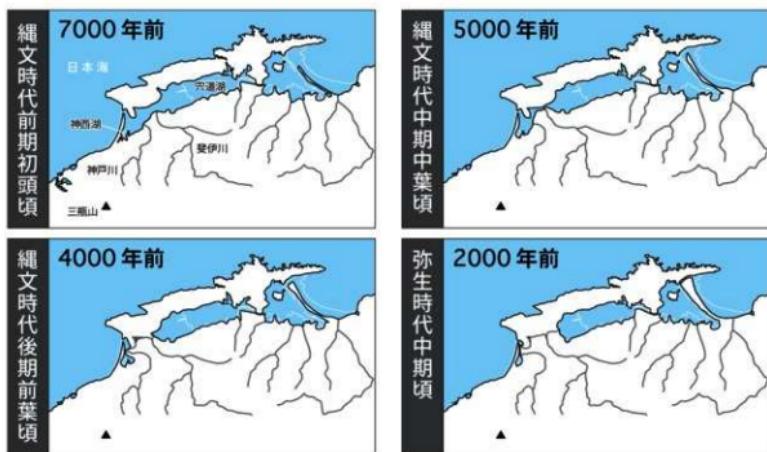
出雲市の歴史は出雲平野の成り立ちと密接に関わっており、地形の形成については、古くは『出雲國風土記』の国引き神話でも語られている。現在の出雲市は、北の島根半島と南の中国山地の間に平野が広がり、中国山地から平野に流れ出でた斐伊川と神戸川がそれぞれ宍道湖と日本海に注ぎ込む地勢である。

(1) 三瓶山の噴火と沖積作用

出雲平野の形成が進むきっかけとなったのは、約5,500年前（縄文時代前期後葉頃）と約4,000年前（縄文時代後期前葉頃）の三瓶山^{さんべきん}の噴火である。約7,000年前（縄文時代前期初頭頃）には古宍道湾が島根半島と中国山地を分断しており出雲平野は存在していなかったが、これらの噴火で供給された多量の土砂が神戸川によって運ばれ、出雲平野の発達を促した。約2,000年前（弥生時代中期頃）までには現在の出雲平野の原形が形成されていいたと考えられているが、平野の西側にはまだ大きな水域が広がっていた。奈良時代に「神門水海」と呼ばれたこの水域は、その後の沖積作用によって規模が縮小し、今では西湖^{ひたちこ}としてその名残をとどめている。

(2) 斐伊川東流による平野の拡大

いま一つ平野形成において注目される事象として、斐伊川の東流が挙げられる。かつては平野で東西両流し、東は宍道湖、西は「神門水海」に注いでいた斐伊川は、中世末から近世初頭頃には完全に東流するようになる。江戸時代には上流で盛んに行われた鉄穴流しによって多量の砂が下流に運ばれるようになり、宍道湖西岸ではこの砂を利用した川選えにより新田開発が進められた。



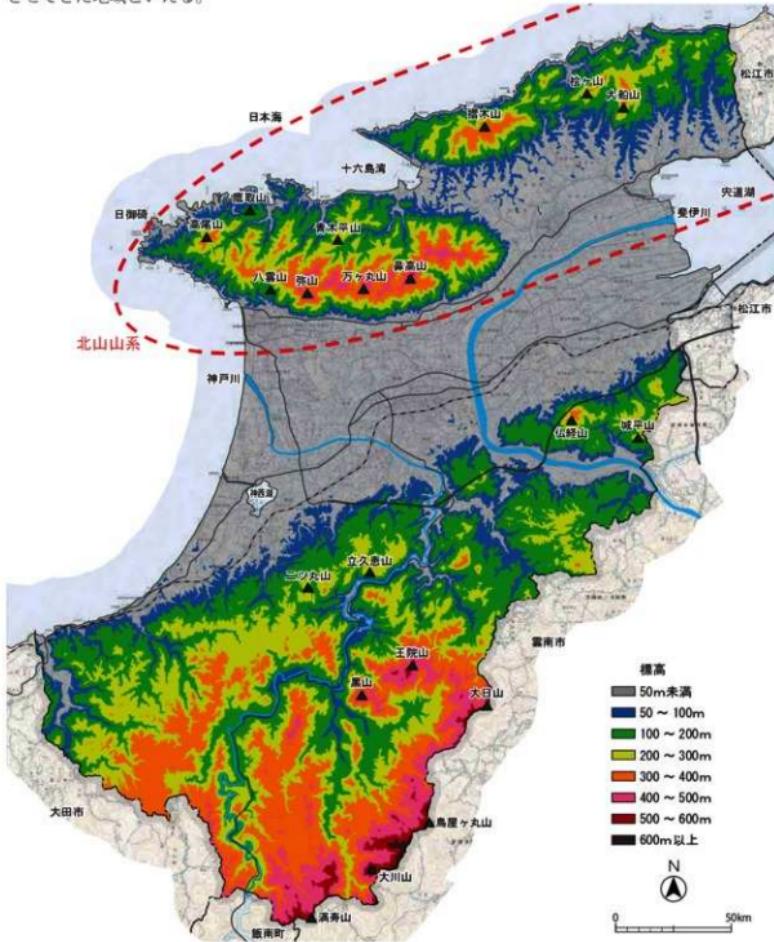
第22図 縄文時代から弥生時代の島根半島および出雲平野の地形変遷（中村2014⁽³⁾に加筆）

(3) 中村唯史 2014 「縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 87～92頁

(3) 地理的な特徴

火山と開発の二つの要因で急速に平野が拡大したことは、全国でも特異な例である。また、中国山地北縁、それに並行して延びる島根半島、そしてその間に広がる出雲平野、この三者が示す地勢は国内ではかなり特殊である。

さらに、日本海を隔てて朝鮮半島や大陸と対面し、沖では対馬海流つしまかいりゅうとリマン海流が行き交う場所に位置している。こうした地理的条件を背景に、出雲平野周辺には原始・古代から近世に至るまで、各方面からさまざまな文化が流入した。出雲平野を中心とする出雲市域は、それらを受容し独自に展開してきた地域といえる。



第23図 出雲市の地形

2. 地形・地質

出雲平野は、中国山地に源を発する斐伊川と神戸川により形成された沖積平野で、山陰地方では随一の規模を誇る。

日本海に面する島根半島の北および西岸は、リアス式海岸が展開していくつかの入り江が形成されており、特徴的な地形と景観を生み出している。このうち日御崎を中心とした西岸域は大山隣岐国立公園に指定されている。

南の中国山地は比較的なだらかな山地であり、雲南市などの境界付近では高いところで500 mから600 mの稜線が形づくられている。その谷間に斐伊川、神戸川とその支流が流れ、下流の平野部へ注いでいる。斐伊川の下流部は全国でもまれな天井川としての地形と景観を呈し、神戸川中流部には国の名勝・天然記念物および県立自然公園の立久恵峠がある。

このように出雲市は、海、山、平野、川、湖と多彩な地形を有する。全体的に捉えると、北から島根半島の北山山系、平野と湖沼、中国山地が連なり、出雲平野は南北の山地に挟まれた形となっている。加えて、島根半島は東西に長く、かつ日本海に突き出した特徴的な地形であり、沖では対馬海流やリマン海流が行き交うことから、古来、大陸・朝鮮半島との交流を支える基盤でもあった。

こうした地形の中には日本海形成期の特徴的な地質を見ることができ、小伊津町の砂泥互層（ターピダイト層）⁽⁴⁾、日御崎の流紋岩柱状節理（特に経島）⁽⁵⁾などを挙げることができる。

また、『出雲国風土記』ゆかりの地として、出雲市域には島根半島（西部）や瀬の長浜、かんなびやま⁽⁶⁾（大船山、仏経山）があり、周辺には佐比売山（三瓶山：大田市）や火神岳（大山：大山町ほか）、かんなびやま（朝日山、茶臼山：松江市）がある。



第24図 出雲国風土記の代表的なゆかりの地

(4) 層になったシマ状の地層。小伊津町のものは砂岩層（灰色）と泥岩層（黒色）が交互に積み重なった砂泥互層で、日本海拡大期に海底で形成された。道路の近くに大規模に露頭しているため景観的にも迫力があり、他にはあまり例を見ない典型的なものであることから、地学習習や地域学習の教材的価値も高い。

(5) 柱状節理の様子が、経巻（経文を書いた巻物）を積み重ねたように見えることから、この名前がつけられた。ウミコの繁殖地として有名で、国の天然記念物に指定されている。

(6) 「かんなび」とは「神の隠れこもれる」という意味で、「かんなびやま」は信仰の対象として古代人に祭られていた山を指す。『出雲国風土記』では「神名権野」、「神名火山」、「神名権山」と表記され、意宇郡、秋鹿郡、橘龍郡、出雲郡の4カ所にあったとされる。これらはいずれも「入海（穴道瀬）」を取り巻くようにそびえる。

3. 動植物

出雲市の北部に位置する島根半島一帯や南部の山地などには、二次林を中心に多様な植生が存在し、植生と相まって多様な動物の生息地となっている。

植生としては、アカマツやコナラの二次林が主体であり、寺社林など一部にスタジイなどの自然植生がみられる。また、スギやヒノキの植林地も多く、大社海岸や長浜海岸、浜山などには、先人が植栽したクロマツ林も残っている。

水辺の自然環境としては、斐伊川、神戸川を骨格として、新内藤川、平田船川、赤川、十間川などの中小河川が流れ、東には宍道湖、西には神西湖を擁し、貴重な動植物などが生息・生育する水辺の環境を備えている。特に宍道湖は中海とともに平成17年(2005)11月に、湿地の保全と賢明な利用を進めることを目的としたラムサール条約登録湿地になっている。宍道湖西岸にある斐伊川河口一帯は、天然記念物のマガ・ヒシケイなどのガン類、コハクチョウなどの集団越冬地であり、西日本最大の野鳥の宝庫として知られている。宍道湖西岸には、野鳥観察などを目的とした宍道湖グリーンパークもある。

また、宍道湖には新種として発見されシンジコハゼと命名された小型の珍しいハゼが生息するほか、斐伊川の源流から中流域にかけては国指定特別天然記念物のオオサンショウウオが生息している。加えて、宍道湖や神西湖、神戸川河口部にはヤマトシジミが生息し、シジミ漁が盛んに行われている。

この他、島根半島北部の猪目や鷲浦、出雲市南部の神戸川、出雲市西部の田儀や小田などには、自然度の高い清澄な河川に生息し、河川の指標動物でもあるカジカガエルが生息している。なかでも島根半島に生息するカジカガエルは、標高の低い海岸の近くに生息していることで注目されている。

植物では、佐田町反辺が島根県の固有種であるイズモコバイモの発見地として知られているほか、立久恵峠一帯は固有種のオオメノマンネングサや、オッタチカンギク、イワギリソウ、イブキジャコウソウなどが生育しており、植物の宝庫として知られている。

天然記念物では、経島ウミネコ繁殖地、日御崎の大ソテツが国の天然記念物に、立久恵は国の名勝・天然記念物に指定されている。そして、国指定特別天然記念物では、近年、トキの分散飼育・繁殖に市が取り組んでいるほか、田園地帯を中心にコウノトリの飛来が確認されている。また、日御崎の黄金孟宗群落は県の天然記念物に、立久恵峠特殊植物群落やコマチダケの叢生(大社町)、神西の岩坪(東神西町)などは市の天然記念物となっている。自然公園では、宍道湖および北山山系のいちばんやくしま(北山山系)は県立自然公園に指定されている。

さらに、県立出雲高等学校には、前身の島根県女子師範学校で博物学(特に植物学)を教えていた



第25図 経島のウミネコ



第26図 立久恵峠

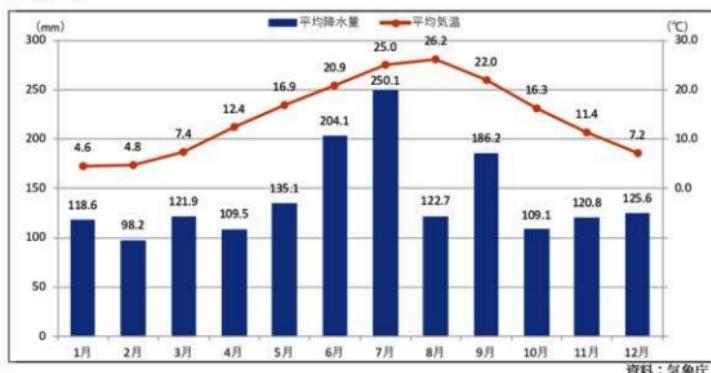
平田駒太郎教諭が整備し、大正8年（1919）に「平田植物園」と命名された植物園（久徴園）が今も引き継がれており、全国に誇れる学校植物園となっている。

4. 気候

出雲市の気候は日本海側気候であり、冬は曇りや雨、雪の日が多くなっている。平野部での積雪はそれほど多くはないが、北西の季節風が強く、その対策として築地松や防風林がつくられてきた。

年間平均気温は14.6°Cであり、月平均気温は1月が最低の4.6°C、8月が最高の26.2°Cである。また、8月の最高気温の平均は31.1°Cとなっている。

年間平均降水量は1,685.2mmであり、7月、6月および9月の降水量が相対的に多くなっている。また月の日照時間は、冬期（12月～2月）には100時間前後を割り込み、一方で5月、8月は200時間を超えていている。



第7表 出雲市の気候

要素	降水量 (mm)	平均気温 (°C)	日最高気温 (°C)	日最低気温 (°C)	平均風速 (m/S)	日照時間 (時間)
統計期間	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1987～2010
資料年数	30	30	30	30	30	24
1月	118.6	4.6	8.1	1.0	2.7	55.7
2月	98.2	4.8	8.9	0.6	2.6	79.8
3月	121.9	7.4	12.2	2.3	2.5	134.3
4月	109.5	12.4	17.9	6.4	2.4	183.9
5月	135.1	16.9	22.2	11.3	2.2	206.0
6月	204.1	20.9	25.7	16.4	2.1	162.2
7月	250.1	25.0	29.1	21.3	2.1	177.4
8月	122.7	26.2	31.1	22.0	1.9	211.4
9月	186.2	22.0	26.8	17.8	1.9	150.8
10月	109.1	16.3	21.7	11.2	1.8	158.5
11月	120.8	11.4	16.2	6.6	2.0	107.7
12月	125.6	7.2	11.1	3.1	2.5	72.9
年	1,685.2	14.6	19.2	10.0	2.2	1,693.2

資料：気象庁

5. 景観

出雲平野は、山陰地方随一の広さを有する穀倉地帯であり、そこには散居集落が広がっている。多くの家には築地松があり、北・西面を中心にクロマツを中心とした高木で囲まれている。この築地松が散在する景観は、出雲地方独特のものであり、10数mものクロマツが陰手刈という伝統的な職人技で美しく刈り込まれている。築地松に囲まれた屋敷は、春には水の張られた水田に浮かび、夏には緑の絨毯の中に、秋には黄金色の稲穂に包まれ、冬には北西の季節風が吹きすさぶ雪景色にたたずみ、四季を通じて様々な表情を変える景観を見せてくる。こうした景観を全体的に眺望する地点として、出雲平野の両側に位置する北山山系および中国山地に幾つかのビューポイントがあり、特に前者に位置する旅宿山からは、眼下に広がる散居集落を見渡すことができる。また、数は少なくなったが、出雲地方独特の反り棟を有する茅葺き民家が残っている。

散居集落は、富山県の砺波平野や、宮城県の仙台平野、岩手県の胆沢平野などにもあり、家の周りに屋敷林があるが、複数の松を一体的に刈り込んだ築地松のような屋敷林はなく、築地松に囲まれた散居集落景観は、出雲平野にしか見られない大変珍しいものである。

出雲平野の北西側の大社地域には出雲大社があり、国宝の本殿や重要文化財の楼門をはじめとした建造物群と社叢などによって、幽玄な景観を醸成している。その南には、神門通りを中心に門前町が形成され、重要文化財の旧大社駅本屋、登録有形文化財の出雲大社宇迦橋大鳥居、一畠電鉄出雲大社前駅舎などが、歴史的な佇まいを印象づけている。門前町は出雲大社の東側にかつて千家・北島国造家に仕えた神職らの屋敷が並んでいる社家通りがあるほか、出雲大社の西側にも広がり、神迎の道やお宮通りに伝統的な町家が建ち並ぶ景観が残っている。また、門前町の西側には稻佐の浜が広がり、奉納山公園展望台からは、稻佐の浜を含め齒の長浜を俯瞰でき、遠くには『出雲國風土記』(国引き神話)で佐比売山と記された三瓶山を望むことができる。

一方、出雲平野の北東側に位置する平田地域には、江戸末期から明治初期にかけて木綿の集散地として栄えた名残を今に伝える木綿街道が位置し、宍道湖につながる平田船川周辺には、造り酒屋や醤油醸造元などの商家、町家の建物が残っており、路地的な空間と合わせて下町情緒を感じるまちなみを残している。

出雲平野の北に横たわる島根半島は、リアス式海岸の特徴的な風景が見られるとともに、変化に富む地形と相まって、入り江の浦には漁村や港町などの集落が独特的な景観を生み出している。また、冬には十六島のり（標準和名：ウッブルイノリ）の摘み取りが行われるなど、伝統的な生業・生活文化、風物詩としての景観も息づいている。

出雲平野の東側の宍道湖、西側の神西湖では、シジミ漁などが行われ、その文化的な景観が風物詩となっている。また、宍道湖西岸および斐伊川河口一帯は、生息する動植物とともに特徴的な自然景観を形成している。一方、神西湖は景勝地としても知られ、江戸時代後期には「神西湖九景」が京都の絵師によって描かれた。

島根半島の西端部周辺には、朱色が映える重要文化財の日御碕神社社殿や、登録文化財の出雲日御碕灯台、ウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定されている経島などがある。これらは大山隠岐国立公園に指定されている日本有数の景観の一つである。

その山地部にある国の指定史跡鰐淵寺境内の一帯、神戸川中流域の国の名勝・天然記念物である立久恵の一帯は、優れた自然環境を有する景勝地であり、県立自然公園に指定されている。

出雲市西部の日本海沿岸は、島根半島とは対照的な砂浜が続く。日本海から吹き付ける強い季節風

と飛砂防止のために植林された松が連なり、白砂青松の海辺の景観を見ることができる。多伎地域では、日本海を行き交う廻船かいせんで栄えた近世の港町の面影が口田儀のまちなみの景観に今も残されている。

この他、出雲市南部の山間地では、広範囲に多くの棚田が営まれており、平野の水田とは趣を異にする独特の風景が広がっている。

さらに、佐田地域など神戸川の中流域や斐伊川流域に広がる田畠、集落などの文化的景観と河川と山々が織りなす自然景観は、人々のくらしや地域の歴史文化を伝えている。

近年の新たな要素として、平成29年度(2017)に日本遺産に認定された「日が沈む聖地出雲」に関連した景観は、稻佐の浜や日御崎を中心とした構成文化財により、夕日にまつわるストーリーを体感できる美しさである。



第28図 出雲平野東部と斐伊川・宍道湖（南西から）



第29図 築地松



第30図 神門通り



第31図 稲佐の浜



第32図 木綿街道



第33図 佐田町の景観（伊秩城跡から）

第3節 出雲市の社会的状況

1. 人口動態

出雲市の近年の人口の推移を国勢調査からみると、平成12年（2000）以降、減少・停滞傾向にあり、平成17年（2005）から平成27年（2015）の10年間では約1,800人の減少となっている。平成22年（2010）から平成27年（2015）は、市全体で微増となっているが、出雲地域、斐川地域を除く5つの地域（平田、佐田、多伎、湖陵、大社）では減少傾向が続いている。

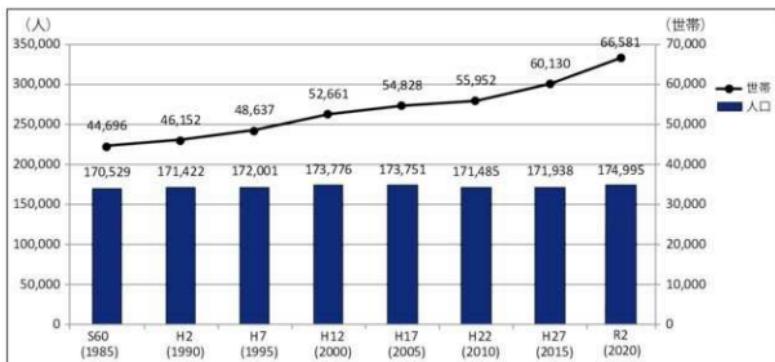
世帯数（国勢調査）についても、市全体および出雲地域、斐川地域では増加傾向にあるが、他の5つの地域（平田、佐田、多伎、湖陵、大社）では減少または停滞傾向にある。世帯人数については、市全体および各地域とも減少傾向が続いている、市全体で1世帯当たり3人を割り込んでいる。

島根県についてみると、人口と世帯人数は減少傾向、世帯数は増加傾向にある。

第8表 出雲市および各地域の人口・世帯の推移

地域名	H17 (2005)			H22 (2010)			H27 (2015)			R2 (2020)			
	人口	世帯	世帯 人数	人口	世帯	世帯 人数	人口	世帯	世帯 人数	人口	世帯	世帯 人数	
内 部 地 域 (島)	出雲市	173,751	54,828	3.17	171,485	55,952	3.06	171,938	60,130	2.86	174,995	66,581	2.63
	出雲	88,805	30,200	2.94	89,020	30,973	2.87	92,074	34,638	2.66	94,379	37,675	2.51
	平田	28,071	7,909	3.55	26,908	7,858	3.42	25,294	7,794	3.25	24,833	8,589	2.89
	佐田	4,213	1,169	3.60	3,816	1,146	3.33	3,406	1,075	3.17	3,211	1,168	2.75
	多伎	3,905	1,276	3.06	3,767	1,253	3.01	3,543	1,232	2.88	3,366	1,315	2.56
	湖陵	5,732	1,758	3.26	5,369	1,727	3.11	5,270	1,748	3.01	5,241	2,083	2.52
	大社	15,581	4,799	3.25	14,916	4,767	3.13	14,342	4,795	2.99	14,504	5,439	2.67
	斐川	27,444	7,717	3.56	27,689	8,228	3.37	28,009	8,848	3.17	29,388	10,312	2.85
島根県	742,223	260,864	2.85	717,397	262,219	2.74	694,352	265,008	2.62	679,324	292,134	2.33	

資料：総務省統計局「国勢調査結果」、令和2年1月1日時点住民基本台帳



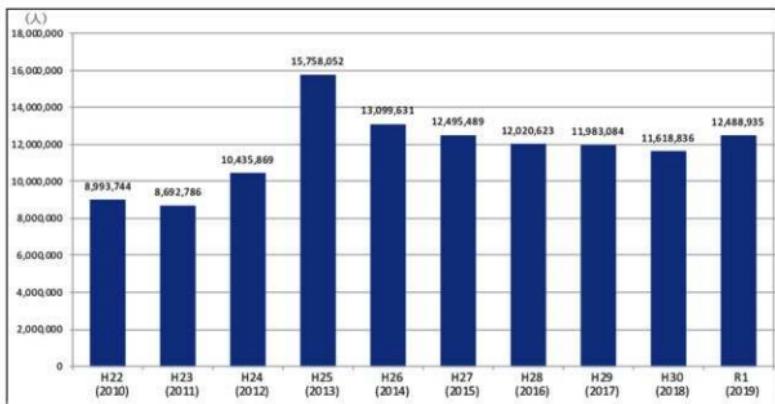
資料：総務省統計局「国勢調査結果」、令和2年1月1日時点住民基本台帳

第34図 出雲市の人口・世帯数の推移

2. 入込観光客数

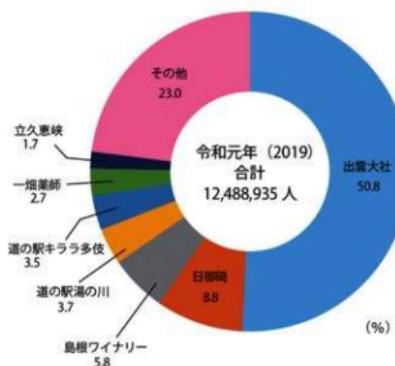
出雲市の入込観光客数は、令和元年(2019)において約1,250万人となっている。平成25年(2013)には出雲大社の「平成の大遷宮」があったことから、1,600万人近くまで増加した。その後減少に転じているが、令和元年度(2019)には前半と比べて増加傾向にある。

また、観光地点別で入込観光客数(令和元年)を見ると、およそ半数は出雲大社となり、これ以外では日御崎、島根ワイナリー、道の駅湯の川、道の駅キララ多伎、一畑薬師、立久恵峠が上位となっている。



資料：鳥取県観光動態調査

第35図 出雲市の入込観光客数の推移



第36図 出雲市の観光地点別入込観光客数(令和元年)

第9表 文化財に関連する主な観光地点別内訳

名称	入込客	
	延べ数	割合
出雲大社	6,340,000	50.8%
日御崎	1,094,040	8.8%
一畑薬師	332,000	2.7%
立久恵峠	215,688	1.7%
古代出雲歴史博物館	214,044	1.7%
須佐神社	171,900	1.4%
旧大社駅	83,821	0.7%
出雲文化伝承館	82,500	0.7%
長浜神社	71,867	0.6%
万九千神社	67,350	0.5%
荒神谷遺跡(博物館+公園)	35,025	0.3%
出雲弥生の森博物館	30,039	0.2%
平田本陣記念館	29,858	0.2%
手鏡記念館	8,965	0.1%
原鹿の旧豪農屋敷	8,588	0.1%

資料：鳥取県観光動態調査(令和元年)

第4節 出雲市の歴史的環境

平成17年（2005）の合併によって新たな枠組みとなった現在の出雲市においては、文化財行政全体の基本構想として平成29年（2017）1月に策定された「出雲市歴史文化基本構想」のなかで、現在に至るまでの通史が調査研究に基づいてまとめられている。ここではその内容をもとに出雲市域の歴史的環境を時代ごとに概観する。

【旧石器時代】

島根県内の旧石器時代の遺跡は少なく、出雲市域においてもこれまで確認されていなかった。このような状況のなか、平成21年（2009）に多伎町内で砂原遺跡学術調査団が発掘調査を行い、出土した石器が約11～12万年前の国内最古のものとして報告されている。

一方で、各学会や専門家の中では出土した石器について、その認定をめぐり慎重な評価を強調する意見もみられる。今後は、学術的な論議を見守り遺跡の評価付けを進めていくこととなる。

【縄文時代】

縄文時代は出雲平野の大部分を古宍道湾が占めている期間が長く、人々が生活を営める場は山麓などに限られていた。そのため出雲平野中央部での縄文時代の遺跡は、あまり多く確認されていない。

出雲平野では古い段階である早期の遺跡として、平野西部の砂丘上にある上長浜貝塚や北山山麓に位置する山持遺跡、菱根遺跡などが挙げられる。続く前期から中期までの遺跡はあまり確認されていないが、中期末から後期初頭には出雲平野東部の上ヶ谷遺跡、神戸川左岸の三田谷Ⅰ・Ⅲ遺跡や築山遺跡のほか、出雲平野西南部の麓Ⅱ遺跡などが確認され、出雲平野でも人々の活動が認められる。

平野部への人の進出 後晩期は海退が進み、さらに三瓶山の噴火に伴う三角州の発達により平野形成が促進されることから、人々の活動の場が平野の中央部でも盛んになったと考えられる。平野中央部では矢野遺跡や藏小路西遺跡が認められるようになるほか、山裾で三田谷Ⅰ遺跡、出雲大社境内遺跡、後谷遺跡が、神西湖（神門水海）の南で御領田遺跡、京田遺跡などが展開する。京田遺跡では、北海道産の水銀朱で彩られた東日本に由来する異形土器が西日本で初めて見つかり、出雲平野に住もう当時の人々が遠隔地との交流や交易を行っていた様子を具体的に物語る。これらの遺跡は、いずれも当時は水域が近くまで迫った場所に位置しており、漁労を行ううえでは適地であったと考えられる。

【弥生時代】

弥生時代に入り本格的な水稻農耕が行われるようになると、広大な土地と水が豊富な出雲平野多くのムラが営まれるようになる。そしてこれらのムラは、中期から後期にかけて一つにまとまり、やがてクニへと発展していく。

ムラの出現 縄文時代の三瓶山噴火に伴い三角州が発達して出雲平野の地形が形成されると、徐々に平野部で集落が増えてくる。弥生時代前期には矢野遺跡などの目立った集落が認められるようになり、弥生時代中期になると、平野部に多くのムラが出現する。

ムラからクニへ 多くのムラが併存するようになった広大な出雲平野には、その生産力を背景に大きな勢力をもつ集団も出現したようである。その証として大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡が挙げられる。ここで見つかった358本の銅劍は、発見当時に日本中で出土していた銅劍の総数を上回っており、弥生時代後期初頭のこの地に大きな勢力があったことを裏付けている。

そして弥生時代後期後葉には、西谷墳墓群として大型の四隅突出型埴丘墓が次々と築かれる。これらは墓の規模や豪華な副葬品からまさに王墓と呼べる。この時期に「出雲王」が出現し、出雲平野の多くのムラをクニとしてまとめたと考えられる。

他地域との交流 西谷墳墓群の2号墓や3号墓では、大陸からもたらされたガラス製品や水銀朱のほか、吉備や北陸、九州北部の特徴を持つ多量の土器が出土している。また、猪目洞窟遺跡では弥生時代後期に埋葬された人骨の腕の部分に、南海で採れたゴホウラ製の貝輪がはめられていた。これらの例から、弥生時代も繩文時代後期から引き続いて他地域との交流が活発に行われたことが分かる。

【古墳時代】

古墳時代は、現在の松江市域から安来市域にかけての出雲東部と、出雲市域を中心とする出雲西部でそれぞれ大きな勢力が認められる時代である。

出雲東部では前期以降、前方後方墳や方墳を主とした古墳が継続的に築かれるのに対して、出雲西部では前期から中期までの古墳が少なく、後期になってからその数が一気に増え、墳形も前方後円墳や円墳を主とするという特徴がある。これら二つの勢力を象徴する後期の古墳が、前方後方墳の山代二子塚古墳（松江市）と前方後円墳の今市大念寺古墳（出雲市）である。墳丘規模もほぼ同じであることから、これらは拮抗した勢力で出雲を二分する東西両雄の墓と考えられている。

前半期の古墳の分布 出雲西部では前期の古墳は少ないが、中期になると数が少し増え、密に分布する地域が認められるようになる。この時期に、穴道湖南岸周辺では神庭岩船山古墳や軍原古墳、神西湖周辺では常楽寺柿木本1号墳や間谷東古墳・北光寺古墳などの分布が見られ、これらはいずれも陸運や水運という交通の要衝を押さえた当時の勢力分布を反映していると思われる。

社会構造を示す古墳群 後期の上塩治築山古墳の周辺では、この首長墓を取り巻く円墳群が発見される。これまで単独で築かれたと考えられていた上塩治築山古墳が、実は小規模な円墳群に取り巻かれ、さらにその外側を上塩治横穴墓群が取り囲んでいる様相が明らかになった。首長墓を頂点とした円墳群と横穴墓群の配置構成は、当時の社会構造を反映するものとして注目される。

垣間見た精神世界 未盗掘古墳である宮富中村古墳の石室内では多数の出土品が見つかったほか、埋葬が終了してから何年か経過した後に石棺や副葬品が破壊されていることが分かった。环や鑿などの土器には飲食物が入れられていたと考えられることから、「古事記」に記された「ヨモツヘガイ」の思想を彷彿とさせる儀礼が行われていたと思われる。また、石棺や副葬品の破壊は被葬者のよみがえりを防ぐための再生阻止儀礼であることが明らかとなった。これまで後世の墓荒しの仕業と考えられていた石室内の破壊の痕跡について、再考を迫る大きな発見となった。当時の人々の精神世界や生死観が垣間見られる数少ない貴重な事例である。

【奈良・平安時代】

出雲には奈良時代に編纂された『古事記』や『日本書紀』、『出雲国風土記』に記載されている伝承地や登場地が今でも数多くあり、当時の情景をうかがい知ることができる。

また、平安時代末期に編まれた歌謡集『染塵秘抄』などの書物を紐解くと、出雲が全国的に知れ渡った聖地であったことがうかがえる。

風土記からたどる出雲市 『出雲国風土記』はほぼ完全な状態の写本が残る唯一の風土記であることから、他地域との比較において出雲の魅力を一層際立たせる貴重なものである。『出雲国風土記』には郷里編成や地名の由来などが詳細に記されており、現在の出雲市は「出雲郡」、「神門郡」、「楯縫郡」などとして登場する。これらの条文中に記述された山野や川などの自然の名称、地名、神社の多くは、今に受け継がれている。

また、吉志本郷遺跡から見つかった大型建物跡は、神門郡家の郡庁院と推定されており、後谷遺跡で発見された礎石建物は出雲郡家の正倉と考えられているほか、天神遺跡や三田谷I遺跡などからも官衙施設関連の遺構や遺物が発見されている。

さらに、近年の発掘調査で見つかった杉沢遺跡などの道路遺構は、「出雲國風土記」で「正西道」と記載される古代山陰道と考えられている。塩冶地区の古代山陰道推定ルート付近には「朝山郷新造院」に比定される神門寺境内廃寺跡がある。また、築山遺跡では火葬骨など仏教に関連する遺物が見つかっており、奈良時代に仏教をはじめとする様々な文化が伝わったことを物語っている。

広く知られていた出雲 奈良時代以前の白鳳期には、鰐淵寺に残る持統6年(692)に制作された銅造観音菩薩立像が金銅仏の貴重な基準作としてよく知られており、「出雲国」と書かれた最古の金石文が記されている。

平安時代の特筆すべき文化財としては、大寺薬師の仏像群、鰐淵寺の仏像や神像が挙げられる。大寺薬師には10世紀頃の薬師如来坐像のほか9世紀頃の中央の仏師の作と考えられる四天王立像がある。これら仏像群を納めていた大伽藍は、慶安3年(1650)の大洪水と山崩れで壊滅したとされ、その後、住民たちによって救い出され今に守り伝えられた仏像群は、かつて重要な仏教施設がこの地に存在していたことを伝えている。また、鰐淵寺の牛頭天王像や木造神像群は、平安時代の鰐淵寺における信仰形態や神仏習合のあり方を推定するうえでの貴重な彌刻群である。

10世紀の教養書にある「口遊」には「雲太・和二・京三」の記述がみられる。順に出雲大社本殿、東大寺大仏殿、平安京大極殿を示し、当時、出雲大社の本殿が巨大建造物として広く認知されていたことが分かる。さらに「梁塵秘抄」では、日御崎や鰐淵が「聖の住所」として記載されており、この地が仏教者たちの有名な修行の場であったことが分かる。

このように、北山周辺は出雲大社、鰐淵寺、大寺薬師など信仰に関する文化遺産が集中する地域で、古くから全国的に知られていた。

【中世】

中世は、荘園・公領制が出雲にも浸透し、新たな社会構成が成立する時代である。また、出雲大社(杵築大社)と鰐淵寺が強く結びついて隆盛を極めるとともに、武将の覇権争いと絡み合って中央の情勢がこの地にも持ち込まれ、大きな影響を与える動乱の時期でもあった。

海運の発展と市場の成立 鎌倉初期ごろまでは、全ての地域や住民がいずれかの荘園や公領に属することとなった。この中世社会の成立に伴い、各地から直接都に住む荘園領主のもとに年貢として大量の諸物資を輸送する必要が生じた。あわせて、生産力の増大に伴って日本海岸部での交易や、中海・宍道湖舟運の物資輸送も盛んになっていった。このため、古代律令制のもとでは輸送がもっぱら山陰道などの陸上交通によっていたものが、中世になると安価で効率的な海上交通へと移行した。そして、この日本海における水運の成立を契機に、杵築、宇龍、平田、大津、田儀などが港(津)として発展する。海上交通を中心とするこうした交通網の整備・拡大が陸上交通とも緊密に結びつき、杵築、平田、塩治、今市などでは市場が開かれるようになる。

出雲大社と鰐淵寺 中世は出雲平野の荒地が大々的に開拓される時期である。開拓がうまくいくとその土地の一部は出雲大社や鰐淵寺に寄進されること多く、両者は領地を拡大した。また、社会全体が仏教的性格をおびた中世において、出雲大社と鰐淵寺は神仏隔離原則に基づく神仏習合によって車の両輪のように一体となり、出雲の信仰の中心的存在として機能した。両者は明確に区別されながらも、出雲大社の主要な年中行事に鰐淵寺僧が参画するなど補完的に協力することで、国一宮としての機能を果たした。このような事例は全国的に稀で注目されている。

また、インドの靈鷲山が欠けて海に漂っていた浮浪山をスナヲが杵で突き固めたという中世の国引き神話は、出雲大社と鰐淵寺共有的縁起として成立したもので、当時の神仏隔離原則に基づく神仏習合の世界観を端的に表す興味深いものである。

盛隆を示す物証 出雲大社では平成12年(2000)の発掘調査でスギの大木を3本束ねて1本の柱とした巨大な柱が見つかった。これは鎌倉時代の本殿のものと考えられ、古い絵図で示されていた通り、当時は巨大神殿であったことが明らかになった。

一方、鰐淵寺境内では、近年の調査によって僧坊(僧の住まい)のあった可能性がある平坦面が90箇所確認された。山間の狭い土地に堂宇と僧坊が建ち並び、多くの僧侶が行き来する往時の鰐淵寺の様子が浮かびあがってきた。

出雲の武将 中世出雲国衙在庁官人の筆頭を務めた朝山氏や、鎌倉期の出雲国守護として塩冶地域に守護所を構えた塩冶氏などが注目されるが、南北朝期の守護塩治高貞(?-1341)は後醍醐天皇(在位1318-39)や足利尊氏(1305-58)に従って多くの戦果をあげ、歴史の転換期に重要な役割を果たした。高貞の活躍は、南北朝期の軍記物語『太平記』でも語られることとなる。

戦国時代の情勢 戦国時代に入ると出雲では尼子氏が勢力を拡大する。尼子経久(1458-1541)は鰐淵寺の運営に介入したほか、出雲大社の境内に三重塔、鐘楼などの仏教施設を次々に建てて神仏習合の景観を創出していった。このようにして経久は、寺社の権限を掌握することでその勢力を圧迫したのである。この動向は次の毛利氏時代にも継続されたことから、寺領や社領が減らされた鰐淵寺や出雲大社はその勢力を次第に弱めていくこととなる。

なおこの時期、多伎や佐田は石見国との国境であることから、軍事拠点として鶴ヶ城や高櫛城など多くの山城が築かれていった。

【近世】

近世に入ると、出雲・隠岐両国に封じられた大名の堀尾氏が松江に築城して城下町を整備する。その後、城下町として発展した松江市域に対して、出雲市域では広大な出雲平野での農産物などの生産やその集積・輸送を背景に町場(在郷町)が連携して発展していく。また、国学や洋学などの学問が出雲では独自の展開を遂げ、特に和歌では全国的にも注目される地域となった。

出雲平野の農地開拓 中世末から近世初頭に斐伊川が完全に東流するようになると、松江藩の水利政策により、河口付近では川違による穴道湖の農地開拓が進められた。こうして拡大した農地を基盤に繁栄した地主の中には後に豪農へと発展する者も認められる。

一方、斐伊川の東流により出雲平野の西部でも荒地の開拓が可能となった。大槻七兵衛(1621-89)による荒木浜の開拓がよく知られているが、秦喜兵衛(生没年不詳・西園)、三木与兵衛(1595-1643・通暁付近)、井上助時(1721-94・浜山)らも地域の荒地開拓に大きく貢献した。

木綿栽培とたら製鉄の盛行 元禄2年(1689)に松江藩が綿の栽培を奨励すると、出雲平野では18世紀に入ってから木綿栽培が盛んになる。そして、平田町、今市町、直江町、杵築町は町場として発展し木綿市が開かれるようになる。

農産物以外では、たら製鉄による鉄生産が注目され、出雲市域では田儀櫻井家や田部家によってたら操業が盛んに行われた。特に田儀櫻井家のたら製鉄遺跡は、本宅跡や山内従事者の住居跡などが残る宮本鍛冶山内遺跡のほか、生産に関連する遺構が残る越堂たら跡や朝日たら跡など、たら操業に関連する一連の遺構群が良好に残っており、歴史的に高く評価されている。

また、製鉄の原材料である砂鉄や木炭を搬入し、鉄製品などを出荷した田儀浦と口田儀のまちなみも当時の面影を今に伝える貴重な文化的景観である。

産物の水運 産物などの運搬には水運が利用された。出雲市域西部で生産された米などの産物や奥出雲方面から持ち込まれた物資は、高瀬川によって杵築(荒木川方)に集荷された後に杵築浦から松江藩の船で運ばれた。また、宇龍では松江藩の鉄が積み出された。

出雲大社と鰐淵寺の神仏分離 出雲大社は寛文の遷宮（1667）を契機に境内から仏教施設や鰐淵寺僧を一掃し、400年余りに及ぶ鰐淵寺との関係に終止符を打つこととなった。全国に先駆けて行われたこの神仏分離は、宗教史においても重要な出来事として位置付けられている。

その後、出雲大社は出雲御師と呼ばれる神職たちが全国各地に布教に赴き、多くの信者を杵築に招き入れる活動を積極的に展開した。杵築では参詣客を対象とした富くじも行われたことから、門前町は大きく発展した。

学問の発展 松江の学問や文化が武士を中心として発展したのに対し、出雲では神官や町人が中心となって発展したという特徴がある。

出雲はスナオガが最初に歌を詠んだ地とされることから和歌発祥の地として知られている。戦国期には千家、北島両国造家でおのの歌会が開かれていたようである。この潮流が江戸時代の和歌発展につながり、出雲歌壇は花開くこととなる。江戸の僧で歌人の明珠庵釣月（1659-1729）は、宝永年間（1704-11）に来雲し二条流和歌を広めたほか、「大社八景」の和歌を出雲大社に奉納した。江戸後期に入ると、本居宣長（1730-1801）に学んだ出雲国造家の千家俊信（1764-1831）が出雲に宣長の国学をもたらした。俊信は幕末の出雲（大社）歌壇に鈴屋流を導入して和歌盛隆の基礎を築き、私塾梅廻舎は多くの門人を育てた。その後、明治の初めころまでは、千家尊孫（1796-1873）や富永芳久（1813-80）の活躍により出雲歌壇は全国的に注目される存在となっていた。

その他の学問と私塾 このほか、出雲の学問の発展に貢献したとして、鳴瀬塾でシーポルトから西洋医学を学んだ西山砂保（1781-1839）、上塩治村に有隣塾を開いた伊藤宜堂（1791-1874）、英語学校の包蒙館を開いた勝部其業（1846-1933）らが挙げられる。

このように、出雲では、藩士の子弟の教育を行う松江の藩校（明教館・修道館）に対して個性ある私塾が設けられた。これらの私塾に富農富商層の子弟や神官、僧侶が相次いで入門し、高い知識と教養を身につけ、幕末から近代にかけて地域の指導的役割を果たしていったのである。

【近代】

近代の出雲市域における主な事項としては、鉄道の開設、紡績織物工場の進出、学校の設立などが挙げられる。ことに鉄道は寺社への参拝の利便を図るために整備され、鉄道開設により出雲大社や一畑寺の参詣者は年々増え続けていくこととなる。

鉄道の開設 米子から随時西へ延びてきた山陰線は、明治43年（1910）に出雲今市駅まで開通する。その後、支線の大社線が開通した明治45年（1912）以降、杵築町は出雲大社への参拝客で賑わうこととなる。

また、当時一畑講が盛んとなり一畑寺への参拝が増えてくると、平田を中心に東は松江から西は出雲大社に至る鉄道を要望する声が高まる。この路線は一畑軽便鉄道として、大正3年（1914）にまず今市-平田間が開通し、翌年今市-一畑間の全線が開通する。そして、出雲大社と宮島を結ぶという壮大な計画のもと昭和7年（1932）には大社宮島鉄道が今市-出雲須佐間で開通した。しかし、この計画は頓挫し宮島までの路線は実現せず、名称も出雲鉄道に変更され、昭和40年（1965）にはついに廃線となった。

一方で鉄道の普及は明治中頃から後半に盛んであった宍道湖における汽船定期航路が姿を消す要因にもなった。

製糸紡績・製織工場の進出 明治26年（1893）に平田製糸合資会社の設立を端緒に、出雲市では製糸紡績・製織工場の進出が相次いだ。明治32年（1899）頃に平田両全（株）、大正9年（1920）に出雲製織（株）（後の大和紡績）、大正12年（1923）に郡是製糸（株）今市工場、大正14年（1925）に

鍾湧紡績斐川工場が誕生し操業を始める。これにより出雲市は山陰地方における一大工業地帯となつたのである。

学校の設立 明治5年（1872）に学制が発布されると、平田の石橋孫八宅（石橋家住宅）に郷校が開設され、翌明治6年（1873）には旧郡屋（村役人の集会所）に平田一番小学が開校する。これが県内で最初の小学校の開校である。また、雨森精翁（1822-82）が明治11年（1878）に平田町に開いた漢塾亦樂舎は、公には中学校扱いとなっており地方の教育を補った。

高畠栽培 米の収量を図るために、出雲平野では高畠栽培による米作りが行われた。この農法は収穫後の晩秋から初冬にかけて湿田に高畠を掘りあげ、ここに裏作の綠肥として苜蓿と呼ばれるマメ科の植物を植えて栽培し、地中の窒素を造成することで米の生産性をあげる。出雲平野で特徴的にみられる農法ではあるが、大変な重労働を必要とするうえ、米の品質が良くないという問題も伴つた。

【現代】

出雲の歴史をたどるうえで現代は画期的な変化が多く認められる時代である。ここでは、出雲路のモータリゼーション化、平成の市町村合併、斐伊川放水路事業を取り上げる。

出雲路のモータリゼーション化 明治45年（1912）に国鉄大社線が開通して以来、大社駅の乗降客は年々増え続け、昭和26年（1951）にはピークを迎える。しかし、昭和37年（1962）に市街地北部に新設の国道9号が開通し、1960年代に自動車が大幅に普及すると急速に出雲路のモータリゼーション化が進んだ。その結果、公共交通機関である大社線は利用者が年々減少し、平成2年（1990）にはついに廃線となった。その後、20年余りにわたり出雲大社の門前町は徐々に衰退ていったが、平成21年（2009）に山陰自動車道が出雲ICまで開通すると、平成の大遷宮を契機に多くの参拝者が出雲大社を訪れ、門前町はかつての賑わいを取り戻した。

平成の大合併 出雲市、平田市、佐田町、多伎町、湖陵町、大社町の2市4町は平成17年（2005）に合併し、平成23年（2011）には斐川町も加わり新たな出雲市が誕生した。

この大合併は出雲平野を中心としたまさに「平成の国引き」ともいえ、出雲市は県央の中核都市として益々大きな発展が期待されている。

再びつながる斐伊川と神戸川 斐伊川放水路（総延長13.1km）はこれまで地域の人々を悩ませ続けた洪水を防ぐために開削された。明治初めの構想に端を発し、昭和56年（1981）に事業着手、平成25年（2013）6月に完成したこの放水路事業は、まさに100年の大計で「平成のオロチ退治」と称されている。この放水路は、斐伊川が完全に東流し神戸川とのつながりが断たれた江戸時代以来、両河川を再び結び付けるとともに、2000年に及ぶ出雲平野の治水の歴史を私たちに伝えている。



第37図 旧大社駅



第38図 斐伊川放水路（手前が斐伊川）（北東から）
(写真提供：国土交通省 中国地方整備局 出雲河川事務所)

第10表 出雲市に關わる主要な事項（歴史文化）

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
縄文 弥生	後期	前期	出雲平野の骨格ができあがり、集落が増加する	
		中期	最初の「ムラ」が出現する（原山遺跡・矢野遺跡）	
		後期	大規模集落が増え、多くの「ムラ」が出現する（四絡遺跡群など）	
		後期	四隅突出型墳丘墓が築造される（青木遺跡）	
			青銅器の祭祀が行われる（荒神谷遺跡）	
	239		環濠集落が規模を拡大する（古志遺跡群）	
			「クニ」的なまとまりが明確になる	
		終末	「王」が大型の四隅突出型墳丘墓に葬られる（西谷墳墓群）	
			出雲と吉備の首長が交流する（西谷3号墓など）	
			出雲最大の四隅突出型墳丘墓の築造（西谷9号墓）	
古墳	前期			卑弥呼が魏に遣使
		中期	大寺1号墳などが築造される	
		後期	北光寺古墳・神庭岩船山古墳などが築造される	
飛鳥	645	大化1	出雲国造に命じて神の宮（杵築大社か）をつくらせる	大化の改新
	659	（齊明5）	鶴淵寺所蔵の銅造観音菩薩立像がつくられる	
	692	（持統6）		
奈良	694	8		藤原京に遷都
	701	大宝1	忌部子首が出雲国司として赴任	大宝令施行
	710	和銅3	出雲国造果安、神賀詞を奏上（国史における神賀詞奏上の初見）	平城京に遷都
	716	靈龜2		
平安	733	天平5	『出雲國風土記』が撰上される	
	794	延暦13		平安京に遷都
	795	14	出雲国造人長、遷都により神賀詞を奏上	
	813	弘仁4	出雲国で俘囚の反乱が起こる	
	814	5	渤海国使王孝廉ら出雲国に来着。俘囚の反乱と渤海使への供給のため出雲国の田租が免除	
	833	天長10	出雲国造豈持、神賀詞を奏上（国史における神賀詞奏上の最後）	
	867	貞觀9	出雲・石見・隱岐など5国に四天王像が下賜され、新羅の賊心調伏、災変消却のための転読、修法などが命じられる	
	880	元慶4	出雲地震	
	1032	長元5	出雲国司橘俊孝、神託と偽って杵築大社を造営しようとして佐渡国に配流	
	1067	治暦3	杵築大社、圍垣から内遙堪を寄進される。出雲国における中世的郷の初見	
	1102	康和4	このころ、他国では神々が出雲に集まることから、10月を「神無月」と呼ぶようになったといふ	
	1179	治承3	このころ鶴淵・日御碕が撰津箕面・播磨書写山などとならぶ型の住所として知られる	
	1185	文治1		鎌倉幕府成立
	1186	文治2	頼朝の下文によって出雲孝房を杵築大社神主職に補任。源頼朝、出雲則房にかえて内蔵資忠を杵築大社總檢校職に補任する	
	1248	宝治2	杵築大社正殿式遷宮	
	1254	6	守護佐々木泰清、鶴淵寺は国中第一の伽藍だとする	
	1271	文永8	杵築大社三月会相撲・舞頭役結番帳、作成させる	

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
室町	1300	正安 2	幕府、出雲國守護佐々木貞清と国衙在所浅山時綱・多禰頼茂の3人在佐杵築大社造営奉行に任命	
	1332	正慶 1 (元弘 2)	後醍醐天皇、隱岐配流。隱岐行在所において飼淵寺根本堂を造営すると願文を立てる	
	1333	正慶 2 (元弘 3)	塙治高貞ら船上山に赴き後醍醐天皇に味方する。後醍醐天皇、王道再興の願文を杵築大社におさめ、宝劍のかわりとして神宝の劍をだすよう杵築神主に命じる	鎌倉幕府の滅亡
	1336	建武 3 (延元 1)	このころまでに、出雲・石見をはじめとする中国地方の武士多数が尊氏軍の馳せ参じるという	室町幕府が成立
	1341	暦応 4 (興国 2)	足利直義、飼淵寺北谷衆徒らに対し、佐々木高貞の誅伐を命じる	
	1344	康永 3 5	千家孝宗と北島貞孝、大社神主・国造職・所領と神事などについて和与する。杵築大社、千家・北島両国造家に分かれる	
	1355	文和 4 (正平 10)	飼淵寺の大衆、48 カ条におよぶ山内の式目を定め、連署起請する	
	1366	貞治 5 (正平 21)	倭寇鎮圧のため高麗王朝から派遣された金竈ら 17 人の使者、出雲に着岸。京都にむかう	
	1392	明徳 3		南北朝の合一
	1396	応永 3	出雲守護京極高詮、杵築大社三月会の法度を定める	
安土 桃山	1467	応仁 1		応仁の乱
	1508	永正 5	尼子経久、京極政経から事實上の守護権を継承	
	1509	6	尼子経久、飼淵寺に対し 3 カ条の掟を定める	
	1552	天文 21	尼子晴久、杵築大社に対し 20 カ条からなる掟を定める	
	1562	永禄 5 6	毛利軍、出雲今市に着陣し、出雲制圧にのりだす 宇龍に北国船や唐船が着岸する	
	1566	9	尼子義久、富田城を開城し毛利氏に下る	
	1570	元亀 1	毛利氏、飼淵寺の掟を定め、杵築大社において年 3 回の護摩供を行なうことを命じる	
	1573	天正 1		室町幕府の滅亡
	1576	4	杵築大社造営のため、出雲一国徳政令だされる	
	1583	11	九州名護屋にむかった丹後国田辺の城主細川幽斎、宍道湖を経て杵築大社に参詣する	
江戸	1588	16	毛利氏の奉行人、惣国の刀狩を命ぜられたが、日御崎社について一部は免除されたと伝える	
	1591	19	京都において出雲法楽の連歌が行われる 毛利氏、出雲国惣国検地にもとづき、千家・北島両国造家などに知行を行なう	
			秀吉の朝鮮出兵計画により杵築大社領のうち 1000 石が没収され、かわりに徳政が認められる	
	1597	慶長 2	吉川広家、秀吉から分配された明の賜物を杵築大社に寄進する	
	1600	5	堀尾忠氏、遠州浜松より出雲・隱岐両国 24 万石に封ぜられる	関ヶ原の戦い
	1603	8	出雲阿国、京都で「かぶき踊り」始め大評判となる	徳川家康、江戸に幕府を開く
	1609	14	杵築大社仮殿遷宮	
	1616	元和 2	三木与兵衛、菱根池跡地新田に着手	
	1633	寛永 10	出雲地方終日降雨、大水である。斐伊川土手武志村付近にて右岸決壊	
	1634	11	京極忠高、出雲・隱岐 26 万石に移封され松江藩主となる	
江戸	1638	寛永 15	松平直政、信濃國松本を転じて出雲国 18 万 6000 石に封じられ、隱岐國 1 万 8000 石を預けられる	

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
	1667	寛文 7	杵築大社正殿遷宮	
	1676	延宝 4	大槻七兵衛、荒木の砂山の植林	
	1678	6	大槻七兵衛、高瀬川開削に着手（87年完成）	
	1687	貞享 3	松江藩、差海川開削に着手・完成	
	1689	元禄 2	松江藩、桑・棉・楮・茶の栽培奨励	
	1717	享保 2	このころ、外国船、十六島浦にたびたび来航	
	1725	10	松江藩鉄方御法式を定め、鉄場所を4郡10カ所に定める	
	1732	17	雲隱石3国とも蛭吉による大削壁。神門で百姓一揆。 井戸平左衛門、甘藷栽培をすめる	享保の大飢饉
	1744	延享 1	杵築大社正殿遷宮	
	1770	明和 7	この年までに平田・直江・今市に木綿市が設置される	
	1778	安永 7	井上惠助、浜山の植林を完成	
	1806	文化 3	伊能忠敬、石見から出雲の海岸測量	
	1816	13	神門郡神西村・高岡村で百姓一揆	
	1832	天保 3	斐伊川に新川が開通した	
	1854	安政 1	安政南海沖地震 出雲大社付近 150棟倒壊	
明治	1868	明治 1		明治維新（江戸幕府の滅亡）
	1871	4	島根県と浜田県が成立	廢藩置県
	1872	5	平田の石橋孫八宅に郷校が開設される	「学制」の発布
	1873	6	旧郡屋に平田一番小学校創設。県下の小学第一号	
	1878	11	雨森精翁、私立学舎亦業舎開校（81年廃校）	
	1881	14	島根県が現在の県域となる	
	1889	22	製糸会社の平田両全株式会社設立	
	1890	23	ラフカディオ＝ハーン（小泉八雲）、英語教師として松江に赴任	
	1894	27		日清戦争（～95）
	1896	29	出雲・橋縫・神門郡を廃して簸川郡をおく	
	1903	36	日御碕灯台竣工	
	1904	37		日露戦争（～05）
大正	1912	大正 1	山陰線、出雲今市・京都間全通	
	1914	3	一畑軽便鉄道の出雲今市・雲州平田間開通	
	1920	9	出雲製鐵株式会社設立	
	1923	12	郡是製糸今工場操業開始	関東大震災
	1924	13	旧大社駅舎改築。現在の姿となる	
	1925	14	鍾淵紡績簸川工場操業開始	普通選挙法公布
昭和	1930	昭和 5	一畑電鉄（1925年社名変更）、川跡・大社神門間開通	
	1937	12		日中戦争開始
	1941	16	出雲市制施行	真珠湾攻撃
	1945	20	出雲市内が米軍機の空襲を受ける	戦争終結
	1965	40	一畑電鉄、立久恵線廃止	
	1966	41	出雲空港開港	
	1984	59	荒神谷遺跡から銅劍358本発見。翌年、銅鐸6個と銅矛16本発見	
	1994	6	斐伊川放水路事業起工（2013年工事完了）	
平成	1990	平成 2	大社線廃止	
	2005	17	出雲市・平田市・簸川郡大社町・湖陵町・多伎町・佐田町の2市4町が合併。新・出雲市となる	
	2011	23	斐川町が編入	東日本大震災

第2章第4節の内容は、出雲市歴史文化基本構想のほか次の文献を参考にした。また第10表については、松尾寿ほか 2005『島根県の歴史』山川出版社をもとに作成した。

参考文献

- 池橋達雄ほか 2004『莊原歴史物語』莊原公民館
池橋達雄ほか 2008『決定版 出雲・雲南ふるさと大百科』郷土出版社
湖陵町誌編纂委員会 2000『湖陵町誌』湖陵町
佐田町教育委員会 1976『佐田町史』佐田町教育委員会
島根県古代文化センター 2014『解説 出雲国風土記』島根県教育委員会
島根県歴史人物事典刊行委員会 1997『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社
大社町史編集委員会 1991『大社町史 上巻』大社町
大社町史編集委員会 1995『大社町史 下巻』大社町
大社町史編集委員会 2008『大社町史 中巻』出雲市
大社まちかど百花編さん委員会 2005『大社まちかど百花』大社町
内藤正中ほか 1997『図説 島根県の歴史』河出書房新社
平田市誌編さん委員会 1994『平田市誌』復刻版 報光社
平田市大事典編集委員会 2000『平田市大事典』平田市役所
松尾寿ほか 2005『島根県の歴史』山川出版社
和田貞夫ほか 2012『図説 出雲・雲南の歴史』郷土出版社



第39図 現在の口田儀のまちなみと田儀港（北東から）

第5節 出雲市の文化財の現状

1. 指定文化財等の状況

出雲市には、指定文化財が全体で 247 件あり、国指定が 50 件、県指定が 70 件、市指定が 127 件となっている。

このうち国指定には、3 件の国宝（出雲大社本殿、秋野鹿蹄絵手箱、白糸威鎧）が含まれている。この他、登録有形文化財が 25 件、重要美術品が 3 件ある。

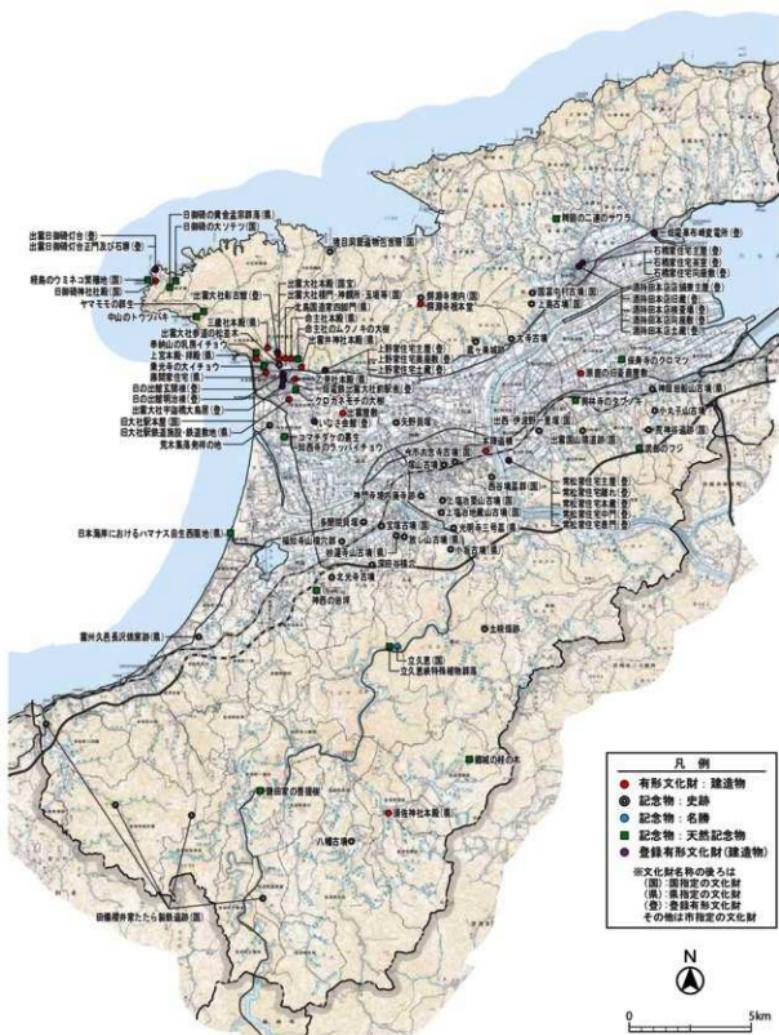
文化財の 6 分類のうち、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物の指定はあるが、文化的景観および伝統的建造物群は指定されておらず、また選定保存技術もない。

島根・鳥取両県で 200 を超える指定文化財を有する自治体は出雲市のほか、松江市と鳥取市だけである。このことから、出雲市は山陰において豊富な文化財を有する自治体といえる。

なお、県内 8 市の指定文化財数は、松江市 248 件、浜田市 98 件、益田市 140 件、大田市 126 件、安来市 100 件、江津市 64 件、雲南市 88 件となっている。

第 11 表 出雲市の指定文化財等の件数（令和 3 年〔2021〕3 月 4 日現在）

種別	国指定	(うち国宝)	県指定	市指定	計
有形文化財	建造物	4	(1)	5	4
	絵画	3		9	7
	彫刻	4		11	14
	工芸品	8	(2)	16	4
	書跡	2		3	4
	典籍	—		2	3
	古文書	8		5	10
	考古資料	4		1	16
	歴史資料	—		—	—
無形文化財	工芸技術	—		1	—
	芸能	—		—	—
民俗文化財	有形民俗文化財	—		2	8
	無形民俗文化財	1		7	26
記念物	史跡	13		6	14
	名勝	—		—	—
	天然記念物	2		2	17
	名勝および天然記念物	1		—	—
計(指定文化財)	50	(3)	70	127	247
その他	登録有形文化財(建造物)				25
	登録有形民俗文化財				0
	重要美術品				3
	重要文化的景観				0
	(重要) 伝統的建造物群保存地区				0
	選定保存技術				0



第40図 出雲市の指定・登録文化財の分布（土地と一緒にした文化財を表示）

2. これまでの保存・活用の経緯

出雲市がこれまでに実施してきた史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡およびその他史跡や重要文化財などの保存・活用に関する主な事項については、第12表のとおりである。

第12表 史跡・重要文化財などの保存・活用に関する主な事項

対象文化財	保存・活用の主な事項	時期・期間	備考
史跡猪目洞窟遺物包含層 (猪目洞窟遺跡)	史跡猪目洞窟遺物包含層出土品収蔵庫完成	昭和41年(1966)3月	旧大社町
重文木造四天王立像ほか (大寺薬師の仏像)	大寺薬師重要文化財収蔵庫完成	昭和50年(1975)3月	旧出雲市
史跡今市大念寺古墳	史跡今市大念寺古墳保存修理	昭和59年度(1984)～ 昭和62年度(1987)	旧出雲市
史跡荒神谷遺跡	荒神谷史跡公園・博物館オープン	平成7年(1995)5月	旧斐川町
史跡田儀櫻井家たたら製鉄 遺跡	宮本鍛冶山内遺跡 金屋子神社参道 および本殿・智光院本堂保存修理	平成18年度(2006)～ 平成19年度(2007)	
史跡田儀櫻井家たたら製鉄 遺跡	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存 管理計画策定	平成20年(2008)3月	
国宝出雲大社本殿ほか	国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物保 存修理	平成20年度(2008)～ 平成28年度(2016)	
史跡西谷墳墓群	西谷墳墓群史跡公園・出雲弥生の森 博物館オープン	平成22年(2010)4月	
重文旧大社駅本屋ほか	屋根瓦乱れ直し・プラットホーム等 修理	平成22年度(2010)	
重文日御碭神社社殿	重文日御碭神社社殿保存修理	平成24年度(2012)～ 平成27年度(2015)	
史跡田儀櫻井家たたら製鉄 遺跡	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備 活用基本構想策定	平成24年(2012)11月	
出雲大社	県指定境外社修理	平成26年度(2014)～ 平成27年度(2015)	
史跡田儀櫻井家たたら製鉄 遺跡	宮本鍛冶山内遺跡 田儀櫻井家墓地 等保存修理	平成26年度(2014)～ 令和元年度(2019)	
史跡鰐淵寺境内	建造物保存修理	平成28年度(2016)～ 令和2年度(2020)	
重文旧大社駅本屋	旧大社駅保存活用計画策定	平成28年6月(2016)	
史跡鰐淵寺境内	史跡鰐淵寺境内保存活用計画策定	平成30年(2018)3月	
史跡荒神谷遺跡	荒神谷遺跡整備改修基本計画策定	平成31年(2019)3月	
史跡田儀櫻井家たたら製鉄 遺跡	宮本鍛冶山内遺跡 金屋子神社拝殿 保存修理	令和元年度(2019)	
史跡荒神谷遺跡	荒神谷遺跡整備改修	令和元年度(2019)～ 令和3年度(2021)(予定)	
重文旧大社駅本屋	旧大社駅本屋保存修理	令和2年度(2020)～ 令和7年度(2025)(予定)	



第41図 宮本鋳冶山内遺跡 金屋子神社本殿の保存修理状況（左）と完了状況（右）



第42図 宮本鋳冶山内遺跡 智光院本堂の保存修理状況（左）と完了状況（右）



第43図 宮本鋳冶山内遺跡 田儀櫻井家墓地の保存修理状況（左）と完了状況（右）



第44図 宮本鋳冶山内遺跡 金屋子神社拝殿の保存修理状況（左）と完了状況（右）

第3章 田儀櫻井家のたら製鉄とその特質

第1節 田儀川流域周辺の歴史的環境と製鉄関連遺跡

第2章では出雲市全体の状況について整理してきたが、田儀櫻井家のたら製鉄は近世初期から多伎町周辺を中心に営まれており、田儀川流域とその支流の宮本川流域には田儀櫻井家の本拠地であった宮本鍛冶山内遺跡と基幹的なたら場であった越堂たら跡が存在する。

田儀櫻井家のたら製鉄の特質を理解するには、田儀川流域周辺の歴史的環境のほか、田儀櫻井家のたら製鉄開始以前や経営初期の状況が把握できる製鉄関連遺跡について整理し、田儀櫻井家が製鉄業を営んだこの地の歴史的な背景を明確にする必要がある。

1. 田儀川流域周辺の歴史的環境

【旧石器・縄文時代】

多伎町内の日本海沿岸付近の砂原遺跡（多伎町砂原）では、旧石器時代の石器の発見が報告されているが、田儀川流域周辺で旧石器時代の明確な遺跡は確認されていない。

縄文時代の多伎町周辺では、菅沢地区（多伎町小田）で尖頭器が採取されており、草創期や早期頃に人々の活動した痕跡が確認されている。宮本鍛冶山内遺跡に近接する屋形遺跡（多伎町奥田儀）でも黒曜石製の石器が見つかり、縄文時代から宮本川流域の山間部で人々が活動していたことを示す。その他、田儀川流域で宮本鍛冶山内遺跡と越堂たら跡の中間地点付近に位置する多伎藝神社（多伎町口田儀）の境内には、晚期から弥生時代前期頃の磨製石斧が信仰の対象として祠に祀られている。

【弥生・古墳時代】

弥生時代には矢谷遺跡（多伎町久村）で器面に糞の圧痕が付着した前期の土器が見つかっているが、その他の遺跡は田儀川流域周辺を含め多伎町内では現在のところほとんど確認されていない。

古墳時代前期の集落跡や古墳は多伎町内であり知られていない。中期には田儀川流域沿いの旧田儀小学校の敷地内にある丘陵に築かれた経塚山古墳（多伎町口田儀）が古くから知られ、勾玉や管玉、肅玉などの副葬品が見つかっている。後期になると経塚山古墳と近接する丘陵上に経塚山横穴墓群が築かれるほか、横穴式石室を持つ原の古墳（多伎町奥田儀）が田儀川中流域に築造されており、田儀川流域付近には古墳時代の人々が暮らした集落も同時に存在したと考えられる。その他、多伎町内には複数の古墳や横穴墓群が確認されている。

【奈良・平安時代】

奈良時代の律令国家の成立に伴い国・郡制が整備された。『出雲国風土記』によると、多伎町周辺は出雲國神門都多伎郷となり、石見国との国境付近に位置する。多伎郷には都を起点とする山陰道沿いに多伎駅（往来する役人などに馬や食料および宿所を提供する施設）が設けられたほか、国境には剣（往来する人々の管理や検査を行う施設）が置かれ、宅伎戍（警備や監視を行う軍事施設）は田儀川の河口付近に配置された。この頃から田儀川流域は国境付近として様々な施設が置かれるようになる。

【中世】

室町時代から戦国時代にかけては、尼子氏と大内氏・毛利氏との攻防が繰り広げられ、出雲国と石見国の国境に位置する多伎町周辺では多くの山城が築かれた。尼子氏の配下であったとされる尼子氏（おのじ）の居城の富士ヶ城跡（多伎町小田）、大内氏が築いて後に尼子に攻め落とされたといわれる要害山城跡（多伎町口田儀）、尼子氏が西方の防御を固めるために築城した鶴ヶ城跡（多伎町口田儀）が著名である。

鶴ヶ城は最終的に毛利氏に攻め落とされるが、それまでの毛利氏による2度の侵攻を防いでおり、重要な軍事拠点であった。なお鶴ヶ城は、越後守たら山西側の丘陵上に築かれている。

中世期には山間部で銅山開発が進み、佐田町周辺には多數の銅山跡や精練所跡などが知られている。銅山開発については、口田儀出身の鶴山師である三鷲清右衛門が著名であり、出雲市大社町の鷲浦にある鶴山を発見して開発したほか、博多の豪商である神谷幸蔵に乞われて大田市域西部にある石見銀山の再開発に協力したとされている。田儀川流域の原の古墳と隣接する場所には三嶋家墓地（多伎町奥田儀）があり、三嶋清右衛門の供養塔と伝わる石塔が残されている。

また田儀川河口付近にある本願寺（多伎町口田儀）には、室町時代の初め頃に朝鮮半島の高麗で制作された創造聖觀音菩薩座像が保管されている。

【近世】

近世になると幕藩体制が確立され、最盛期を迎えた石見銀山は幕府直轄地となり、その出入りを厳重に警備するために出雲国と石見国との国境付近の口田儀に番所が設置された。

幕末期には日本近海に外国船が出没するなど高まる軍事的緊張によって、松江藩は日本海沿岸に台場を設けており、口田儀には2箇所の台場が備えられた。

これまで田儀川流域周辺の歴史的環境を確認してきたが、田儀櫻井家がこの地でたら製鉄を行う前にも人々の営みが繩文時代から連綿と続いていることが分かる。また、奈良時代の律令国家の成立に伴い、田儀川流域周辺は出雲国と石見国の国境としての役割を担う施設が設置され、それ以降の時代も国境付近の重要な拠点としての特質を帯びるようになる。



第45図 田儀川流域周辺の主要遺跡と田儀櫻井家たら製鉄遺跡の分布

2. 宮本鍛冶山内遺跡周辺の製鉄関連遺跡（中世期～近世初期頃）

田儀櫻井家は近世初期に田儀川支流の宮本川流域における多伎町奥田儀の宮本でたら製鉄を開始するが、田儀櫻井家がこの地に進出する以前の中世期から近世初期頃にも製鉄が行われていたことを示す製鉄関連遺跡が確認されている。また田儀櫻井家のたら製鉄経営初期に相当する時期の製鉄関連遺跡も見つかっており、ここでは田儀櫻井家の本拠地であった宮本鍛冶山内遺跡周辺の主要な製鉄関連遺跡について内容を概観する。

【屋敷谷たたら跡】

屋敷谷たたら跡（多伎町奥田儀）は、宮本川上流の屋敷川流域にあり、田儀櫻井家が本拠地を構えた宮本鍛冶山内遺跡から2.5kmほど谷奥に入った場所に存在する。平成19年度（2007）に発掘調査が行われており、近世たたら以前の構造を持つ製鉄炉と精錬鍛冶炉が確認されている。田儀櫻井家が奥田儀にたら製鉄の拠点を設けた理由について詳細は不明であるが、当時の奥田儀の住民が製鉄事業の再興を求める嘆願を仁多郡奥出雲町でたら製鉄を営む可部屋櫻井家（第3章第2節）に行い、松江藩の許可を得て製鉄業を始めたとする説もある。そのため、近世以前にもこの地で製鉄が営まれていたことが、田儀櫻井家の本家である可部屋櫻井家が進出する契機となった可能性がある。

中世期の製鉄炉や精錬鍛冶炉は、山間部を中心に操業されることが多い。屋敷谷たたら跡も山間部にあるものの、そのなかでも比較的海岸部に近い位置に営まれており、田儀川や宮本川および屋敷川を経由して海岸部とつながっている。河川を通じて海岸部にある田儀浦周辺との関連があった可能性があるが、詳細な調査は中世の田儀浦の様相を含めて今後の課題である。

【若ヶ原奥たたら跡】

若ヶ原奥たたら跡（多伎町小田）は、日本海に注ぐ小田川が上流で分岐する聖谷川の流域にある。若ヶ原奥たたら跡から約500m上流には聖谷たたら跡があり、宮本鍛冶山内遺跡からは約4kmの位置に所在する。平成16年度（2004）に発掘調査が実施されており、製鉄炉などは見つかっていないが、河岸段丘上を中心には排溝場が広がっている状況が確認されていた。

排溝場内の炭溜まりから出土した陶磁器の年代から推定すると、中世末から近世前期頃に営まれたたら場が存在した可能性が考えられる。この時期は、田儀櫻井家が奥田儀で製鉄業を始める時期と重なっており、田儀櫻井家のたら製鉄経営初期の様相を検討するうえで重要な存在である。

【聖谷奥Ⅰ遺跡】

聖谷奥Ⅰ遺跡（多伎町奥田儀）は、聖谷たたら跡から聖谷川の上流へ約300m進んだ河岸段丘に存在しており、宮本鍛冶山内遺跡からは直線にして約3kmの位置にある。平成22年度（2010）から平成23年度（2011）にかけて発掘調査が行われた。調査のなかで2基の炭窯跡が確認されており、炭窯跡の炭化材の年代から近世中期前半頃から操業されていた可能性が指摘されている。

この年代は、聖谷たたら跡の推定操業時期（第3章第3節）と比較的近く、聖谷たたらやその周辺のたら場における製鉄の原材料となる木炭の供給元であったことも想定される。

このように田儀川流域周辺には、田儀櫻井家がたら製鉄を営む以前とみられる製鉄関連遺跡が確認されており、また田儀櫻井家経営初期のたら製鉄の様相を知るうえで重要な製鉄関連遺跡も存在する。田儀櫻井家がこの地でたら製鉄を営むことになった背景やその様相についても、重要な課題として認識し、今後調査研究を進めていく必要がある。



第46図 宮本鍛冶山内遺跡周辺の製鉄関連遺跡の分布と範囲



第47図 屋敷谷たたら跡全景



第48図 屋敷谷たたら跡の製鉄炉



第49図 茅ヶ原奥たたら跡全景



第50図 聖谷奥Ⅰ遺跡全景

第2節 田儀櫻井家の沿革

第1節では田儀櫻井家がたら製鉄の本拠地とした田儀川流域周辺の歴史的環境や、中世期から田儀櫻井家のたら製鉄経営初期における製鉄関連遺跡の様相について確認した。その内容を踏まえ、田儀櫻井家とその沿革を概観する。

1. 田儀櫻井家の成立と発展期

田儀櫻井家は、近世から近代に出雲市多伎町を中心にたら製鉄業で栄えた鉄師で、出雲市佐田町域のほか、隣接する雲南市域や大田市域にたら場や鍛冶屋を設け、広く製鉄経営を行った。

その系譜は、仁多郡奥出雲町（当時の仁多郡上阿井村）を中心にたら製鉄業を営んだ櫻井家の3代目当主で可部屋櫻井家⁽¹⁾の初代櫻井三郎左衛門直重が近世初期に出雲市多伎町奥田儀（当時の神門郡奥田儀村）で居宅を構えて鉄山（たら製鉄で用いる砂鉄や木炭の資源がある山）を開発したことに始まる。直重の嫡男である幸左衛門直春が寛文中期～延宝期（1665～1678年頃）に可部屋家から分家して田儀櫻井家の初代となり、奥田儀に移って本格的に製鉄業を開始し、12代目勝之助直明が明治23年（1890）に奥田儀を後にするまで約250年間にわたり、この地でたら製鉄業を行ってきた。

2代目弥右衛門正信や3代目三郎左衛門直且は、多伎町域や佐田町域、大田市域の山々を次々と購入しており、たら製鉄業の事業拡大を進めている。この時期は天秤ふいが発明・導入されてたら場の生産性が大きく向上したため、各地域の鉄師も同様に事業の拡大を図っていた。この頃には現在の多伎町奥田儀の宮本において山内が成立していたことが確認されている。

4代目宗兵衛清矩の時期には、享保10年（1725）に松江藩が実施した「鉄方御方式」において出雲国内に定められた9鉄師のうちの1つとなった。そして多伎町域および佐田町域の山々や立木を購入し、鉄山の規模をさらに拡大させていった。聖谷たら跡には、清矩が造立した地蔵が残されており、この頃に操業されたたら場であったと考えられている。また元文元年（1736）には宮本山内に金屋子神社を創建している。

5代目喜三郎順之も佐田町域の山々を購入して鉄山の拡大に努めた。その一方、海岸部の越堂たらを明和8年（1771）に田儀櫻井家が石見国横道村の弥平太から買い請けたと考えられているが、明和6年（1769）には田儀櫻井家の名義となっていた。また延享2年（1745）には既に越堂たらが操業されていた記録が残っており、早くから田儀櫻井家が経営に携わっていた可能性がある。

2. 田儀櫻井家の経営難と御主法入期

6代目幸左衛門義民の時期には、宮本山内を中心に多くの製鉄業の従事者を抱えていたことが記されている。この頃に幕府の田沼意次が鉄座を設置したため鉄価格が急激に下落したほか、購入している砂鉄や木炭の値段が高騰し、財政的に大きな打撃を受ける。

続く7代目伝十郎利之、8代目錦郎兵衛道明、そして9代目祖左衛門の時期にも経営が軌道に乗らず、享和3年（1803）に松江藩の管理の下で経営を行う「御主法入」となった。この頃に屋号を可部屋から宮本屋に改めている。また越堂たらや日ノ半たら（大田市山口町）が相次いで火災に見舞われたが、祖左衛門の時期には徐々に経営が上向きになっていたようである。

(1) 可部屋は製鉄業を開始した櫻井家の屋号であり、田儀櫻井家は9代目から屋号を可部屋から宮本屋に改めた。
なお、櫻井家の祖は大阪夏の陣で活躍した境田右衛門直之といわれている。

3. 田儀櫻井家の最盛期

10代目多四郎直敬は若くして家業を継ぎ、質素儉約に努めて製鉄業を安定させていった。藩主や役人に宿を提供する御用宿を勤める一方、新たな田畠の開墾など地域の活性化に貢献しており、松江藩から生涯郡役人格を与えられた。直敬は佐田町一窪田にあった智光院を田儀櫻井家の菩提寺として文政4年（1821）に宮本山内に移転勧請したほか、多伎藝神社など寺社への寄進を行った。

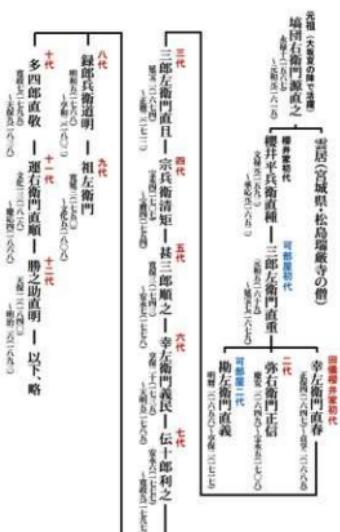
11代目運右衛門直順も直敬と同じく質素儉約や田畠の耕作を続けつつ、家業に注力し、製鉄業の発展に大きく貢献した。幕末から明治初年には越堂たたらや宮本鍛冶屋を中心に鉄生産が大きく伸長し、出雲国でも一二を争うほどの産鉄量を誇るまでに成長する。また、松江藩からは生涯郡役人格のほか、代々郡役人格、生涯名字御免や藩主への御目見えなど厚い待遇を受ける。幕末の長州戦争では食糧調達や陣宿の手配などを行い、褒章を受けている。直順は嘉永5年（1852）頃に宮本山内の智光院本堂横にある田儀櫻井家の歴代当主の墓地を大幅に改修して整備しており、また智光院や近隣の寺社などに寄進を積極的に行っている。

4. 田儀櫻井家の衰退と終焉期

12代目勝之助直明は、明治維新による政治体制の変革に伴って多額の寄付を行い、また各地での災害にも援助を行うことで褒章を受けている。その一方で、明治維新後の安価な西洋鉄の流通や洋式高炉の国内での生産によってたら製鉄は次第に斜陽化しつつあったため、生糸改良会社の設立や蚕種製造業、銀行設立など多角的な経営に乗り出すが、成功には至らなかった。こうした情勢のなか、明治15年（1882）に本拠地の宮本山内が大火に見舞われたことも重なり、明治23年（1890）に直明はたら製鉄業を断念して多伎町奥田儀を去り、田儀櫻井家のたら製鉄は終焉を迎えた。

第13表 田儀櫻井家の年表

年	西暦	おもな出来事
正保元	1644	櫻井家三郎左衛門直重（河原田直重）が櫻井田中藤原郡御所宿（現・島根県出雲市）から多都ト御村（現・島根県出雲市）へ移り住む。
江戸初期	不明	直重が岡山郡奥田村（現・多伎町岡山町）へ進出し、居宅を構え路山を開拓する。
寛文2年	1662	直重の嫡子辛左衛門直存（田儀櫻井家初代）が可部町から分家し、奥田宿に移りながら製鉄業を行う。
寛文7年	1667	元禄4年 1661 出雲地方で天保令が施行される。
元禄7	1664	奥田宿本村に町が形成されていることが確認できる。
元文元	1736	宮本に金屋子神社が造営される。
明和8	1771	石見岡山町の原平太より越堂たらを買取れる。
享和3	1803	藩の管理下（御上人法）となり、屋号が岡山御所から宮本屋となる。
文化4	1807	山1村（現・大田町山1町）黒谷で銅鉱脈を採掘する。
文化10	1813	家業を離れ、岡山宿をつとめるようになる。
文政4	1821	10代目直敬の娘、直光院を久保田村（現・出雲市）より奥田宿十郎左衛門と、田嶋鶴子の菩提寺とする。
文政11	1828	石見岡山町（現・大田町山1町）の窮屈舟平太から、堂ノ原たたら、鍋田鉱を出雲郡と交換して購入し、採掘を開始する。
天保15	1844	宮本の（現在の）金屋子神社本殿が造営される。
嘉永2	1849	上横浪村銀谷で銅鉱脈を採掘する。
慶応2	1866	11代目右衛門直順、長州戦に際して軍事奉公廻辞等をつとめ、藩より褒章を受ける。
明治15	1882	宮本宿向から出火し、本宅を始め山内70戸が全焼する。
明治23	1890	12代目勝之助直明一家、たら製鉄の経営を断念し、宮本を去る。



第51図 田儀櫻井家の系譜図

第3節 田儀櫻井家のたたら場・鍛冶屋跡

1. 史跡の概要とその特徴

田儀櫻井家が操業したたたら場・鍛冶屋跡は全体で 15箇所が確認されているが、そのなかで現在国史跡に指定されているのは、宮本鍛冶山内遺跡、朝日たたら跡、聖谷たたら跡、越堂たたら跡の4箇所である。宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡は平成 18 年（2006）1月 26 日に国史跡に指定され、聖谷たたら跡と越堂たたら跡は平成 21 年（2009）2月 12 日に追加指定がなされた。ここでは各史跡の概要とその特徴を整理し、田儀櫻井家のたたら製鉄が持つ歴史的な価値づけを明確にする。

【宮本鍛冶山内遺跡】

宮本鍛冶山内遺跡は山間部の狭い峡谷のなかにあり、たたら製鉄に従事する人々が暮らした場所である。約 250 年間にわたってたたら製鉄業を営んだ田儀櫻井家の本拠地として栄えた。この地にはたたら場は設けられていなかったが、遺跡内には大鍛冶場跡や小鍛冶場跡などの鍛冶屋に関する生産関連遺構や、田儀櫻井家の本宅跡および従事者の住居跡など生活に関連した遺構、そして智光院・金屋子神社・田儀櫻井家墓地・従事者墓地といった信仰に関連する遺構がまとめて存在しており、遺存状態も良好である。近世・近代のたたら製鉄を営んだ様子を一体的に把握できる全国でも稀有な遺構群として歴史的な評価が高い。また、文献史料では元禄 7 年（1694）には山内が成立していたことが確認されているが、それ以前に田儀櫻井家はこの地に進出しており、その時期から鍛冶屋などが操業されていた可能性がある。なお、平成 16 ~ 18 年度（2004 ~ 2006）にかけて大鍛冶場跡や田儀櫻井家本宅跡などの発掘調査が実施された。

【朝日たたら跡】

朝日たたら跡は山間部のたたら場跡で、発掘調査が実施されたのは昭和 57 年（1982）であり、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかでも古くから調査で詳細が明らかになっている。操業時期を確定できる明確な資料はないが、伝承や地図関係書類から田儀櫻井家がたたら製鉄業を営んだ後半期から終盤期に操業されたと想定されている。製鉄炉を覆う高殿と製鉄炉の下部に設けられた床釣りの詳細な構造が調査で具体的に明らかになった。また調査後に高殿を覆う上屋の展示棟が建設され、床釣りの様子を実際に見学できる数少ないたたら場跡として貴重である。

【聖谷たたら跡】

聖谷たたら跡は朝日たたら跡と同様に山間部で営まれたたたら場跡である。たたら場の周辺には享保 19 年（1734）に 4 代目宗兵衛清矩が造立した地蔵（市指定文化財）が存在していた。平成 18・19 年（2006・2007）に行われた発掘調査では、地蔵の造立年代と近い時期の陶磁器が出土しており、聖谷たたらは田儀櫻井家が経営した初期のたたら場である可能性が高いと考えられる。また、製鉄炉の床釣りの一部である本床や小舟なども発掘調査で確認されており、田儀櫻井家経営初期のたたら場の構造を知る重要な手掛かりとなった。

【越堂たたら跡】

越堂たたら跡は山間部のたたら場とは対照的に海岸部に営まれたたたら場跡である。たたら場のすぐ脇には田儀川が流れ、近くの田儀浦へと繋がる。山間部のたたら場では、製鉄の原材料である砂鉄や燃料の木炭となる木材を周辺の山林から入手するが、越堂たたらでは日本海の船舶により砂鉄や木炭の搬入を行っていた。文献史料によると、越堂たたらの操業期間は延享 2 年（1745）から明治 23 年（1882）までの約 150 年もの長期にわたったことが分かっている。なお、越堂たたらは明和 8 年

(1771)に石見国横道村の弥平太から田儀櫻井家が買い請けているが、田儀櫻井家の名義による操業は明和6年(1769)からとなっており、それ以前にも経営に携わっていた可能性が考えられる。田儀櫻井家は幕末から明治初年頃には出雲国で田部家に続く2番目の産鉄量を誇るまでに成長するが、それは多量の銛(鐵鉄)を生産し、田儀浦から廻船によって全国各地へ出荷・販売できた越堂たたらの存在が大きい。こうして田儀櫻井家の基幹的なたら場として長期間操業された越堂たたらは、海岸部のたら場の実態を示すとともに、田儀櫻井家の鉄生産の歴史を紐解くうえでも重要性が高い。なお、越堂たたら跡は平成18年度(2006)および平成25~29年度(2013~2017)に発掘調査が実施されており、製鉄炉の床釣りや高殿内部の様子が明らかにされたほか、高殿石垣と床釣りの造り替え痕跡が認められ、長期間の操業のなかで大規模な改修が繰り返し行われたことが分かっている。



第52図 宮本鋳冶山内遺跡 大鋳冶場跡



第53図 宮本鋳冶山内遺跡 本宅跡背面石垣



第54図 朝日たら跡の床釣り



第55図 聖谷たら跡の床釣り



第56図 越堂たら跡高殿全景



第57図 越堂たら跡の床釣り

2. その他の主なたたら場跡

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡では、これまでに触れてきた宮本鍛冶山内遺跡、朝日たたら跡、聖谷たたら跡、そして越堂たたら跡の4箇所の史跡のほかにも、多くのたたら場跡や鍛冶屋跡が海岸部や山間部に存在する。ここでは、それらのなかで特徴的なたたら場跡の様相について触れておきたい。

【梅ヶ谷尻たたら跡】

梅ヶ谷尻たたら跡（佐田町吉野）は、神戸川の支流である高津屋川上流に位置するたたら場跡である。平成3年（1991）の発掘調査で大小2基の製鉄炉の床釣りが確認された。これら2基の床釣りは隣接して並列しており、自然科学分析によって規模の小さい床釣りは17世紀後半から18世紀前半、規模の大きい床釣りは18世紀中頃の年代が測定された。前者は中世期の様相を残した床釣りの構造で、後者の近世高殿様式を備えた製鉄炉の床釣りへと移り変わる様子を如実に示している。また、自然科学分析で導かれた年代は、文献史料に登場する吉野たたらの操業時期とほぼ合致し、その所在地についても一致しているため、梅ヶ谷尻たたらは田儀櫻井家が初期に経営した吉野たたらである可能性が高いと考えられている。

なお、近接する梅ヶ谷鍛冶屋跡は、田儀櫻井家が万延元年（1860）から明治11年（1878）頃まで操業しており、田儀櫻井家経営の終盤期にあたる鍛冶屋である。礎石建物跡や石垣のほか、鍛冶場で使用された送風管や鍛冶津などが現地調査で見つかっている。

【加賀谷たたら跡】

加賀谷たたら（佐田町上橋波）は神戸川の支流伊佐川沿いに立地する。文献史料によると、文久2年（1862）から明治11年（1878）頃まで田儀櫻井家が操業しており、田儀櫻井家の終盤期における製鉄経営を支えた。現在は、山内におかれた事務所の元小屋跡とみられる建造物や金屋子神社などが残存しており、当時の山内の様子がよく分かる。また、金屋子神社に関連した祭礼道具などが残されている点でも貴重である。

【百済たたら跡】

百済たたら跡（大田市鳥井町）は越堂たたら跡と同じく海岸部のたたら場跡で、江戸時代には石見銀山領であった。文献史料では、寛政9年（1797）から文化8年（1811）まで田儀櫻井家が操業していたとされ、田儀櫻井家が松江藩以外の他領において経営に加わっていたたたら場として注目される。現在の石川県金沢市の文献史料には百済銘の品名が残されており、越堂たたらと同様に日本海の廻船を利用して製鉄の原材料の搬入や鉄製品などの出荷や販売を行ったと考えられる。



第58図 梅ヶ谷尻たたら跡の床釣り



第59図 加賀谷たたら跡 金屋子神社

第4節 たたら製鉄経営にみる田儀櫻井家の独自戦略

1. 田儀櫻井家独自の経営体制

田儀櫻井家のたたら製鉄経営は、10代目直敬と11代目直順の時期に最盛期を迎えるが、その背景には田儀櫻井家独自の経営戦略が関係しており、たたら製鉄業を軌道に乗せて出雲国でも屈指の鉄師へと導いた。ここでは、田儀櫻井家のたたら製鉄を特徴づける独自の経営戦略について整理する。

(1) 「山のたたら」と「海のたたら」の同時経営

近世の中国地方は全国屈指の鉄生産地帯であり、その中心地の一つが出雲国の山間部であった。現在の雲南市域を中心に製鉄業で栄えた田部家のほか、仁多郡奥出雲町域周辺では櫻井家や絲原家、ト藏家など多くの有力な鉄師が製鉄業を営んでいた。これらの鉄師は山間部にたたら場や鍛冶屋を設けて長期的な鉄生産を行っており、「山のたたら」を拠点とした製鉄業の経営体制を探っていた。山間部に拠点を構えることで、たたら製鉄に必要な砂鉄や木炭などの資源を供給する鉄山からの輸送経費を縮減できた。17～18世紀には資源が安定して供給できる場所に概ね20年程度で移転しながら操業していたが、18世紀後半にはたたら場の位置を固定して長期間操業するようになる。

田儀櫻井家は、山間部にたたら場や鍛冶場を設けて鉄生産を行う「山のたたら」を17世紀後半から継続的に操業する一方、18世紀中頃から海岸部の「海のたたら」の経営にも乗り出して製鉄業を行っていたことに最大の特徴がある。こうした「山のたたら」と「海のたたら」を長期にわたって同時に経営する手法は全国でも例がなく、田儀櫻井家のたたら製鉄が築き上げた独自の経営戦略といえる。山間部と海岸部のたたら場では、製鉄の原材料の調達方法が大きく異なり、山間部では周辺に資源がなくなると新たな場所にたたら場を移転させる必要があるが、海岸部では近くの港を利用して他地域から砂鉄や木炭を安定して入手でき、同じ場所で長期間の操業が可能になる。

このように、たたら製鉄に必要な砂鉄や木炭などの資源の入手経路が異なる「山のたたら」と「海のたたら」を同時に営むことで、一方が経営不振に陥っても、もう一方に鉄生産の主軸を移すといったリスク分散が可能になる点を見越していた可能性がある。また、山間部と海岸部でたたら製鉄を営むことでそれぞれの地域の経済発展にも大きく貢献している。

(2) 「近世の製鉄コンビナート」の確立

田儀櫻井家が経営した「山のたたら」では、田儀櫻井家の本拠地にはたたら場を設けずに鍛冶屋を設置し（宮本鍛冶屋）、周辺のたたら場で生産した鉄素材の多くを集約して割鉄に加工する方式であった。また、海岸部の「海のたたら」である越堂たたらは、割鉄の素材や薪物の原材料である鉄鉱のもととなる鉄鉱の生産に特化していた。こうして加工・生産された大量の割鉄や銑鉄は、越堂たたらに近接する田儀浦に集められて大阪や北陸、九州など全国各地へと出荷されていった。

田儀櫻井家は自家廻船を有して直接販売を行うこともあったが、田儀浦を構えた口田儀の集落周辺の廻船問屋（鳥居尾家や井原家など）が自前の廻船に田儀櫻井家の割鉄や銑鉄を積み込んで出荷していた。田儀櫻井家の製鉄経営を支えた廻船問屋の活躍は、文献史料や多伎藝神社に奉納された多数の船繪馬から読み取れる。このように田儀浦の廻船を利用して大量の割鉄や銑鉄を各地に輸送することで、山間部のたたら場からの荷馬や人力による陸路輸送と比べて大幅な経費の削減に成功しており、田儀櫻井家のたたら製鉄の流通拠点として田儀浦は重要な役割を果たしていた。当時、山間部に拠点を置いていた鉄師が松江の鉄問屋を仲介して他国へと販売していたのとは対照的に、田儀櫻井家の場合には自家廻船や廻船問屋の廻船を駆使することで多様な販路を独自に開拓しており、他の鉄師とは異なる販

売戦略を持っていたことが分かる。

このように、聖谷たたらや朝日たたらなどの山間部に設けた「山のたたら」で産出された鍛治素材を宮本鍛冶屋で割鉄に加工して集積するとともに、「海のたたら」として海岸部に立地する越堂たたら^{かどら}で海運により搬入した各地の資源をもとに大量の銘鉄を生産し、それらが運び込まれた田儀浦でつながる体系的な製鉄の流通体制は、さながら「近世の製鉄コンビナート」と呼べるもので、当時の最先端を行く経営手法であった。

田儀櫻井家は「山のたらら」と「海のたらら」を同時に経営し、両者を田儀浦の廻船による物流で結び付け、そして海運を利用して多様な販路を開拓する独自の経営体制を確立した。この経営体制は成功を収めて田儀櫻井家は躍進を遂げ、田儀櫻井家の最盛期にあたる幕末から明治初年頃には全国で屈指の産鉄量を誇っていた出雲国において一二を争うまでに成長した。



第60図 海のたら (越堂たら跡遠景)



第61図 山のたたら（宮本鍛冶山内遺跡遠景）



⁽²⁾ 田儀櫻井家が経営したたら場・鍛冶屋の操業期間（左）と産鉄の流れ（右）（左は角田 2011⁽²⁾に加筆）

(2) 角田徳幸 2011「たたら吹製鉄の地域的展開」『山陰におけるたたら製鉄の比較研究』島根県古代文化センター 107～160頁

2. 田儀櫻井家の販路拡大と越堂たたらの位置づけ

田儀櫻井家のたたら製鉄経営の独自戦略について整理してきたが、そのなかで中心的な役割を担つたのが田儀浦と越堂たたらであった。史跡整備のなかで「導入ゾーン」として設定したこれらの構成要素のなかで、今回の整備計画の中心となる越堂たたら跡の位置づけについて、田儀浦を拠点とした田儀櫻井家の産鉄の販路を含めて確認する。

(1) 田儀櫻井家の産鉄の販路

田儀櫻井家の産鉄は田儀浦の廻船で全国各地に運ばれた。文献史料によると、幕末から明治期の廻船問屋による廻船の寄港地は、出雲国や石見国などの地元のほか、能登国・越後国・越中国などの北国が多く、次いで長門国・周防国・伯耆国、備後国、根津国、肥前国などが挙げられている。

このうち北国への販売品は銅や割鉄が大きな比重を占めており、幕末期には加賀藩が財政基盤の確立のために能登国での製塩事業を奨励したため銘物師による塩釜生産が発展し、生産に使う良質な銑鉄の需要が増大したことと関連すると推測されている。

(2) 販路拡大にみる越堂たたらの位置づけ

このように大規模な銑鉄の需要に応えるには安定した供給が求められるが、越堂たたらでは田儀浦の海運によって伯耆国・砂鉄や隠岐国・木炭など他地域から製鉄に必要な資源を確保しており、資源が枯渇することなく良質な銑鉄の生産が可能であった。

田儀浦の廻船を利用した資源調達を背景に長期間操業された越堂たたらは、安定した銑鉄の持続的な供給が可能であり、さらに田儀浦の海運によって輸送経費を縮減できたため経済的にも優れていた。こうした利点が田儀櫻井家の多様な販路の開拓を後押ししたと考えられる。

当時の社会情勢を背景に、銑生産に特化していた越堂たたらは大量の銑鉄を産出し、近くの田儀浦の廻船を利用して北国を中心に各地へ供給するなど販路を拡大していくと考えられ、田儀櫻井家独自のたたら製鉄の経営体制を支えた基幹的なたたら場として重要な位置を占めていたといえる。



第63図 廻船による資源調達(砂鉄・木炭)と産鉄の主な販路

第4章 越堂たら跡の調査成果と簡易整備

第1節 越堂たら跡の調査成果

越堂たら跡はこれまで平成18年度（2006）および、平成25～29年度（2013～2017）の2度にわたる発掘調査が実施され、その実態解明が進んでいる。第3章では田儀櫻井家のたら製鉄やその特質、そのなかで越堂たらの位置づけを確認してきたが、ここでは、越堂たら跡の整備内容の検討に資するため、発掘調査で明らかになった内容を概観する。

1. 平成18年度（2006）の発掘調査

平成18年度（2006）の発掘調査は、田儀櫻井家のたら製鉄を特徴づけ、その経営形態を検討するうえで重要となる越堂たらの実態を確認するため、『田儀村誌』（昭和36年〔1961〕刊行）に掲載された幕末から明治初年頃の越堂たら山内の建物配置図を手掛かりに、配置図で記された高殿内部に調査区を設けて実施された。なお、調査区は民家の庭地であり、民家の基礎に利用されていた石垣が越堂たら操業当時の高殿の北面石垣と東面石垣であったと推測された。

調査区内では、製鉄炉下に設けられる床釣りの一部の本床が配置図に記された製鉄炉の位置で確認されたことで、田儀村誌掲載の配置図と概ね一致することが明らかになった。これにより、田儀村誌に掲載された越堂たら山内の配置図は、かなり正確に当時の山内の様子を描いている可能性が高いと考えられた。また調査では、床釣りの小舟や揚舟の一部、湯だまりなどが確認されているほか、鉄製の分銅や石製硯なども出土している。この調査成果によって平成21年（2009）に越堂たら跡は国史跡に追加指定されることになった。

2. 平成25～29年度（2013～2017）の発掘調査

平成25年度（2013）から平成29年度（2017）にかけては、高殿内とその周辺の遺構残存状況の確認を主な目的に発掘調査を行った。高殿の規模を正確に把握するため、高殿の南面石垣を検出し、既に確認されていた北面石垣および東面石垣とあわせて検討した結果、越堂たら跡は平面形が1辺約19.5mの方形で角打の高殿であり、西側4分の1は国道9号下に埋没していることが分かった。

高殿内では、本床や小舟などの製鉄炉下の床釣りが良好な状態で残存することが明らかになり、出雲国と石見国の床釣りの特徴を兼ね備えた構造であることが判明した。また高殿を支えた押立柱の礎石が確認され、ほぞ穴の大きさから直径約47cmの柱が据えられていたと推測される。

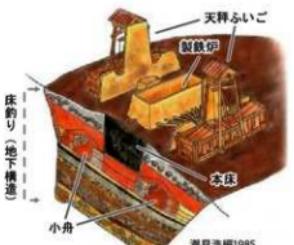
これらは越堂たらが稼働した約150年間の操業期間のなかで、田儀櫻井家経営の後半期にあたる高殿の遺構であり、その下面からは炭置場や砂鉄置場、礎石列など、田儀櫻井家が経営した前半期頃の遺構が確認されており、高殿が造り替えられたことが明らかになった。炭置場や砂鉄置場は田儀村誌掲載の建物配置図と同じ位置であり、内部の施設配置や構造は大きく変わらずに継承されていたと考えられる。

こうした高殿の造り替えは南面石垣からも確認でき、自然石を利用した古い石垣の上に整美な切石を用いて新しい石垣が構築されている。また、床釣り内部を詳しく検討すると、少なくとも3度改修された痕跡が確認されるなど、長期間操業した越堂たらの実態が具体的に明らかになった。

高殿の外側には、田儀櫻井家経営以前の時期と推測される暗渠が高殿全体を廻るように構築されており、さらに古い時期から越堂たらが操業されていた可能性を示している。



第64図 越堂たら跡の高殿内部の復元



第65図 越堂たら跡の床釣り模式図



第66図 越堂たら跡の主な発掘調査成果オルソ図 (平成25～29年度 [2013～2017])



第67図 越堂たら跡高殿周辺全景



第68図 高殿内部の遺構



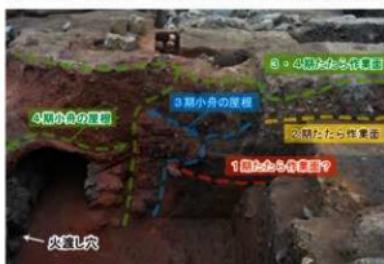
第69図 押立柱4の礎石と墨書き土器



第70図 高殿石垣(南面中央)の造り替え痕跡と暗渠



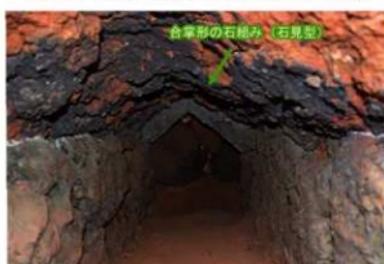
第71図 東小舟(南側)と火渡し穴・息抜き管



第72図 東小舟(北側)と床釣りの造り替え痕跡



第73図 東小舟(南側)内部焚口



第74図 東小舟(北側)内部焚口

第2節 越堂たら跡現地の簡易整備

越堂たら跡の遺構の残存を確認する発掘調査で大きな成果を得ることができ、調査終了後には真砂土や掘削土で全体を埋め戻した。この段階で、整備計画が本格的に具体化するのは数年先の見通しとなる状況であった。そのため、本格的な整備前に越堂たら跡の現地を簡易的に整備して見学者へ対応する必要があることを地元との協議を重ねるなかで確認した。

越堂たら跡の簡易整備は、平成28年度（2016）から史跡田儀櫻井家たら製鉄整備検討委員会や地元協議会のなかで内容の検討を進め、平成30年度（2018）に実施した。簡易整備は本格的な現地整備の基礎となるため、ここではその内容を整理する。

1. 遺跡説明看板と遺跡名称看板の設置

越堂たら跡を訪れた見学者の理解を促進させるため、これまでの越堂たら跡の発掘調査成果および田儀櫻井家たら製鉄遺跡全体の概要が分かる遺跡説明看板を設置することとした。

越堂たら跡の整備の目的は、越堂たら跡や田儀櫻井家のたら製鉄全体の歴史的な価値とその重要性を見学者に分かりやすく紹介するとともに、地域の歴史学習の題材として幅広い世代の市民に親しまれ、地元の史跡保護活動などの拠点となる史跡整備を目指すことである。そこで地域の歴史学習に役立てることができる整備を実現させるため、遺跡説明看板の内容については、史跡田儀櫻井家たら製鉄整備検討委員会や地元協議会のなかで検討を重ねるとともに、出雲市内の中学校の社会科教員を対象に社会科部総会の場でアンケート調査を実施して意見を得ることができ、その意見を反映させて読み取りやすい内容に仕上げた（第1章第3節）。

なお、越堂たら跡の現地は国道9号および歩道の地盤面から約2m低くなっている状況であるため、令和元年度（2019）に田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会が遺跡の名称看板（高さ約3.5m）を設置しており、国道9号側から見た越堂たら跡現地の視認性を向上させている。

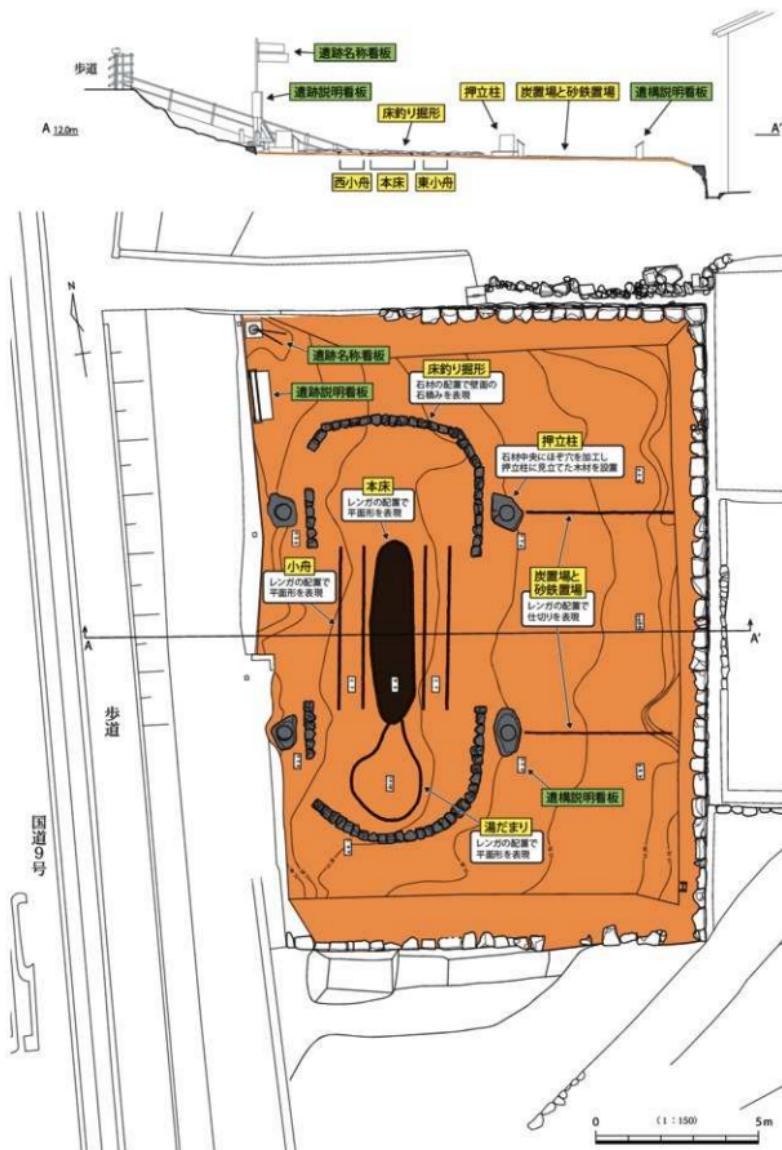
2. 遺構表示の整備

遺跡説明看板に示されている越堂たら跡の高殿内の様子が現地を実際に見学して確認できるように、発掘調査で見つかった遺構の平面形状を中心に現地に表示する簡易的な整備を行った。この簡易整備で表示した遺構は、床釣り（本床・小舟・床釣り掘形）と湯だまりの平面形状、炭置場と砂鉄置場の位置、そして押立柱とその礎石である。

本床、小舟、および湯だまりは、レンガを配置して遺構の平面形状を表示した。炭置場と砂鉄置場の位置について、場所の境界を示す仕切りをレンガの配置で同様に表現している。また床釣り掘形に関しては、発掘調査のなかで床釣り掘形の上面から壁面にかけて石積みを確認しており、それを石材の配置で表示した。

押立柱とその礎石は、立体的な構造物として復元し、表示することにした。押立柱の礎石が確認された位置を中心に礎石の類似石材を配置しており、石材の中央部には発掘調査で確認できた直径約47cm程度のほぞ穴を加工して表現した。ほぞ穴上には押立柱に見立てた木材（高さは約50cm程度）を設置して立体的に認識できるようにした。

これらの方で設置した遺構表示が、遺跡説明看板で記している名称と対応して確認できるようにするため、それぞれの遺構表示の近くに遺構名称看板を設置した。



第75図 越堂たら跡現地簡易整備平面図・見通し断面図



第76図 遺跡説明看板の内容



第77図 越堂たら跡の簡易整備状況



第78図 遺跡説明看板の設置状況



第79図 遺構名称看板の設置状況



第80図 遺跡名称看板の設置状況（保存会設置）

第5章 越堂たら跡整備の基本理念と基本方針

第1節 基本理念

出雲市では平成29年(2017)1月に文化財行政全体の基本構想として「出雲市歴史文化基本構想」を策定し、出雲市における文化財の保存・活用の基本理念および基本方針が設定されている。そのなかで田儀櫻井家たら製鉄遺跡は、関連文化財群のテーマ「たらや鉱山とともに生きた足跡」の構成要素として盛り込まれた。また、文化財の保存・活用に関する目標や中長期的に取り組む具体的な基本計画および実施計画として「出雲市文化財保存活用地域計画」を令和3年(2021)7月に策定予定としている。

出雲市歴史文化基本構想では、基本構想を最上位の計画として、その下に各文化財の個別具体的な保存活用(管理)計画が位置づけられており、平成20年(2008)3月に策定した「史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存管理計画」はその部分に該当する。保存管理計画のなかでは、史跡の保存管理および整備活用に関する基本理念としての考え方が整理されており、その内容を史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡全体の保存管理・整備活用を統括する基本理念として位置づける。

これら出雲市歴史文化基本構想および史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存管理計画の基本理念などを踏まえて、これまで確認した越堂たら跡の位置づけを反映させ、越堂たら跡の整備計画における基本理念を設定する。

1. 出雲市の文化財の保存・活用の基本理念と基本方針

出雲市歴史文化基本構想では、「神話と風土記の世界が今に息づく出雲」をもとに、その歴史文化を地域で守り、生かし、未来へ伝えることを基本理念として掲げている。基本理念に沿って具体的な取り込みとして実行するため、以下の基本方針を定めている。

- 市民一人ひとりが、歴史文化に地域ならではの価値を再発見し、大切にする
- 関連する文化財をつなぎ、出雲ならではの歴史文化的価値や魅力を高める
- 周辺環境を含めて、文化財を守り、生かし、文化の薫り高い地域をつくる
- 文化財を活かした多様な活動・交流のある地域をつくる
- 行政分野の連携および協働のまちづくりを進める

2. 史跡全体の保存管理・整備活用の基本理念

史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存管理計画のなかで定められた、史跡全体の保存活用・整備活用を統括する基本理念としての基本的な考え方は、以下のとおりである。

【製鉄関連遺跡群の総体的な保存と継承】

わが国の近世たら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として、宮本鍛冶山内遺跡とその周辺に広く分布する一連の遺跡群における遺構などの恒久的な保存を図り、後世に継承する。

田儀櫻井家たら製鉄遺跡として今後保存が必要な地域については、所有者等の同意と協力のもとに追加指定などの保存・保全策を講じる。

これらの保存や保全に必要な各種調査や研究を継続的および体系的に実施する。

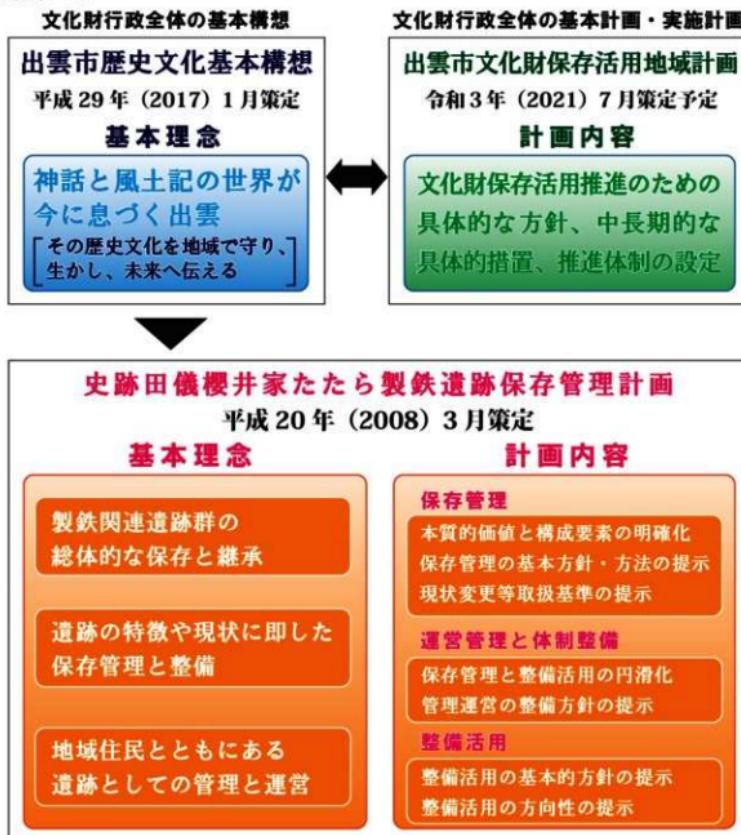
【遺跡の特徴や現状に即した保存管理と整備】

田儀櫻井家たたら製鐵遺跡の各遺構は、地上に表出したものや地下に埋蔵されたものがあり、その遺存状況も様々である。また、遺跡群の立地や土地利用も多種多様であることから、それぞれの遺跡の状況などに応じ、住民生活にも配慮した適切な保存管理を行う。

整備は遺構の保存を大前提として、保存のための整備を必要に応じて行うとともに、遺跡群の総合的な理解のために必要な活用のための整備を、整備効果や個々の遺跡の状況などから判断して段階的に実施する。

【地域住民とともにある遺跡としての管理と運営】

宮本鍛冶山内遺跡のこれまでの保存活動の経緯や、遺跡の大半が民有地であることなどから、地域住民と行政との協働による管理や運営を実施する。そのために必要な体制整備や住民参加システム等を検討する。



第 81 図 歴史文化基本構想および文化財保存活用地域計画と保存管理計画

3. 越堂たら跡整備の基本理念

出雲市歴史文化基本構想の基本理念とその方針の基層にあるのは、その地域ならではの文化財の価値を見出して、それを未来に継承することであり、それを実行するためには、地域住民と共にある遺跡の整備が必要であることが、史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存管理計画における基本理念から読み取れる。これらを前提として、地域経済の発展に大きな影響を与えた田儀櫻井家の役割や、田儀櫻井家のたら製鉄における越堂たら跡の位置づけを踏まえると、越堂たら跡の整備の基本理念は以下のように設定できる。

【地域の発展に貢献した田儀櫻井家とたら製鉄の重要性を学べる歴史学習の起点】

田儀櫻井家は、「山のたら」と「海のたら」を同時に操業する独自のたら製鉄経営を開拓して、山間部や海岸部のそれぞれの地域における経済発展に貢献したほか、田畠の開墾など地域の活性化にも大きな足跡を残してきた。

こうした田儀櫻井家のたら製鉄経営などを通して地域とのつながりを再確認するとともに、当時の地域経済を支えた近世たら製鉄の重要性を学ぶ場として地域や学校での歴史学習の起点となり、地域の歴史を未来へ継承していくような越堂たら跡の整備を目指す。

【近世の製鉄コンビナート体制を支えた海のたらが体感できる場としての魅力発信】

近世のたら製鉄に関する遺構が良好な状態で残されている遺跡は全国でも少なく、現在国指定史跡となっているたら製鉄遺跡は、田儀櫻井家たら製鉄遺跡を含め全国で3例にとどまる。

越堂たら跡の発掘調査で明らかになった、近世の製鉄コンビナート体制を支えた「海のたら」の実態を実際に見学して体感することができる唯一無二の場所として整備することで、出雲市内や島根県内ののみならず、全国に向けてその魅力を発信できる。

【史跡を保護し歴史文化を継承する地元住民の継続的な活動を支える拠点づくり】

史跡を含む田儀櫻井家たら製鉄遺跡は、これまで宮本史跡保存会や田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会を中心とする地元の人々の献身的かつ積極的な保護活動が行われてきたことによって歴史的な価値が継承されてきた側面が大きい。

また田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会は、出雲市内外からの見学者に遺跡のガイドや見学会を継続して行っており、史跡としての田儀櫻井家たら製鉄遺跡を活用して魅力を発信するために必要不可欠な存在となっている。こうした地元の継続的な取り組みを支援する拠点となるように越堂たら跡の整備を進めていく。



第82図 越堂たら跡の中学校ふるさと学習



第83図 越堂たら跡の見学会（保存会・市文化財課共催）

第2節 基本方針

越堂たら跡整備の基本理念をもとに設定する基本方針については、史跡のゾーニングを行った「史跡田儀櫻井家たら跡製鐵遺跡整備活用基本構想」(平成24年〔2012〕11月策定)のなかでその枠組みが整理された。その後に「導入ゾーン整備活用基本計画」(平成28年〔2016〕2月策定)および「導入ゾーン整備活用基本方針」(令和2年〔2020〕2月策定)において、越堂たら跡の整備の方向性が検討されている。

これらの内容を踏まえ、基本理念に沿って越堂たら跡整備の基本方針を以下の内容で設定する。

【たら跡操業当時の様子を再現する越堂たら跡の現地整備】

発掘調査による高殿の床釣りの露出展示は朝日たら跡で行っており、露出展示との役割分担を明確にするため、越堂たら跡では発掘調査で明らかになった遺構をもとにたら跡の様子を再現して操業当時の臨場感を演出することを目指す。

これにより、見学者が実際に海辺に近い場所でたら跡を操業していた様子を現地で感じ取ることができ、海のたら跡の利点や田儀浦とつながる製鉄コンビナートの拠点であった往時の姿に思いを馳せることができる。

【たら跡製鐵遺構の迫力を体感できるガイダンス施設の整備】

越堂たら跡の発掘調査では、製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを実施しており、実際の床釣りの遺構がそのままの形で間近に観察できる。これらを中心に田儀櫻井家の製鉄経営および越堂たら跡の特徴が把握できる資料を展示して詳しく見学できるガイダンス施設の設置を目指す。

越堂たら跡は史跡全体の導入ゾーンとしての役割を担っているため、ガイダンス施設のなかで他の史跡への誘導ができるような仕組みも同時に考えていく。また、ガイダンス施設は田儀櫻井家たら跡製鐵遺跡保存会を中心とした地元住民が史跡の保護や活用の活動拠点として利用でき、なおかつ地域の歴史学習に活かすことのできる展示内容や設備を検討する。

こうした基本理念および基本方針を掲げて、次章では越堂たら跡の現地整備およびガイダンス施設の整備についての具体的な整備計画の立案を実施する。



第84図 越堂たら跡整備の基本理念と基本方針

第6章 越堂たら跡整備基本計画

第1節 整備計画の概要

越堂たら跡の整備は、越堂たら跡の現地整備とガイダンス施設の整備の2つが大きな柱であり、この2つを中心的に整備計画を検討する。またそれに付随する看板の設置も計画する。

1. 越堂たら跡現地整備計画の概要

現在の越堂たら跡は西側4分の1が国道9号の下に埋設している。また現地の簡易整備の地盤面は国道9号および歩道の地盤面よりも約2m低くなっているが、遺跡名称看板が設置されて遺構表示の一部として押立柱を立体的な構造で表現しており、現地の視認性はある程度確保されている。

その一方で、現地の簡易整備は遺構の平面形状の表示を中心であり、現状ではたら場の操業の様子を把握することは困難となっている。そのため、現在の簡易整備に伴う遺構表示を活かしながらも、たら場の操業に関連する構造物を立体的な復元製作によって再現することで、見学者に対して操業当時のたら場の様子を具体的に想起させ、臨場感を訴求できることにつながると考えられる。

こうした状況を踏まえ、越堂たら跡の現地整備は、地盤整備を行ったうえで製鉄炉や天秤ふいごなどたら場の操業を具体的にイメージできるような立体的な復元製作を中心に行い、それを補足するための現地説明看板などを設置する計画とする。

2. ガイダンス施設の整備計画の概要

ガイダンス施設については、史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡整備活用基本構想（平成24年〔2012〕11月策定）の内容および史跡の現状と課題（第1章第2節）を踏まえ、史跡のなかで地理的に最もアクセスが容易で利便性が高く、また広域に展開する史跡全体の導入部として重要な役割を担う越堂たら跡周辺に設置する方向性が確認されている。

越堂たら跡の発掘調査では製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを実施しており、実際の床釣りの遺構をそのままの形で間近に観察できるため、たら製鉄遺構の迫力が体感できる。こうした床釣りの土層立体剥ぎ取りによる遺構の展示は、全国的にもほとんど実施されていない。床釣りの土層立体剥ぎ取りをガイダンス施設での展示の中心に据え、越堂たら跡における発掘調査の成果を中心に紹介することで、越堂たら跡の特徴が具体的に把握できるようにする。

また、史跡を含めた田儀櫻井家たら製鉄遺跡の導入ゾーンとして、ガイダンス施設では宮本耕治山内遺跡や朝日たら跡などへの誘導ができる展示のほか、越堂たら跡および田儀櫻井家たら製鉄遺跡全体の理解を深めるために、他の史跡の概要紹介もあわせて行う展示内容を検討する。

さらに、越堂たら跡では、地元住民を中心に組織された田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会が遺跡の草刈りや現地でのガイドを行っているほか、地域の歴史学習の場としても利用されている。こうした地元住民による史跡保護の活動拠点や地域の歴史学習が促進される施設整備を計画する。

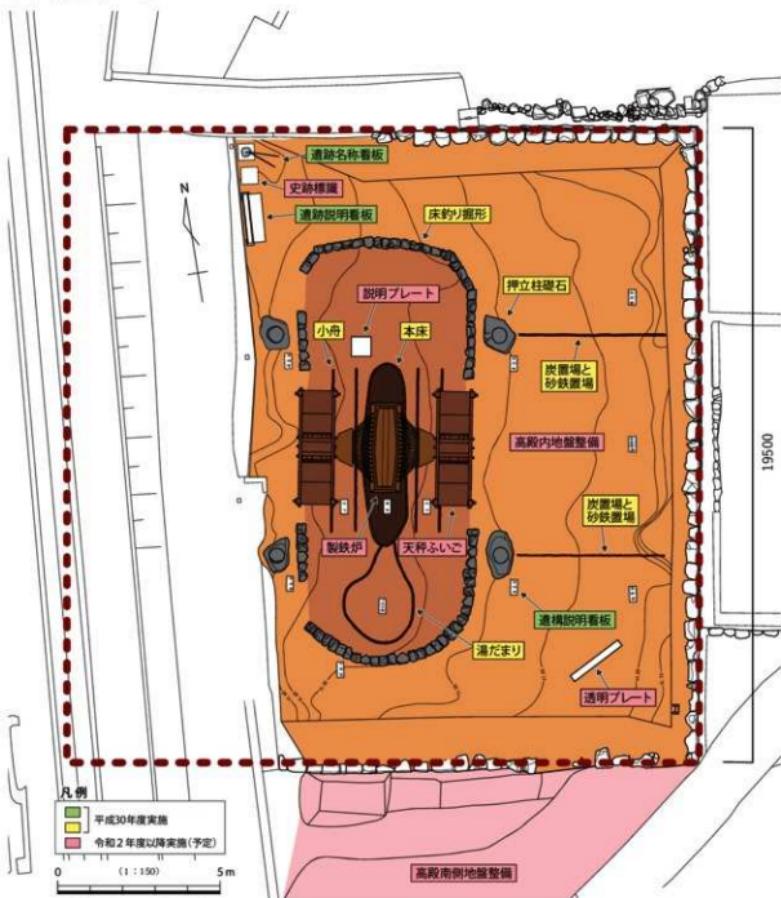
3. 看板の整備計画の概要

越堂たら跡の看板整備は、現地説明看板のほかに越堂たら跡周辺の看板とガイダンス施設の屋外に設置する看板を計画する。看板の色調や素材についても、田儀櫻井家たら製鉄遺跡の既存看板の色調に合わせて統一感を持たせた仕様を検討する。

第2節 越堂たら跡現地の整備計画

越堂たら跡では、発掘調査で確認した遺構の平面形状を中心とした表示などの簡易整備を行っているが、これらを基礎としてたら場の様子を再現するために、現在平面形状で遺構表示を行っている本床と小舟の上部に、製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を行う。また、見学環境を整えるための地盤整備も同時に実施する計画とする。

なお、越堂たら跡の現地整備にあたっては、国指定史跡であり、また世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つでもある大板山たら跡（山口県萩市）の現地整備の状況も参考にして進めていく。



第85図 越堂たら跡現地整備計画平面図

1. 地盤整備

越堂たら跡の現地は簡易整備がなされており、高殿内の地盤表面は基本的に真砂土を敷き詰めている。真砂土は雨水などにより地表面の土砂が徐々に流れ出しているほか、特に夏季などは草木の繁茂が著しく遺構表示の見学の妨げになっている。地表土の流出や草木の繁茂を防ぐため、高殿内の地表面に透水性のある園路舗装などを施工して見学環境を整える必要がある。

また発掘調査で確認した越堂たら跡の高殿南面石垣は、調査後の埋め戻しで現在一部が確認できなくなってしまっており、高殿南側には造成土などが石垣面より高い位置まで堆積していた。これらの造成土などを取り除くことで、見学者が南面石垣を確認して越堂たら跡の高殿範囲を明確に把握できるため、地盤整備の一環として造成土や埋め戻し土の掘削工事を令和2年度（2020）に実施した。

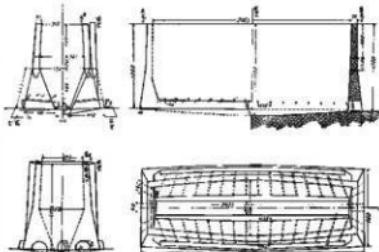
2. 製鉄炉の復元

越堂たらの製鉄炉は残存していないため、当時の正確な寸法は不明であるが、製鉄炉の下に設けられた床釣りの一部の本床は寸法が判明しており、そこから規模の推定は可能である。

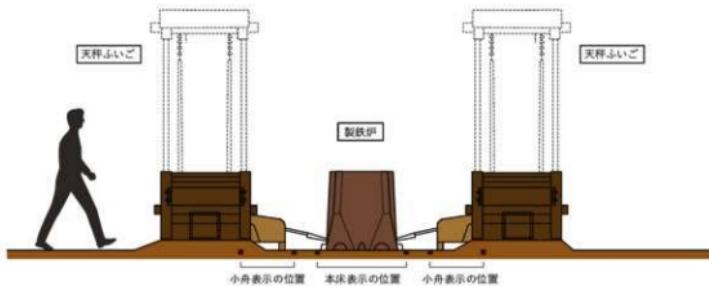
越堂たらの製鉄炉の復元には、日本の鉄鋼研究の礎を築いた依国一博士による石見地方の価谷たら（江津市）の調査記録⁽¹⁾に記された製鉄炉の図面や、越堂たらの高殿規模と同程度の規模を持つ菅谷たら（雲南省）の高殿内部が参考になる。価谷たらは、越堂たらと同じく海岸部で操業された海のたら場である。菅谷たらは全国で唯一高殿が現存し、内部には製鉄炉と水車ふいご



第86図 菅谷たら高殿内部



第87図 価谷たらの製鉄炉（倅 1933 から転載）



第88図 越堂たら跡の製鉄炉・天秤ふいご復元製作イメージ図

(1) 依国一 1993『古来の砂鉄精錬法 たら吹製鉄法』丸善

が存在する。なお、菅谷たたらの高殿内部の状況を正確に把握するために3次元測量を実施した。

製鉄炉の復元製作の素材は、実物の土質感に近い状態を再現できる素材を選定するほか、設置場所である屋外環境のなかで一定の耐久性を持つ素材や加工なども検討する。

3. 天秤ふいごの復元

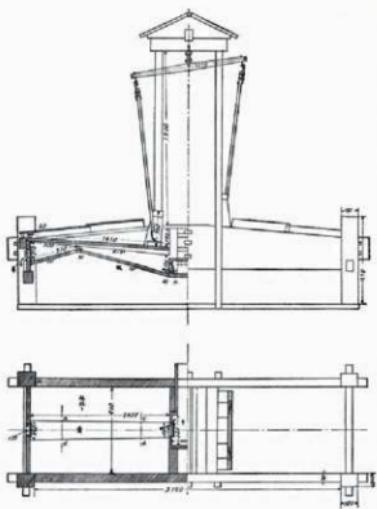
現在の菅谷たたらの高殿内にある水車ふいごは、明治後半期に天秤ふいごから代替したものであるため、和鋼博物館（安来市）や奥出雲たたらと刀剣館（奥出雲町）で再現されている天秤ふいごの実物を参照しながら、俵国一博士が記録した価谷たたらの天秤ふいごの図面をもとに復元製作を進める。

天秤ふいごは木製であり、復元製作にあたっても木製の部材を中心に素材を選定し、防腐処理を行うなど屋外環境において耐久性を向上させる処置も考慮する。

また屋外環境では、天秤ふいごの全体的な復元製作を行った場合に、上部構造が風の影響を受けて破損することが懸念され、安全性を優先して土台部分を中心に復元製作を行うことが望ましいと考えられる。土台部分も耐久性を優先した構造で設計し、また製鉄炉への送風管部分の復元製作なども屋外環境における素材の耐久性を考慮しながら検討する。

4. 再現イラスト透明プレートと説明プレートの設置

製鉄炉や天秤ふいごの復元で製作できなかった部分は、イラストでその部分を表現した透明プレートを設置する。透明プレート越しに見ると、実際に復元製作された部分とイラスト部分が重なり、操業当時の製鉄炉や天秤ふいごの姿が全体的に再現された状況を確認できる。加えて操業当時の作業風景なども盛り込むことで、さらに臨場感のある越堂たたらの姿を体验できる。また操業当時の状況などは、復元された製鉄炉や天秤ふいごの近くに設置する説明プレートなどで確認できるようにする。



第89図 価谷たたらの天秤ふいご（俵1933から転載）



第90図 大板山たら跡の透明プレート

5. 現地説明看板の設置

(1) 史跡標識・説明板

越堂たら跡は、平成21年（2009）2月に国史跡として追加指定を受けており、国史跡であることを示す標識や説明板の設置が必要になってくる（文化財保護法第115条第1項）。名称や登録年月日、理由等の基本情報を明記する必要があり、既設の史跡標識や説明板などを参照して形状や材質などについて具体的に検討していく。

(2) 遺跡説明看板

遺跡説明看板は、越堂たら跡現地の簡易整備のなかで本格的な整備を見据えて設置している。看板の表示は表面シール印刷により仕上げているため、表面の劣化や内容の更新などがあった場合には表面シールを張り替えることで対応が可能となっている。そのため、看板の上下2面のうち、1面の内容を変更して史跡の説明板として更新することもできる。

(3) 遺構説明看板

現在、越堂たら跡現地の遺構の平面形状を中心とする整備について、遺跡説明看板で触れている名称と対応して確認できるように、遺構表示の近くに遺構名称看板を設置しているが、本格的な整備では遺構の詳しい内容を説明する必要がある。現状の遺構名称看板は表示プレートを差し替えることができるため、詳しい説明や写真を付加したプレートに更新することができるほか、QRコードの設定によりウェブ上に詳しい説明と写真を表示する方法などがあり、様々な方向性を考慮して総合的に検討していく必要がある。



第91図 大板山たら製鉄遺跡の史跡標識



第92図 遺跡説明看板



第93図 遺構説明看板のプレート差し替え仕様



第94図 出雲弥生の森博物館でのQRコード付き看板



第95図 越堂たら跡現地整備完成イメージ図

第3節 ガイダンス施設の整備計画

1. ガイダンス施設の位置づけ

ガイダンス施設では、田儀櫻井家の基幹たらとしての役割を担った越堂たら跡の調査成果について、現地では実施できない製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを用いた展示や、史跡の導入ゾーンとして他の史跡への誘導や概要の紹介ができる展示を目指す。

また多伎町口田儀には文化施設として多伎文化伝習館がある。多伎文化伝習館は、田儀櫻井家たら製鉄遺跡保存会の事務局も兼ねており、保存会の総会や研修会、および地域学習や関連講座などが開催されている。史跡に造詣の深い方が集まりやすい場所であり、田儀櫻井家に関する資料や民俗資料などが収蔵・展示されている。ガイダンス施設での展示に加え、史跡の研修会や関連講座の開催などソフト面の充実を多伎文化伝習館で補完できるため、多伎文化伝習館との機能分化や役割分担を明確にして連携できる活用策を検討することで、史跡のガイダンス施設としての価値がさらに高まると考えられる。

2. ガイダンス施設地盤整備の計画

ガイダンス施設整備予定地の面積は約1,300m²である。この土地は隣接するコンクリート舗装道路よりも地盤が低かったため、簡易的な埋め立てを実施し、現在では全体の3分の2ほどの面積が舗装道路と同じ高さに揃えられている。この状況を可能な限り活かしつつ、周辺にある住宅や民有地との兼ね合いのなかで、水捌けや導水の問題を考慮しながら、地盤改良・コンクリート舗装など造成を伴う地盤整備の詳細な工法を決定する必要がある。

またガイダンス施設整備予定地の南東側の水路付近には、越堂たら跡の史跡指定範囲との間に石垣が残されており、越堂たら山内の境界となっていた可能性がある。地盤整備でこの石垣が埋没しないように配慮し、見学者が可能な状態を維持する。

3. ガイダンス施設内容の計画

(1) ガイダンス施設の設備

【内部の設備】

ガイダンス施設は、近接する多伎文化伝習館と連携しながら、越堂たら跡における床釣りの遺構の迫力を十分に体感できる設備を持つ方向性が望ましい。

ガイダンス施設内では、床釣りの土層立体剥ぎ取りを中心とする展示スペースのほか、休憩スペースを設けて見学者がじっくりと見学できるようにする。また、トイレや簡易的な倉庫などの便益設備の設置についても検討する。

【外部の設備】

ガイダンス施設の屋外では、見学者のために駐車スペースを設ける必要があり、一般の乗用車が数台駐車できるほかに団体見学用の大型バスが2台程度駐車できる空間配置が必要になる。

また多伎文化伝習館では、屋外での広場などの設備は整備されていない。たら製鉄に関する体験学習は、製鉄作業の見学や体験など屋外での歴史学習が中心となるため、ガイダンス施設において、体験学習などが実施できる広場を屋外に設けることができれば、屋内での展示内容に加えて歴史学習の幅がさらに広がる。

(2) ガイダンス施設の外観

【施設の色合い】

越堂たら跡周辺は集落のなかにあり、ガイダンス施設整備予定地の周辺も新旧の住宅が建ち並ぶ。ガイダンス施設は周辺の集落景観を考慮した佇まいが求められる。周辺の住宅は木造で屋根に赤瓦や黒瓦が使用されていることが多い。ガイダンス施設の外観を周辺住宅に馴染む色合いにすることで、現在の集落景観を大きく崩さないようにする。

【施設の形状】

ガイダンス施設の形状を検討するうえでは、出雲市周辺の関連施設の状況が参考になる。菅谷たら高殿は、近世の佇まいを今に伝える柿葺の建物で、伝統的で莊厳な雰囲気を醸し出し、重要有形民俗文化財としての価値が高い。こうした雰囲気は、越堂たら跡周辺の集落景観のなかに馴染みやすいが、その一方で、伝統的な建物構造をそのままガイダンス施設の形状に適用すると、集落内に溶け込みすぎて存在感が薄れてしまい、見学者に対してガイダンス施設としての訴求性が低くなることが懸念される。

その点に関して、建物構造に曲面と方形を取り込んだ現代的な形状の金屋子神話民俗館（安来市）は、山間部の山村のなかでガイダンス施設としての存在感を十分に持つ。和銅博物館や奥出雲たらと刀剣館などの製鉄関連施設についても、現代的な構造を取り入れた形状などが採用されている。

また、大板山たら製鉄遺跡の大板山たら館では、周辺の山間部の景観に馴染みながらも、建材の特性を活かした存在感のある外壁を持つ建物となっている。



第96図 菅谷たら高殿外観



第97図 金屋子神話民俗館外観



第98図 和銅博物館外観（写真提供：安来市和銅博物館）

第99図 奥出雲たらと刀剣館外観
(写真提供：奥出雲町役場商工観光課)

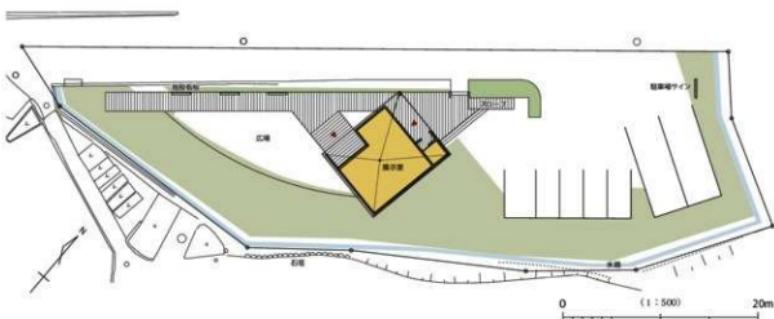
よって、越堂たら跡のガイダンス施設の形状は、周辺の集落景観に配慮した伝統的な建物構造を意識しつつも、現代的な要素を持つ形状や建物の建材の特性を取り入れてガイダンス施設としての訴求性を向上させる必要がある。現在検討している外観イメージ図を素地として、実施設計などのなかで今後さらに具体的に議論を行いながら、施設の外観を仕上げていく予定とする。



第100図 大板山たら館外観



第101図 ガイダンス施設整備予定地（簡易埋立前）



第102図 ガイダンス施設配置イメージ図



北立面(入り口)

西立面(道路側)

第103図 ガイダンス施設外観イメージ図



第104図 ガイダンス施設整備完成イメージ図

(3) ガイダンス施設の展示

ガイダンス施設の展示内容は、現在の計画段階で「越堂たたら跡展示ブース」、「田儀櫻井家関連資料展示ブース」、「その他の史跡等展示ブース」の3つに大きく分けられる。

これらに加えて展示スペース中央の床面には、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の総合案内ができるマップの床面表示を検討する。なお出雲弥生の森博物館では、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡を扱った展示を過去に行っており、その状況を参照して展示内容の充実を図る。

【越堂たたら跡展示ブース】

越堂たたら跡展示ブースは、越堂たたら跡の発掘調査成果をもとに、たたら製鉄遺構の迫力を伝える展示全体のメインとなる展示空間である。

越堂たたら跡における製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを展示の中心に据えた遺構展示を行い、その床釣りの解説や発掘調査の成果および田儀櫻井家のたたら製鉄経営のなかで越堂たたらが果たした役割などの情報を展示パネルで紹介する。また展示パネルだけではなく、発掘調査のなかで作成した動画や3次元モデルを上映できる液晶モニターを設置して映像展示を実施することを検討する。

【田儀櫻井家関連資料展示ブース】

田儀櫻井家関連資料展示ブースは、越堂たたらなどにおける製鉄関連の道具や廻船業関連の資料など田儀櫻井家ゆかりの品々の資料展示を行い、たたら場の操業の様子や田儀櫻井家の製鉄経営とつながりの深い田儀浦とその廻船業などへの理解を深める展示空間である。

こうした田儀櫻井家ゆかりの品々は、現在でも田儀地区を中心とした地元の方々や地元施設が所蔵している場合がある。出雲市が保管・管理する田儀櫻井家関連資料のほか、地元に伝わる品々なども地元の協力を得ながら展示品の候補として検討し、資料の維持管理の問題も含めて地元と共同で展示内容を立案することが望ましい。

【その他の史跡等展示ブース】

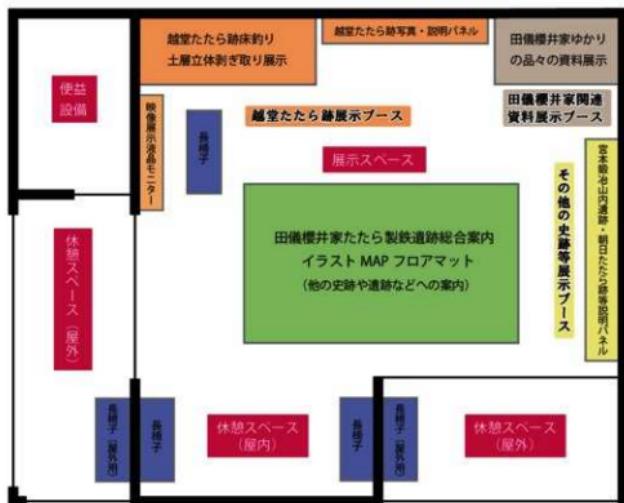
田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、越堂たたら跡を含めて4箇所が国史跡に指定されており、他の3箇所（宮本鐵治山内遺跡、朝日たたら跡、聖谷たたら跡）の史跡を中心に紹介することで、田儀櫻井家のたたら製鉄経営の特質について理解を深める展示空間とする。

越堂たたらは「海のたたら」であるが、残りの3箇所は「山のたたら」である。両者を同時に操業したことが田儀櫻井家のたたら製鉄経営における最大の特質であり、なおかつ近世の製鉄コンビナートと呼べる独自の経営体制を生み出すことに成功した要因でもあるため、こうした点を分かりやすく整理して紹介する。



第105図 出雲弥生の森博物館における田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の展示状況

（左：平成28年度〔2016〕速報展 右：令和元年度〔2019〕ギャラリー展）



第106図 ガイダンス施設展示内容イメージ図



第107図 越堂たら跡の床釣り（左）と土層立体剥ぎ取り（右）



第108図 大板山たら館の映像展示の液晶モニター



第109図 越堂たら跡の3次元モデル映像

第4節 周辺看板および施設看板の整備計画

1. 看板の設置計画

越堂たら跡の現地整備とガイダンス施設整備の計画を進めるほかに、屋外における看板の設置を検討する必要がある。屋外看板として、越堂たら跡周辺に設置する「周辺看板」、ガイダンス施設整備予定地において施設屋外の設備に付随する「施設看板」を設置する計画とする。

(1) 周辺看板の設置

【視認用史跡名称看板】

越堂たら跡は国道9号に隣接しており、多くの見学者は国道9号を利用してこの場所を訪れる。そのため、国道9号沿いを走る車内から明確に史跡の名称（史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡／越堂たら跡）が確認できる視認用の史跡名称看板を設置する必要がある。

【関連文化財説明看板】

越堂たら跡現地周辺には、金屋子神社が存在した南側の小丘陵、田儀川沿いの岩盤に掘り込まれた水路跡、山内東側の亀山山麓にある地蔵（田儀櫻井家の6代目当主が願主）などが確認できる。これらは越堂たら跡の関連文化財であり、関連文化財の説明看板を設置して紹介できるように検討する。

【現地誘導看板】

ガイダンス施設整備予定地から越堂たら跡現地は比較的近接するが、その周辺に存在する関連文化財の位置は案内が無い状況ではやや分かりにくいため、現地の誘導看板の設置が求められる。

(2) 施設看板の設置

ガイダンス施設整備予定地において、屋外の施設看板は、ガイダンス施設を訪れた見学者が越堂たら跡現地に向かう途中で目にする場所に設置する。これらの看板は、動線のなかで見学しながら体感できる空間的な情報（史跡範囲図、山内配置図、関連文化財位置図など）を記載した看板内容にする。

2. 看板素材の検討

田儀櫻井家たら製鉄遺跡の史跡関連看板は、同系統の色調を用いることで史跡全体の統一感を演出できる。宮本鍛冶山内遺跡や越堂たら跡の既存看板の色調である「茶褐色」を基本として、今回の越堂たら跡の新設看板も茶褐色系に統一する方向性で検討する。

看板は、スチールなどの素材を茶褐色に塗装する方法のほか、素材自体が茶褐色の耐候性鋼（コールテン鋼）などを採用する方法がある。耐候性鋼は安定鋼を形成するように設計された低鉄合金鋼であり、鋼の色が茶褐色で全体的な色調が損なわれない。よって田儀櫻井家たら製鉄遺跡の新設看板は、茶褐色の塗装や耐候性鋼などの素材の特性を活かした茶褐色を用いて製作することが望ましい。

3. 見学者の動線計画

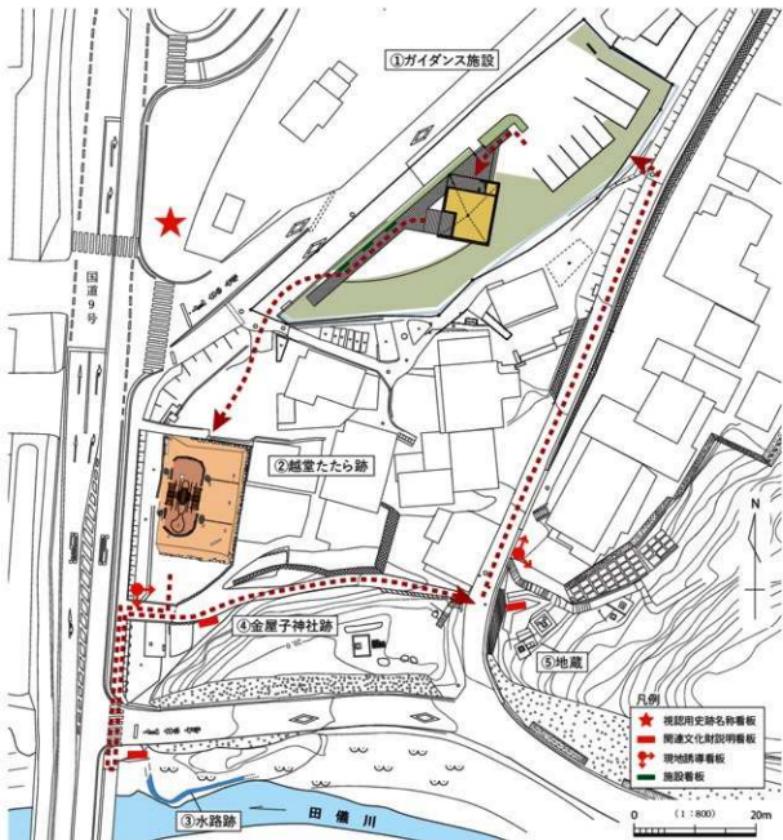
越堂たら跡における見学者の動線は、ガイダンス施設整備予定地から越堂たら跡現地へ向かう流れを想定している。金屋子神社跡や田儀川沿いの水路、亀山山麓の地蔵などの関連文化財についても見学する場合は、各地点にスムーズに到着できるように現地誘導看板で案内する。関連文化財見学後は越堂たら跡の史跡指定範囲の東側外縁を通ってガイダンス施設整備予定地の駐車スペースに戻る動線案を基本とするが、その道路には歩道がないため、それまでの見学ルートを折り返して元の場所に戻るなどの案内表示も検討する必要がある。



第110図 JR田儀駅前の看板（耐候性鋼）



第111図 島根県立古代出雲歴史博物館の囲障（耐候性鋼）



第112図 ガイダンス施設・越堂たらたら跡現地および関連文化財の見学動線計画

第7章 今後の事業計画と維持管理

第1節 越堂たら跡整備の年次計画

越堂たら跡整備の年次計画については、令和2年度（2020）の時点において、概ね令和5年度（2023）を目途に整備の完成を目指している。

令和2年度（2020）には越堂たら跡整備基本計画の策定および計画書の刊行のほか、越堂たら跡の高殿南側の地盤整備工事を実施した。また、令和2年度（2020）から令和3年度（2021）にかけて、越堂たら跡の現地整備における製鉄炉や天秤ふいごの復元製作に必要な計画図面の検討を進める。

令和3年度（2021）から令和4年度（2022）には、越堂たら跡の高殿内における園路舗装などの現地地盤整備や製鉄炉および天秤ふいごの復元製作などの現地整備を実施する計画とする。史跡標識および説明プレートや透明プレートの設置、越堂たら跡の周辺看板の設置なども進めていく。またガイダンス施設における展示内容案についても引き続き具体的に検討する。

令和4年度（2022）にはガイダンス施設整備の実施設計を行い、令和5年度（2023）にガイダンス施設整備予定地内の地盤整備や施設施工、および展示施工や設備施工などを行う予定としている。

第14表 越堂たら跡の整備年次計画（令和2年度（2020）時点）

	越堂たら跡現地整備		ガイダンス施設整備	
	計画・設計	設置・施工	計画・設計	設置・施工
令和2年度 (2020)	整備基本計画策定 現地整備計画図面検討	高殿南側地盤整備	整備基本計画策定	
令和3年度 (2021)	現地整備計画図面検討	史跡標識設置 説明プレート設置 現地地盤整備	展示内容案検討	
令和4年度 (2022)		周辺看板等設置 製鉄炉・天秤ふいご・ 透明プレート設置	整備実施設計 展示内容案検討	
令和5年度 (2023)				施設看板設置 地盤整備・施設施工 展示施工・設備施工



第113図 越堂たら跡現地（高殿南側地盤整備後）



第114図 ガイダンス施設整備予定地（簡易埋立後）

第2節 維持管理と運営体制の検討

1. 越堂たら跡整備に伴う維持管理

越堂たら跡現地整備およびガイダンス施設の整備後には、それらをどのように適切に維持管理するのかという課題が生じる。特にガイダンス施設の維持管理については、現在の地元の状況や市内における他の文化施設の状況を踏まえて様々な方向性を想定する必要がある。

2. 同規模文化施設の現況

地元の方々や田儀櫻井家たら跡製鉄遺跡保存会と市文化財課が越堂たら跡の将来的な維持管理について検討を重ねるなかで、現在想定している越堂たら跡のガイダンス施設と同規模程度の文化施設の状況に関する議論があった。具体的には、佐田町にある横見埋没林公園・展示棟や、朝日たら跡展示棟が挙げられた。越堂たら跡の整備に伴う維持管理の参考とするため、これらの施設の維持管理について、管理団体から説明を受けながら現状を確認した。

(1) 横見埋没林公園・展示棟

横見埋没林公園・展示棟は、約7万年前の三瓶山噴火による埋没林の一部を公開している施設で、地元の管理団体に出雲市が直接管理業務を委託している。管理団体は、年数回の公園周辺の草刈り、日常的なトイレ清掃と施設の開錠・施錠、公園の巡視のほか、定期的な草刈りや清掃などを行っている。日常管理業務における具体的な留意点や季節ごとによる適切な管理方法、効果的な防犯対策など、実際の維持管理を行うことで見えてくる課題について、越堂たら跡の整備に伴う維持管理の参考となる内容を確認した。

(2) 朝日たら跡展示棟

宮本鍛冶山内遺跡とともに平成18年（2006）1月に国史跡に指定された朝日たら跡は、発掘調査で確認した製鉄炉の床釣りの様子を実際に見学できる展示棟として整備されている。この施設は、見学予約があるたびに地元の管理団体が鍵の開錠・施錠を行っている。

第15表 整備後に想定される維持管理の項目と内容

項目	内 容	備 考
越堂たら跡現地	遺構表示・設置看板などの補修	適宜
	現地周辺の草刈り	年に数回程度
	現地状況の巡視	適宜
	現地周辺の清掃	年に数回程度
ガイダンス施設	展示品などの補修	適宜対応
	施設設備の補修	
	施設周辺の草刈り	年に数回程度
	施設の開錠・施錠	運営体制により要検討
	展示品・空調の管理	
	施設周辺の巡視	適宜
管 理	施設設備の点検	月に数回程度
	施設内外・便益施設などの清掃	月に数回程度

3. 維持管理に係る今後の課題

こうした市内の文化施設では、維持管理に係る業務がある程度限られる場合は、横見埋没林公園・展示棟や朝日たたら跡展示棟などのように管理業務を管理団体に直接委託して運営している。

一方、越堂たたら跡の比較的近くには多伎文化伝習館があり、施設の維持管理のほか様々なイベントや展示を行うなど地域の拠点となっているが、このように維持管理を含め運営に係る業務が多岐にわたる場合には、指定管理者制度による運営体制が多い。

整備後の越堂たたら跡現地やガイダンス施設の維持管理については、越堂たたら跡現地やガイダンス施設周辺の草刈りなどによる環境維持のほか、ガイダンス施設の開錠・施錠や設備の点検および施設内外の清掃などが想定される。これらは横見埋没林公園・展示棟や朝日たたら跡展示棟などで行われている維持管理と概ね同程度の内容であると想定される。

そのなかで他の施設の状況と異なるのは、越堂たたら跡におけるガイダンス施設では文化財に関連する展示品が多く計画されている点であり、これらの管理体制が課題となってくる。施設の開錠や施錠に伴う防犯上の措置を含め、管理が十分にできる施設設備や体制づくりが望ましいが、防犯対策を講じやすい展示品の検討なども必要になってくる。

今後はこうした展示品の検討を含めた運営体制を含め、将来的にどのように維持管理していくのかについて様々な方式を検討しながら、地元と行政が一体となって現地整備や施設設備の内容に見合う最適な方向性を今後模索していく必要がある。



第115図 横見埋没林公園・展示棟



第116図 朝日たたら跡展示棟



第117図 横見埋没林公園・展示棟の視察状況

第3節 今後の展望と課題

1. 田儀浦と口田儀まちなみの整備構想

(1) 現在も残る近世港町の景観

現在の多伎町口田儀にある田儀港は、近世には田儀浦として田儀櫻井家のたら経営を支えた港である。当時は越堂たたらの製鉄に必要な原材料を供給し、越堂たたらや宮本鍛冶屋などで生産した割鉄や銛鉄などを日本海の廻船によって全国各地に出荷して栄えた。そのため、越堂たたらの操業との関連性が極めて深く、越堂たたらの特性を理解するうえで重要な役割を担う。こうした内容は田儀櫻井家文書や鳥屋尾家文書などの文献史料から明らかになった（「田儀櫻井家 たら史料と文書目録」平成21年〔2009〕刊行）。

現在の田儀港と口田儀のまちなみは、近代化に伴う鉄道整備や国道敷設、港湾整備などで近世の状況から変化しているが、今でも当時の港町の景観が残る。近世の廻船問屋の屋敷地や、田儀川と日本海に面して荷物の搬入や搬出に適した建物構造を持つ家屋など、当時の様子を今に伝える。

(2) 整備構想の展望

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想（平成24年〔2012〕11月策定）では、口田儀のまちなみは史跡全体の導入ゾーンの構成要素として挙げられている。建造物などの詳細な状況を把握するために調査を行い、保護していくべき文化財があれば登録有形文化財として登録するなどの措置を検討することが望ましい。

また、田儀櫻井家や田儀浦に関連する文献史料は、地元の積極的な協力もあり現在も新たな発見が続いている。こうした文献史料の収集や読解などを進めることで、越堂たたら跡の歴史的価値の向上を含め、田儀櫻井家のたら製鉄経営の実態を明らかにすることが期待できる。

その他の資料として、口田儀のまちなみの様子が分かれる古写真などが地元に残されており、そうした古写真の把握や保存を図り、後世に伝える必要がある。そのなかで、田儀川や日本海に向かって続く小路や波除けの石垣群など、海岸に面した集落の様子を具体的に知ることができる現在のまちなみについても、現状を記録して後世に残していくことが求められる。

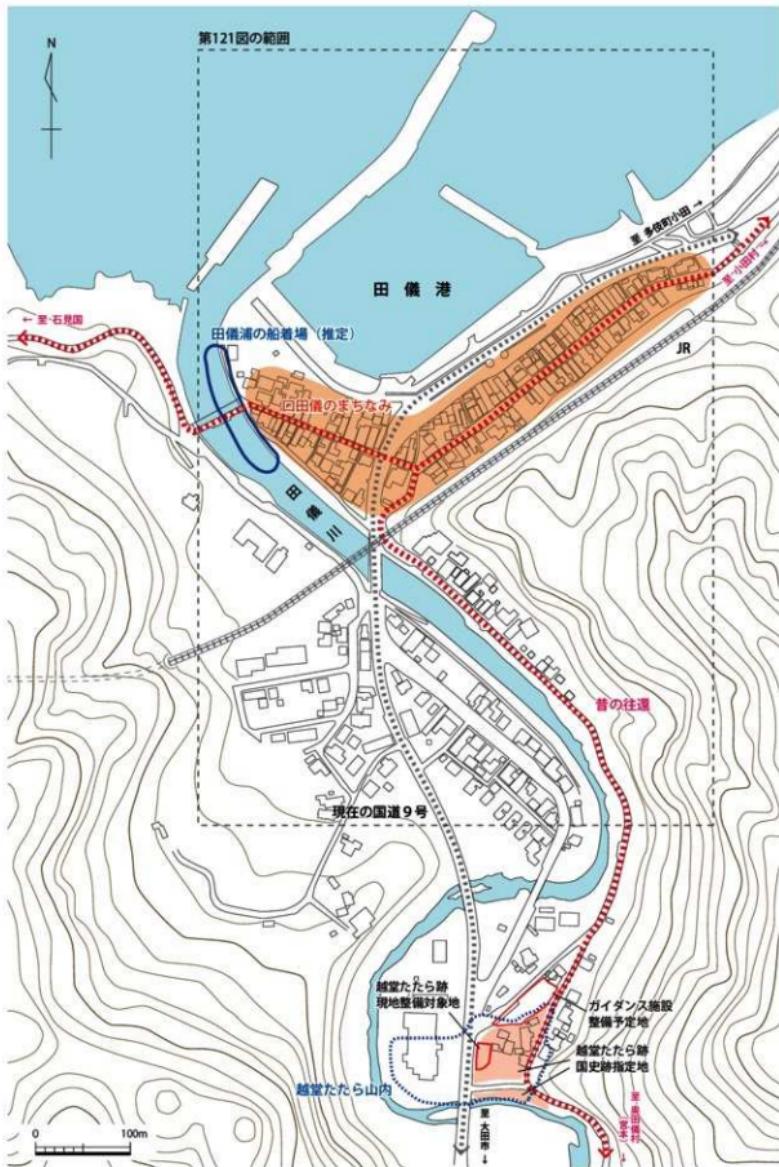
こうした田儀浦と口田儀のまちなみについて、越堂たたら跡周辺から口田儀のまちなみにある文化財を紹介しつつ、越堂たたらの操業を支えた田儀浦の重要性が把握できるような口田儀まちなみマップなどの作成を行い、既存の越堂たたら跡のパンフレットとともに史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の広報や周知の一環として活用することを検討していく。



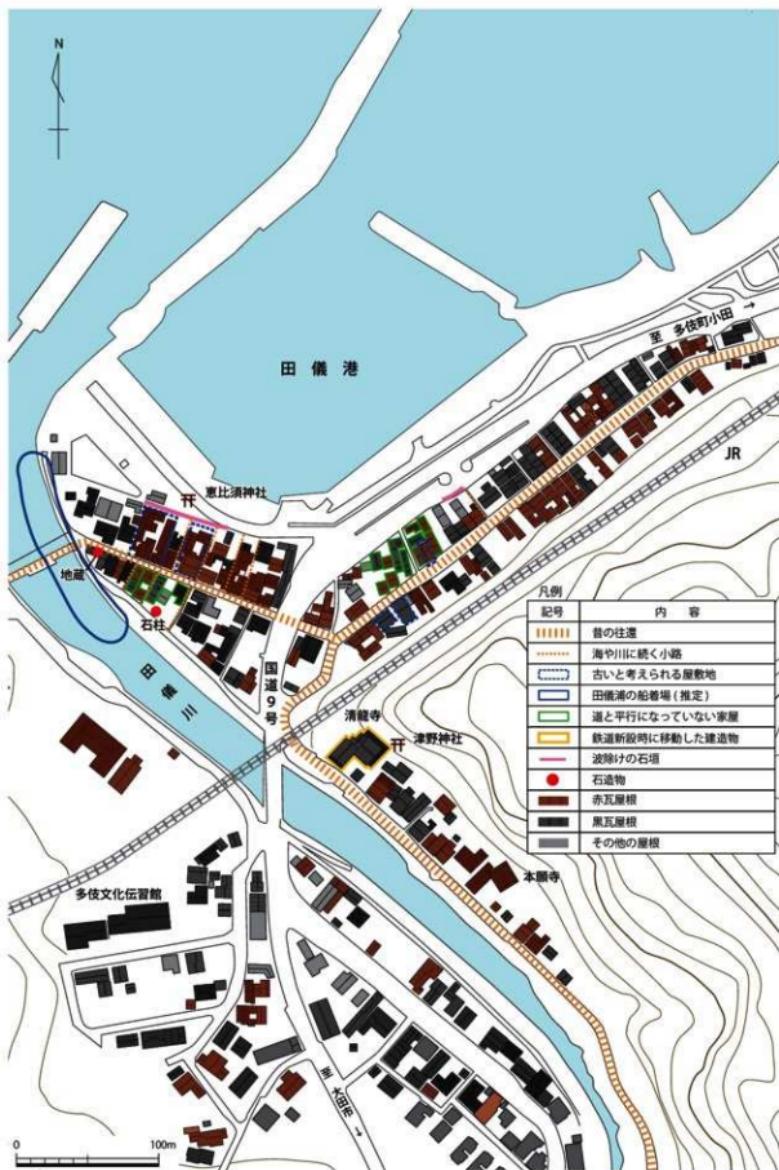
第118図 現在の田儀川と口田儀まちなみ



第119図 大正期の田儀川と口田儀まちなみ



第120図 越堂たら跡と口田儀まちなみ位置図



第121図 口田儀まちなみマップ

2. 広報活動の取り組みと課題

出雲市内の中学校の社会科部総会のアンケート調査でもあったように、田儀櫻井家や田儀櫻井家のたら製鉄遺跡の名称はある程度知られていたが、越堂たたら跡については知名度が低い状況であった。これらは市内外においても同様の傾向を示すと予想され、越堂たたら跡の整備計画を進めると同時に、田儀櫻井家のたら製鉄での越堂たたら跡の役割やその重要性を市内外に浸透させる広報活動が今後の課題である。

(1) 出雲弥生の森博物館における展示計画

出雲弥生の森博物館では、令和元年度（2019）から「田儀櫻井家のたら製鉄」と題した展示を実施しており、複数年度にわたり田儀櫻井家のたら製鉄遺跡を多方面から詳しく紹介する計画としている。出雲の文化財の情報発信に関する役割は、出雲弥生の森博物館の担当ところが大きく、博物館で取り扱うことにより、多くの方が興味を持ため、越堂たたら跡を取り扱った展示を計画し、広報活動を継続的に実施することで、越堂たたら跡の整備の完成までに多くの方々に対してその重要性が訴求できる。

また、基本的には博物館で展示を実施するが、それらの展示パネルなどを巡回展として大型商業施設、市内の公立図書館などで展示することにより、さらなる見学者の拡大が見込める。

(2) たら製鉄関連講座・講演会

田儀櫻井家のたら製鉄に関する講座や講演会を開催することで見学者のニーズを満たし、集客効果も高まるため、ある程度定期的に行われることが望ましい。講座の内容としては、遺跡や文献史料のほか、多伎町の郷土史についても取り上げると幅広い層の集客が見込める。講座や講演会は、多伎文化伝習館などでの講座や田儀櫻井家のたら製鉄遺跡保存会の総会における講演会、また出雲弥生の森博物館における出雲市文化財保護審議会委員講座など多方面での実施により、市内全体での注目度を高める効果がある。

(3) 遺跡のガイド育成支援

田儀櫻井家のたら製鉄遺跡のガイドについて、現在田儀櫻井家のたら製鉄遺跡保存会を中心に、遺跡に精通した会員が精力的に実施しているが、新規のガイドの育成があまり進んでいない現状があると思われる。ガイダンス施設が実際に完成した後の遺跡ガイドの充実には、若い世代を含めた新たなガイドの育成が必要になる。ガイダンス施設では、田儀櫻井家のたら製鉄における越堂たたら跡の役割やその重要性の理解を深めるとともに、新規のガイドの育成が促進されるように支援できる活用方法を同時に検討する必要がある。

3. 計画的かつ継続的な調査研究

史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡保存管理計画（平成20年〔2008〕3月）や史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡整備活用基本構想では、史跡整備を行うと同時に、発掘調査や文献史料の調査などの調査研究を計画的に実施する必要があることが示されている。田儀櫻井家のたら製鉄遺跡は広域に展開し、それぞれのたら場・鍛冶屋で様々な特質を持つ。越堂たたら跡の整備や広報活動に取り組みながら、越堂たたら跡を含めて田儀櫻井家のたら製鉄遺跡全体の調査研究を継続的に進めていき、史跡田儀櫻井家のたら製鉄遺跡としての文化的・歴史的な価値の向上に努めることが望ましいと考えられる。

**史跡田儀櫻井家たら製鉄遺跡
越堂たら跡整備基本計画書**

策 定 日 令和3年（2021）3月 4日

発 行 日 令和3年（2021）3月 30日

編集・発行 出雲市
(事務局：出雲市市民文化部文化財課)
〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
出雲弥生の森博物館内
TEL (0853) 21-6893
FAX (0853) 21-6617

印刷・製本 株式会社 報光社



越堂たら跡高殿全景